

南久保遺跡

伊勢崎警察署庁舎移転新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

二〇〇九

群馬県警察本部
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

南久保遺跡

伊勢崎警察署庁舎移転新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2009

群馬県警察本部
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

南久保遺跡

伊勢崎警察署庁舎移転新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

2009

群馬県警察本部
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

序

伊勢崎市は、平成17年1月、佐波郡赤堀町、東村、境町との合併で人口21万人、県中部の中核都市へと飛躍しました。これまでの前橋市だけではなく、東は桐生市、太田市と接するまでに市の範囲は広がり、これに伴い、伊勢崎警察署は庁舎を新築して移転することとなりました。その場所として選ばれたのが、古代佐位郡の中心地と推定されている殖蓮地区の一角を占める鹿島町です。

殖蓮地区には、県内を代表する古代寺院の一つ「上植木廃寺」、地域の有力豪族の墓と目される「丸塚山古墳」、古墳時代の豪族居館「原之城遺跡」というように、地域を代表するだけでなく、県内の歴史を語る上でも欠くことのできない遺跡が数多くあります。

本書は、平成20年4月から同年5月に当事業団が発掘調査を行いました南久保遺跡の調査報告書です。

南久保遺跡は、伊勢崎市鹿島町に所在する古墳時代から平安時代の複合遺跡です。調査の結果は、縄文時代の土器や石器にはじまり、近世の遺構や遺物まで貴重な資料が出土し、殖蓮地区の重要性をあらためて認識させる内容があります。その中でも古代の道路状遺構は、幅が6m、両側に側溝を備えた本格的なもので、東600mにある佐位郡衛正倉が発見された三軒屋遺跡との関係できわめて重要な遺構といえます。

このたび、こうした調査の成果を掲載した埋蔵文化財発掘調査報告書を刊行することになりました。本報告書が考古学研究者に限らず、郷土史を研究する県民の皆様に活用されることを期待しております。

最後になりますが、発掘調査から報告書の作成にいたるまで、群馬県警察本部、群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、地元関係者等からは種々、ご指導、ご協力を賜りました。関係各位に厚くお礼申し上げます。また、発掘調査および整理業務に携わった関係者の労をねぎらい序とします。

平成21年9月

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 須田 栄一

例 言

- 1 本書は、伊勢崎警察署庁舎移転新築事業に伴い発掘調査された、南久保遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡は、群馬県伊勢崎市鹿島町532-1,533-1,534-1,536-1,537-1番地に所在する。
群馬県遺跡情報検索システム WEB 版 伊勢崎市遺跡番号 ISO29
- 3 発掘調査および整理事業は、群馬県警察本部の委託を受けた財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が行い、群馬県教育委員会がその調整を行った。
- 4 発掘調査 平成20年4月1日～同年5月31日
整理期間 平成21年4月1日～同年6月30日 履行期間 平成21年4月1日～同年9月30日
- 5 発掘調査および整理事業体制
管理指導 高橋勇夫、須田栄一、木村裕紀、津金澤吉茂、相京建史、中束耕志、飯島義雄、石坂 茂、笠原秀樹
事務担当 原 雅信、大木紳一郎、佐嶋芳明、國定 均、須田朋子、吉田有光、斉藤恵利子、柳岡良宏、矢島一美、齋藤陽子、田口小百合、高橋次代、今井もと子、内山佳子、佐藤美佐子、本間久美子、北原かおり、狩野真子、若田 誠、武藤秀典
調査担当 佐藤明人、小林洋一
整理担当 編集 女屋和志雄 実測 関 晴彦、橋本 淳、岩崎泰一 デジタル編集 齊田智彦
整理作業 金属器保存処理 関 邦一、津久井桂一、増田政子、多田ひさ子
デジタル写真図版作成 牧野裕美、市田武子、酒井史恵、廣津真希子、安藤美奈子、矢端真観、高梨由美子、横塚由香、須藤絵美、下川陽子
- 6 本書作成の担当は次のとおりである。
編集 女屋和志雄 デジタル編集 齊田智彦
執筆 遺物観察 土器 関 晴彦、縄文土器 橋本 淳、石器 岩崎泰一
遺構写真撮影 調査担当 佐藤明人 小林洋一
遺物写真撮影 佐藤元彦
テフラ分析 プラントオパール分析 (株)火山灰考古学研究所
- 7 保管については、出土遺物は群馬県の所有となり、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団で管理し、群馬県埋蔵文化財調査センターに収納される。
- 8 発掘調査および本書の作成では、以下の方々にご協力ならびにご指導をいただいた。記して感謝の意を表します(敬称略)。
群馬県教育委員会、伊勢崎市教育委員会、坂井秀弥、右島和夫、坂爪久純、早川隆弘、勢藤 力、川道 亨、出浦 崇、小宮俊久、須永光一

凡 例

- 1 挿図の方位は、座標北を表している。座標系は、世界平面直角座標系（国家座標）第IX系である。
- 2 遺構断面実測図、等高線に記した数値は標高を表し、単位はmを用いている。
- 3 挿図の縮尺は、特に記載がない限り以下のとおりである。
遺構 住居跡 1/60 カマド 1/30 掘立柱建物跡 1/60 土坑 1/60 道路状遺構 1/200 1/50
溝 1/100 1/200 1/50 ピット 1/100 1/60 水田 1/100 1/200 畠 1/100 1/200
1/150 全体図 1/400
遺物 1/4 甕・短頸壺 1/3 杯 1/1 石鏃 1/2 石核 1/3 石斧・敲石・凹石 1/4 石皿
1/1 銭 1/2 釘・鉄鏃・鉄錠
- 4 写真図版の縮尺率は、挿図とは一致しない。
- 5 土器の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』によった。内外面で違う場合は外面で表し、斑模様の場合には中間色で表現をしている。
- 6 遺物観察表にある残存状態は、口縁、胴部、底部の各部位を示して全体の割合を数値で示した。
- 7 テフラの呼称は、以下の略称を使用した。
浅間A軽石 As-A 天明3年（1783）浅間B軽石 As-B 天仁元年（1108）
浅間C軽石 As-C 4世紀初頭
- 8 本書で掲載した地図は、下記のものを使用した。
第1図・第4図 国土地理院発行地形図1：50,000「前橋」「高崎」
第3図 国土地理院地勢図1：200,000「宇都宮」『本関町古墳群』第5図

目 次

序・例言・凡例・目次

第1章 調査の経過

- 1 調査に至る経過
- 2 調査の経過
- 3 調査の方法
- 4 遺跡の位置と地形

第2章 検出された遺構と遺物

- 1 概要
- 2 住居跡
- 3 畠
- 4 道路状遺構
- 5 水田
- 6 溝
- 7 土坑
- 8 掘立柱建物跡
- 9 ピット

第3章 自然科学分析

- 1 南久保遺跡の土層とテフラ
- 2 南久保遺跡におけるプラントオパール分析

第4章 調査のまとめ

遺物観察表 写真図版

抄録 奥付

付図 1 南久保遺跡全体図 1：400

2 南久保遺跡古墳・奈良・平安時代全体図 1：400

3 南久保遺跡中世全体図 1：400

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

南久保（みなみくぼ）遺跡は、伊勢崎市鹿島町494番地ほかに所在し、古墳、奈良、平安、各時代の遺跡として認定されていた（「群馬県遺跡情報検索システムWEB版」）。しかし、これまでに発掘調査されたことはなく、遺跡の性格等、詳細については不明であった。唯一、本調査には至らなかったが無線基地局の建設に伴い、平成18年2月、伊勢崎市教育委員会が試掘調査を行い、竪穴状遺構と溝状の遺構を検出している（「平成17年度市内遺跡確認調査報告書」2006）。

平成19年、伊勢崎警察署は、老朽化のため今泉町から鹿島町に新築による移転が計画された。この工事に先立ち、群馬県警察本部より県教育委員会文化課（以下、文化課）に、建設地内の埋蔵文化財の有無についての照会があった。これに対して、建設予定地である伊勢崎市鹿島町532-1番地ほか一帯は、南久保遺跡の一角に含まれていることが回答された。さらに協議した結果、建築工法上、遺跡の保護は難しいことから試掘調査することに合意、遺構が確認された場合には本調査が必要になる旨も併せて伝えられた。文化課は、群馬県警察本部の依頼をうけて試掘調査を実施したところ、溝、土坑が検出され、さらに火山灰や水田に適した土壌のあることが判明した。文化課は、この試掘調査の結果と、本調査の必要があることを県警察本部に回答し、併せて伊勢崎市教育委員会にも試掘調査の結果を通知した。

一方、同年3月21日、文化課は、財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団（以下、事業団）に発掘調査の委託方針を示し、事業団はこれを了承した。この調整のもとに、平成20年4月1日付けで群馬県警察本部と事業団との間で発掘調査の委託契約が締結された。ここに、伊勢崎警察署庁舎移転新築事業の実施にあたり、埋蔵文化財の保護を目的に発掘調査対象区全面の発掘調査が実施されることとなった。



第1図 南久保遺跡位置図

第1章 調査の経過

第2節 調査の経過

調査は、平成20年4月1日から同年5月31日の2ヶ月間で行われた。1～4区いずれもが2面、一部は3面にわたっての調査となり、遺構量も試掘調査の算定を大きく上回る結果となった。契約期間は、当初5月15日までとしていたが、この遺構量の増大に伴い契約を変更して5月31日まで延長した。以下、調査日誌から進捗状況を抜粋する。

4月

1日から10日までの間に、申請書類の作成、現地にて県文化財保護課、県警察本部、掘削請負会社、重機会社と調査区域の確認、調査工程を協議する。さらに、調査をするにあたって地元鹿島町自治会区長、伊勢崎市教育委員会へのあいさつ、並びに協力を依頼する。

11日、1区から重機により表土掘削を開始。遺構面までは深さが約60cm、As-Bを掘削の鍵層とする。ただちに遺構確認をして溝、土坑を検出する。14日から2区の表土掘削、17日からは遺構確認を開始する。22日、1区、2区、4区で遺構精査を開始する。1区では帯状に硬化面が検出され、東西に道跡のあることが判明した。東600mには佐位郡衙正倉跡三軒屋遺跡があり、道跡との関係が注目されるとともに今後の調査の展開に期待が持たれる。2区では南北方向の溝が多数検出され、掘立柱建物跡1棟が重複し、下面には畠がある。調査の開始時の予測に反して、遺構量の増大が確実となった。4区は、点々と残るAs-Bを遺構検出面とした。調査区を東西に二分するように水田と畠が併存、これに重複して溝、土坑が検出された。溝は、水田灌漑用だけでなく、屋敷を区画するものがある。最も広い4区でも、調査は2面かそれ以上になることが明らかとなる。23日、3区1面の全景撮影。道跡について、伊勢崎市教育委員会勢藤 力、川道 亨両氏に指導を仰ぐ。25日、県文化財保護課諸田氏が進捗状況確認のため来跡。28日、2区1面の調査を終了する。30日、上毛新聞社久保記者取材。

5月

1日、1区1面、3区1面の調査を終了する。道跡調査の指導で伊勢崎市教育委員会坂爪久純氏、早川隆弘氏、出浦 崇氏来跡。2日、1区と3区で2面の調査を開始する。(株)火山灰考古学研究所早田氏プラントオパール分析のため来跡。分析は、泥流の成因と年代、そこでの耕作の有無、水田がAs-B下のほかにもあるのか、存否を目的とする。サンプルは、2区、4区で採取した。成果は、第3章参照。この頃までに各区で弘仁九年の地震と思われる噴砂が確認される。道跡との関係や畠の年代観を知る資料となる。7日、県文化財保護課増田、諸田両氏が進捗状況確認のため来跡。8日、3区2面の全景撮影。大部分を畠が占め、状態も良い。4区では水田の調査を開始する。9日、1区3面の調査開始。道跡と重複している15号以下の溝、道跡の硬化面が該当する。12日、3区の調査終了。13日、2区の調査が終了する。県警会計課正田課長、白石室長補佐ほか進捗状況の確認のため来跡。調査期間の延長を協議する。14日、道跡の指導のため伊勢崎市教育委員会勢藤 力氏、太田市教育委員会小宮俊久氏、須永光一氏来跡。15日、県文化財保護課松田 猛氏、深澤敦仁氏来跡。17日、上空からの調査区全景撮影。21日、文化庁坂井秀弥主任調査官、県文化財保護課西田主監、松田 猛氏、右島和夫氏が道跡の調査指導で来跡。1区道跡全景撮影。27日、4区調査終了。(株)火山灰考古学研究所早田氏プラントオパール分析の成果報告。29～30日、器材撤収。31日、プレハブ撤去、調査区埋め戻し、調査を終了した。調査区を県警察本部に引き渡している。

第3節 調査の方法

1 調査区

調査は、4箇所の建築物が対象で、面積の合計は4,200㎡である。1区（882㎡）が附属棟2と呼ばれ、2区（636㎡）が附属棟1、3区（481㎡）が射撃場、4区（2,201㎡）が警察署庁舎である。南側から北に向かって1区、2区、3区、4区と呼称したが、1区の西端は3区とLの字形に接続している。調査区の基準杭は、世界座標系により5mを単位に設定した。水準点は、1区と2区が71.30m、4区が71.60mである。

2 調査手順

調査は、各区ともに2面、一部では3面にわたって行われた。1面は、基本土層Ⅱ層まで重機で掘削、As-Bを鍵層として遺構の検出、人力による精査を行った。2面以降もこれに続くが、人力による精査およびトレンチ調査を行い重機による掘削、遺構の確認、精査を行った。

3 実測方法

記録図面類は、住居跡 1/20、土坑 1/20、道路状遺構、溝 1/40 を基準に作成した。全体図は、各遺構の個別図を基にして編集し、1/100、1/200 で作成した。デジタル測量を基本とし、業者に委託した。

4 遺物取り上げ

遺物量は、収納箱8箱である。内訳は、縄文土器4箱、その他土器類1箱、石器類3箱である。遺物は、遺構ごとに取り上げた。遺構外の遺物については、グリッドを単位に取り上げた。なお、確認作業中でグリッドを特定できないものは調査区一括とした。遺物の洗浄は、対象を選別した上で業者に委託した。

5 写真撮影

遺構は、調査の担当が撮影した。全景、遺物出土状態、土層堆積状態等撮影し、その他特徴的な遺物等については接写した。調査区の全景は、業者委託で撮影した。

6 基本土層

調査区は、粕川左岸に広がる水田地帯の中にある。河道に面した自然堤防の一角と思われ、基盤は扇状地の礫層、その上にロームもある。傾斜はわずかで、1区と4区の差は30cmである。土層は、調査区を異にしても色調に差がある程度、安定した堆積状態であったといえる。ただ、粕川の影響は大きく、氾濫の跡がⅤ層からⅧ層に頻繁にみられる。安定したのは縄文時代以降、河道からそれたのが理由の第一であろう。それでも、溝には大量の細砂が流れ込んでいるなど河川の影響力の強かったことがわかる。

I層 天明浅間関係火山灰を含む。現在の水田耕作土

Ⅱ層 As-B 混土層 黒褐色

Ⅲ層 古墳時代以降の泥流起源の層、黄褐色～浅黄色の斑状、又はブロック状を呈する。

Ⅳ層 黒褐色土 上層のⅣa層はAs-C細粒を含み、下層のⅣc層はAs-C細粒を含まない。

Ⅴ層 黄褐色土 縄文時代中期の土器包含層

Ⅵ層 灰褐色～黄褐色土 氾濫層

Ⅶ層 黒褐色土 黒ボク起源土

Ⅷ層 氾濫層の互層

Ⅸ層 ローム漸移層 黄褐色～暗褐色

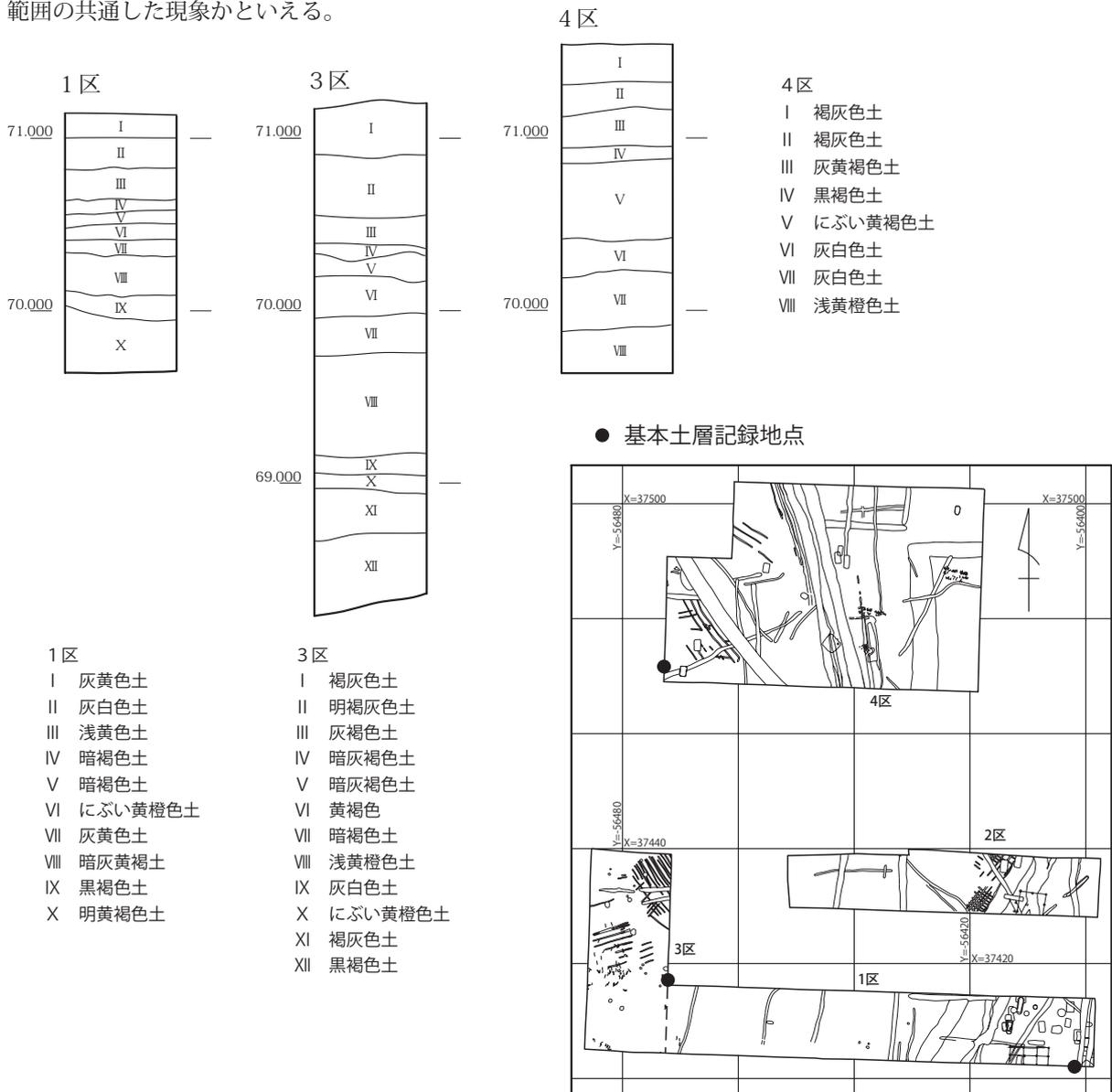
X層 ソフトローム 黄褐色、As-YP が混入

XI層 As-YP 厚さ 20cm

第1章 調査の経過

火山灰は、As-Bが水田を覆って分布している。厚さは、良好な状態の箇所でも最大5cm、大半はⅡ層で見られるように混土化している。As-Cの1次堆積層はなく、Ⅳ層への混入が進んでいる。Ⅲ層は遺跡の西を流れている粕川の氾濫による土層とみられ、色調、細砂などのブロックの状態から少なくともⅢ層以上に細分することができる。大きな時差はなく、土質の点でも良く似ている。

Ⅵ層以下は、4区の深掘り写真と調査時の所見によるもので記録した図面はない。Ⅺ層As-YPまでは、Ⅴ層から約2mもあり、縄文時代中期以降、度重なる氾濫のあったことを読み取ることができる。その状態は、現地で深掘り作業に立ち会った当事業団岩崎泰一氏によると、かつて上武道路建設で調査した飯土井二本松遺跡で発見された反転したロームの堆積状態と似ていると示唆された。同遺跡は、本遺跡からは北西3.8kmにあり、反転したロームをはさんで上面では縄文時代中期の住居跡、下層では縄文時代前期落とし穴、同中期阿玉台式土器、さらに地点を変えた下層では早期鶴ヶ島台式の土器が出土している。また、北関東自動車道波志江中屋敷東遺跡でも、似たような埋没土層や縄文時代早期の遺構や遺物が出土していて、少なくとも第4図で示した範囲の共通した現象かといえる。



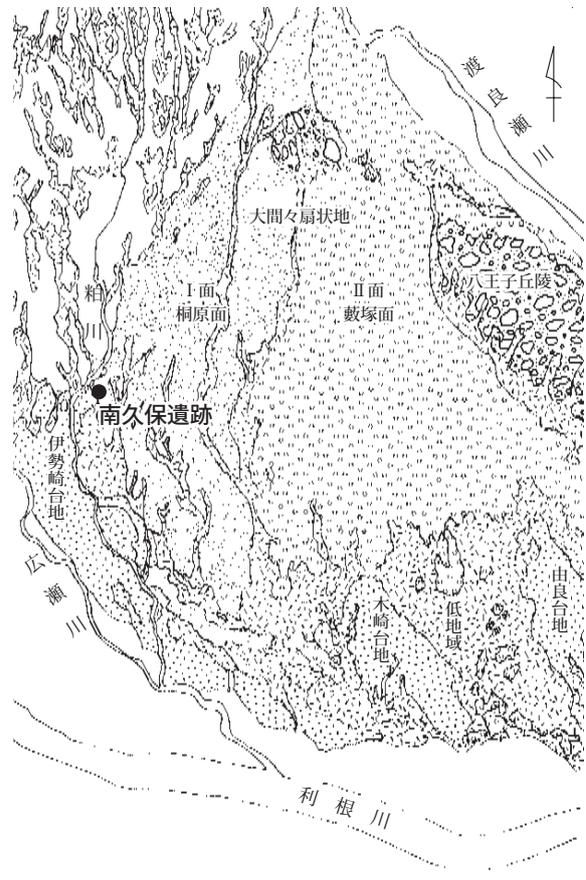
第2図 調査区・基本土層柱状図

第4節 遺跡の位置と地形

1 遺跡の立地

南久保（みなみくぼ）遺跡は、JR両毛線伊勢崎駅の北東1.5km、伊勢崎市鹿島町に位置する。国道462号と北部環状線が交差する南側、標高72m、水田地帯の一角である。地形上は、大間々扇状地桐原面に分類され、遺跡の西側を流れている粕川が桐原面と伊勢崎台地との境界にあてられている。粕川の北には、赤城火山斜面に分類される、梨木泥流堆積物で形成された低い丘陵があり、南端は川を超えて独立した丘となって点在している。近いところでは、北西1kmに華蔵寺山、地蔵山など、南東1kmに八寸権現山がある。目立つ存在ではあるが高くても20mほど、ここには緩い斜面を利用した群集墳など遺跡が多い。今でもマツなどで覆われたままで生産の場としては不向きなところから、このように利用されたのであろう。一方、おもに粕川の左岸、標高85～90m付近には大井戸、掛矢清水、鯉沼、尼ヶ池などの湧水池があり、これらの下流には細長い谷底平野（浸食谷）が発達している（「伊勢崎市史通史編1」1987）。

現況は、圃場整備されていたとはいえ、全くの平坦な状態である。それが調査では、桐原面の砂礫層の上にローム層があり、その上層にAs-YPが堆積していて周囲の台地と同じ堆積状態であることが明らかとなった。さらにその上に厚いローム漸移層までがあり、おそらくは、まだ地形に起伏があったのであろう。それは自然堤防のような所と推定できるが、縄文時代でも中期以降になると氾濫に見舞われている。そのたびにかさ上げされると同時に周囲では平坦化が進み、古墳時代を迎えるころには集落が進出する環境が整いつつあったのではないだろうか。



第3図 周辺地形図・地質図

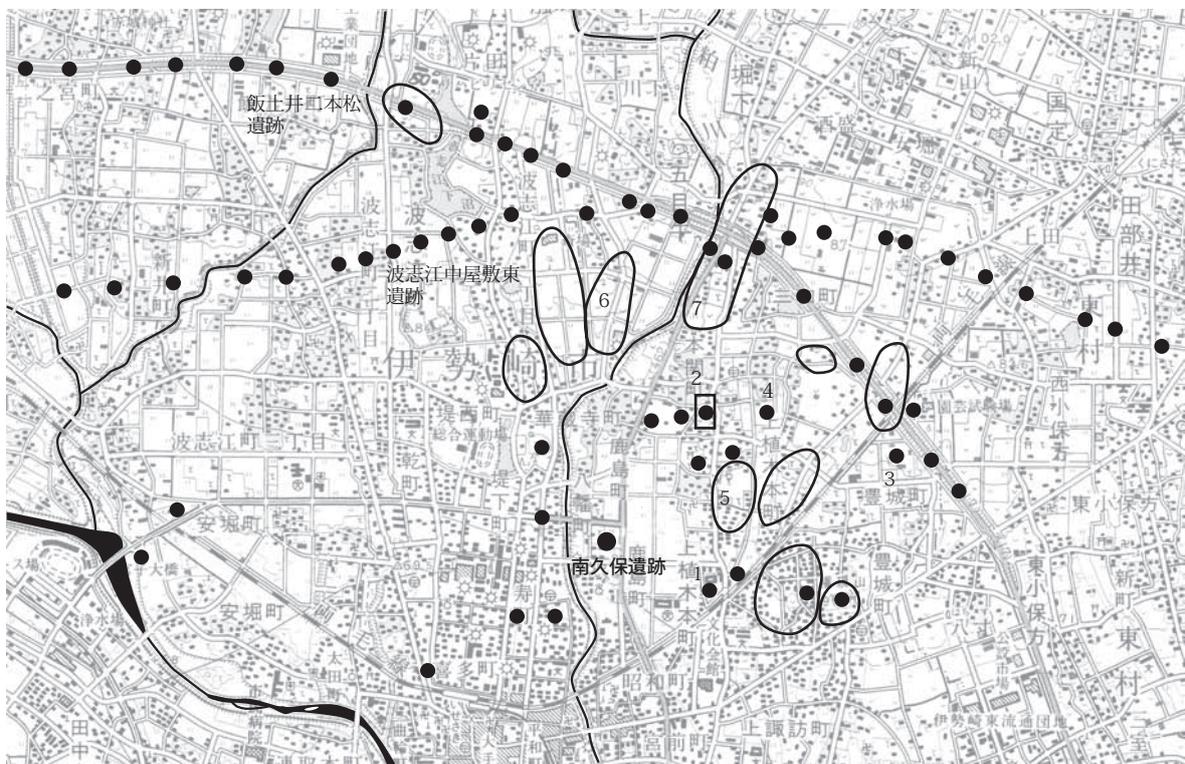
第1章 調査の経過

2 周辺の遺跡

本遺跡の東にある三軒屋遺跡（1）では、佐位郡衙正倉の一部が相次いで発見され、大きな話題となっている。待望の郡衙発見であり、しかも、正倉の一つが「上野国交替実録帳」に記載されている「八面甲倉」と一致するという、二重の驚きである。これまで「殖蓮（うえはす）」地区は、植木が東山道の駅家比定地とされ、さらに7世紀後半に建立された上植木廃寺（2）もあることから、郡の中心地として整備されたのではないかと古くから考えられてきた。一帯には、豪族居館「原之城遺跡」（3）や「丸塚山古墳」（4）「恵下古墳群」（5）といった拠点となる遺跡が点在している。当然、それらの周囲には集落、古墳が多い。「上毛古墳総覧」では、旧伊勢崎市514基のうち、338基がここ殖蓮村に集中している。大半は、後期の群集墳としても地域を測る指標にはなる。旧石器時代以来の歩みは、上武道路、北関東道の建設に係わる調査で明らかとなり、古墳群の様子は圃場整備による「地蔵山古墳群」（6）の調査などで明らかにされている。基盤は古墳時代をかけて作られ、やがて郡の中でも中心地として整備されたとみてよいだろう。

地域の動向は、古墳時代から古代の様子が出浦 崇（2007）、坂口 一（2008）の両氏により分析されている。出浦氏は、郡衙があるのは何よりの証明としても特異な八角倉、初期寺院の造営などから中央と結びつきの強い郡領氏族がいた、と想定している。郡内に開発の画期は二つあり、大規模な灌漑用水路、須恵器窯などから郡境を超えて活躍できる有力者がいた、とも見ている。一方の坂口氏は、「本関町古墳群」（7）に対応させて集落立地に湧水点が深く関係している、と述べている

- 参考文献 伊勢崎市教育委員会『三軒屋遺跡Ⅰ－上野国佐位郡衙正倉跡の調査』伊勢崎市文化財調査報告書第79集 2007
伊勢崎市『伊勢崎市史通史編1 原始古代中世』1987
出浦 崇「上野国の地域開発－佐位郡内における集落の変遷－」『古代文化』第59巻2号 2007
坂口 一「群馬県伊勢崎市・本関町古墳群と周辺集落の動向－集落変遷と湧水点との因果関係－」
『本関町古墳群』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008



第4図 周辺遺跡

第2章 検出された遺構と遺物

1 概要

調査は、全体が2面、さらに1区と4区では3面まで行われた。検出した遺構は、次のとおりである。

1区 住居跡1軒、掘立柱建物跡1棟、土坑24基、溝18条、ピット5基、道路状遺構1条（3区に続く）

2区 掘立柱建物跡1棟、土坑3基、溝13条、ピット3基、畠1箇所

3区 土坑6基、溝2条、道路状遺構1条、ピット15基、畠2箇所

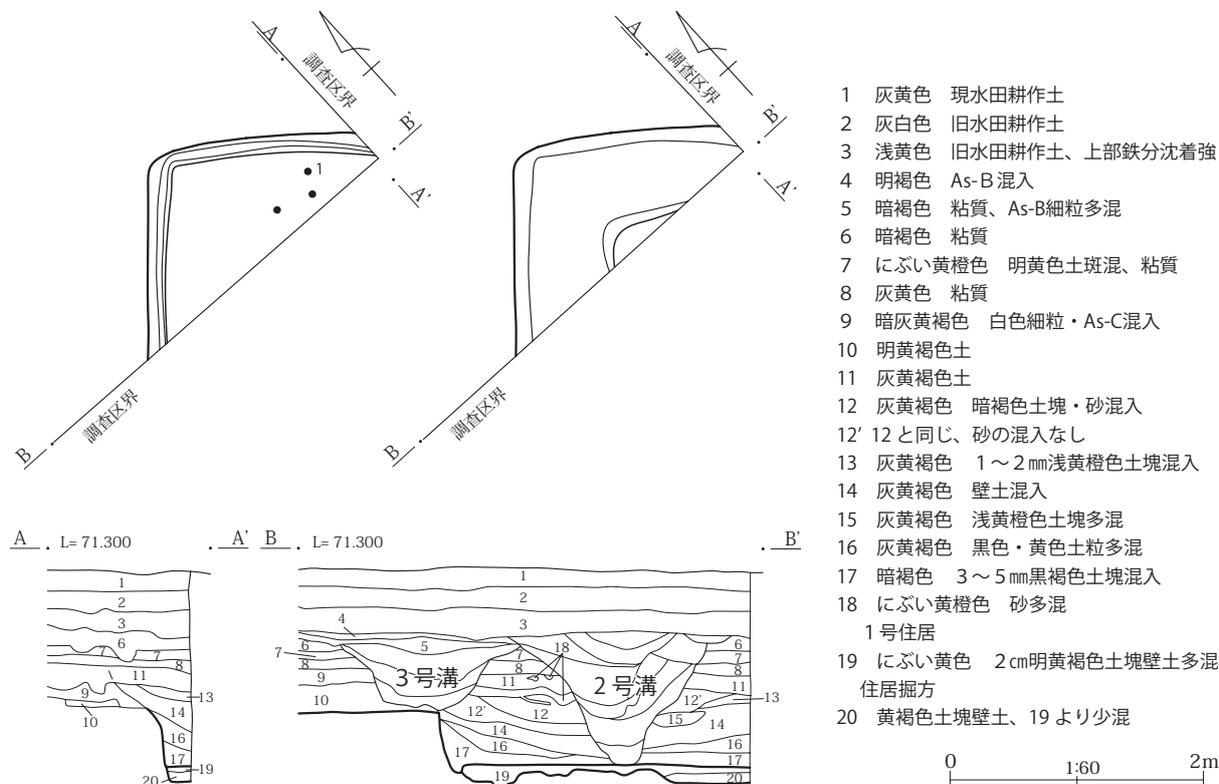
4区 住居跡1軒、土坑8基、集石1基、溝25条、水田、畠

これらは、古墳時代、奈良時代、平安時代、中世、近世に分けられる。出土した遺物は、収納箱にして8箱と少なく、しかもほとんどが包含層からの縄文土器である。遺構の時期判定は、遺物、遺構同士の重複のほかに、As-Bなどの火山灰、弘仁九年の地震による噴砂を鍵層とした。遺構番号は、調査区ごとに付けられている。しかし、溝の中には調査区が違っていても同一と見られるものがあり、その旨を本文中に記した。なお、水田や畠は、遺存状態が良好な箇所を調査したが調査範囲の全体に広がっていたと見られる。

2 住居跡

1区1号住居跡（第5・7図 図版2・13）

概要 調査区南東隅の2面で北西隅だけを検出。2号溝、3号溝と重複し、溝よりも古い。形状 推定方形
規模 北東1.64m以上、北西1.75m以上 残壁高45cm、ほぼ垂直に立ち上がる。床面 検出したのは一部であるが平坦、堅緻な様子が見られた。北東の壁際で幅20cm前後、深さ10cm前後の溝が検出された。しっかり



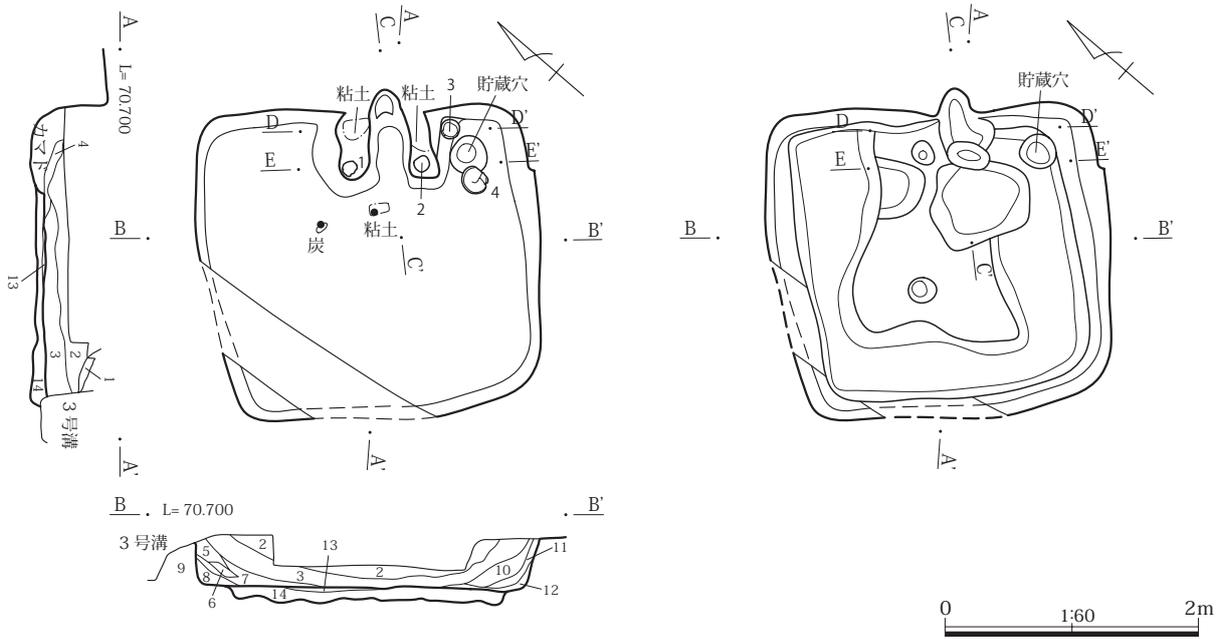
第5図 1区1号住居跡遺構図

第2章 検出された遺構と遺物

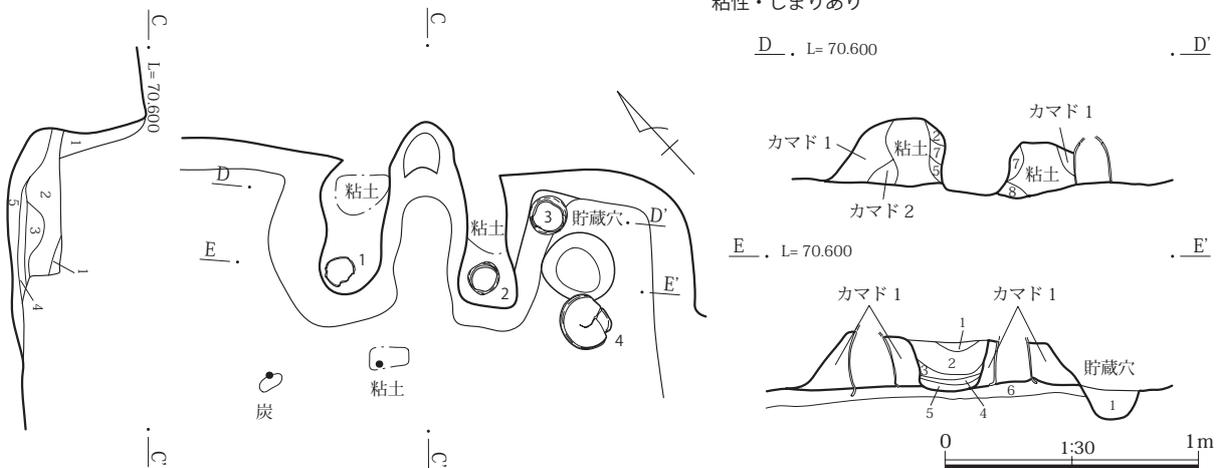
とした掘り方で全周している可能性がある。遺物 床の近くで土師器の杯の破片が出土。これを含めても遺物は少量、しかも細片である。時期 古墳時代後期

4区1号住居跡（第6・7図 図版2・13）

概要 3号溝の調査中に法面で検出。2回の建て替えがある。形状 隅丸方形 規模 長軸2.72m、短軸2.47m、主軸方位N47° E、残壁高46cm、壁際に溝はない。床面は平坦で堅緻、掘り方では貯蔵穴ほどの穴が一面に検出されている。しかし、その半数ほどは浅くて鋤か鍬の掘削痕である。貯蔵穴 方形、長軸30cm、短軸29cm、深さ21cm カマド 東壁のほぼ中央部に位置する。全長83cm、焚き口幅21cm、高さ22cm、両袖口に長襖を伏



- | | |
|-----------------------------|--|
| 1 灰黄褐色 細砂多混、3号溝より新しい溝、東壁部壁土 | 8 にぶい黄橙色 9の壁土多混 |
| 2 灰黄褐色 細砂混入 | 9 黄褐色土 |
| 3 灰黄褐色 黒褐色土塊混入 | 10 灰黄色 褐色土塊壁土混入 |
| 4 褐灰色 淡黄色土（カマド粘土）粒混入 | 11 灰黄色 黒褐色土塊混入 |
| 5 灰黄褐色 9の壁土混入 | 12 灰黄色 淡黄色細粒壁土混入 |
| 6 灰黄褐色 5の壁土混入 | 13 暗灰黄色 黄色砂少混、硬化面粘性あり、しまり強 |
| 7 黒褐色 黒色土塊混入 | 14 暗褐色 1mm白色軽石・2~5mm砂・1~3cm黄色土塊少混、粘性・しまりあり |



第6図 4区1号住居跡遺構図

2 住居跡

せて対に置き、これを芯にして粘土を葺く。焚き口の幅からみて1穴式。遺物 カマドの袖に使われ長甕のほか右袖脇にあったのが丸胴甕、さらに壁寄りで伏せた小型の長甕1個体がある。この4個体を除いても数は少なく、覆土に混入している破片そのものも同様である。時期 古墳時代後期、甕の特徴から6世紀代でも中頃から後半とみられる。

カマド

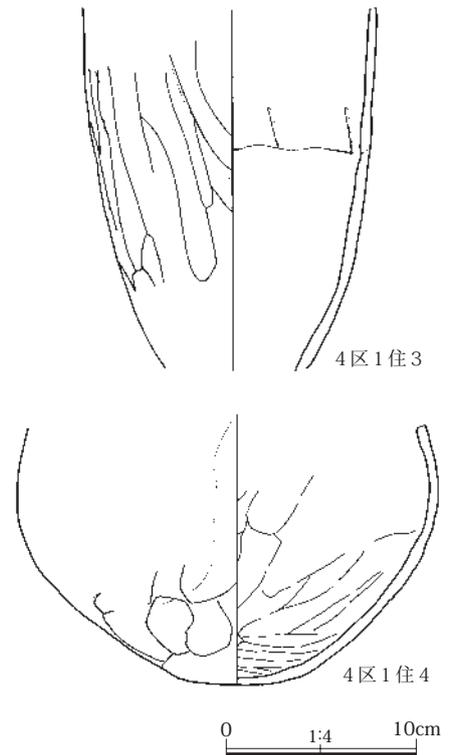
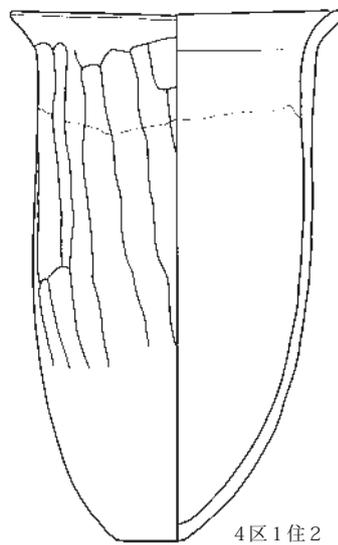
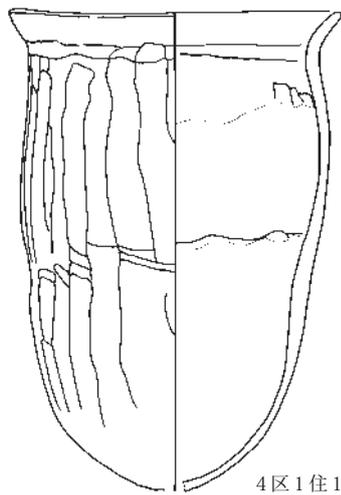
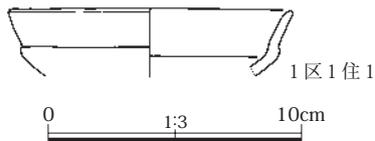
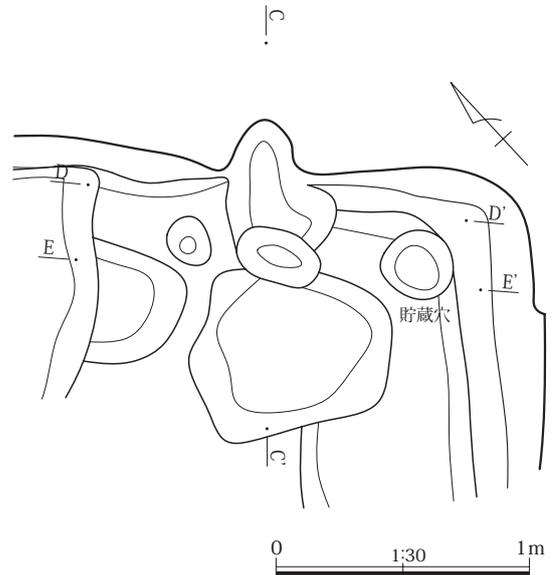
- 1 褐色 1~2mm白色軽石少混、粘性・しまりあり、1住1と同じ
- 2 灰色 1~2mm白色軽石・5mm褐色土塊少混、粘性・しまりあり、1住4と同じ
- 3 灰色 1~3cm白灰色粘土塊多混、粘性・しまりあり
- 4 明灰色 灰多混、粘性あり、しまり弱
- 5 黒色 炭粒・5mm炭・5~10mm白灰色粘土塊少混、粘性・しまりあり
- 6 住居の掘方
- 7 橙色粘土 被熱赤変、天井の崩落土、しまり・粘性あり
- 8 暗褐色 1mm白色軽石少混、粘性・しまりあり

カマド1 灰色 5mm白灰色粘土多混、1mm白色粒少混、粘性あり、しまり強

粘土 白灰色粘土 粘性あり、しまり強

カマド2 灰色 5mm白灰色粘土多混

貯蔵穴 暗灰色 1mm白色粒少混、粘性・しまりあり



第7図 4区1号住居跡遺構図、1区1号・4区1号住居跡遺物図

3 畠

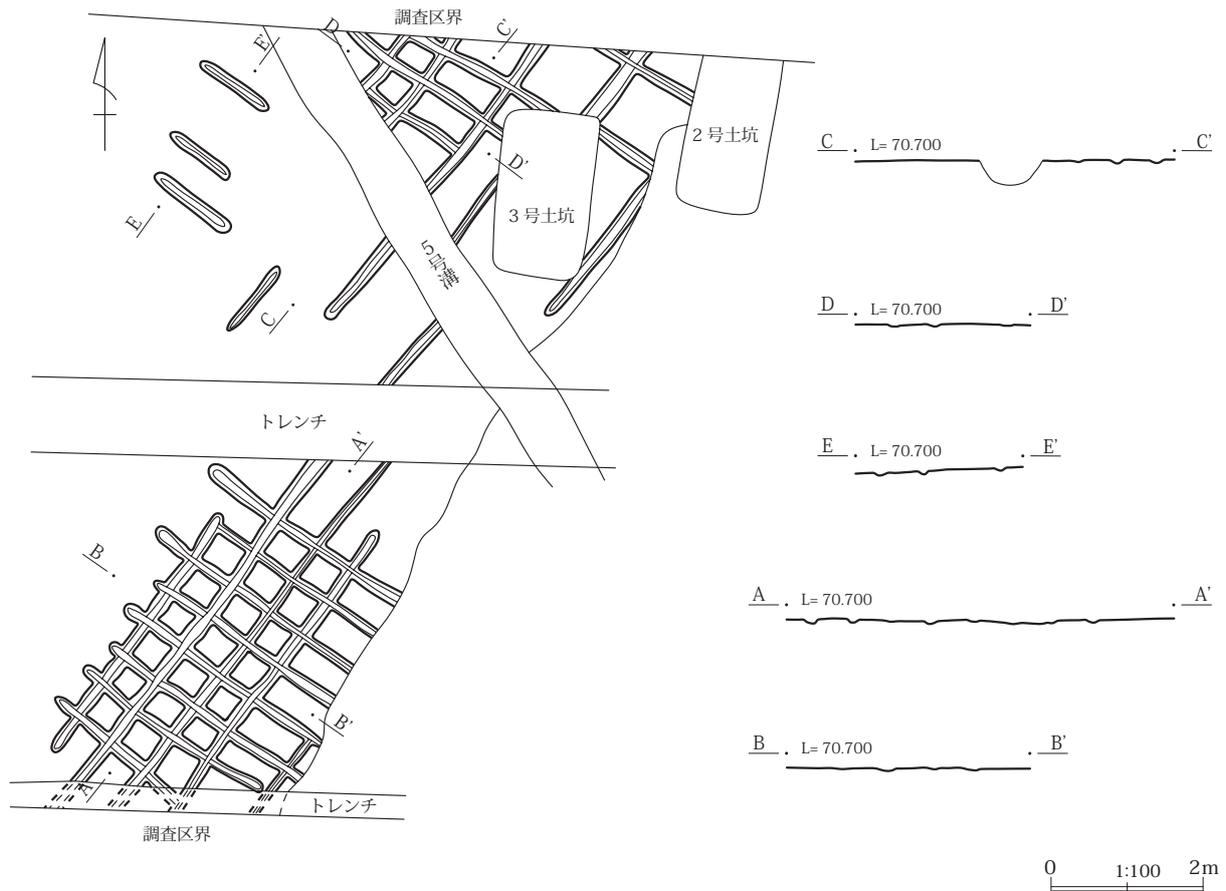
2区畠 (第8図 図版12)

概要 調査区中央の1面、調査区の幅一杯で南北11.5m、東西6mの範囲で6号溝などの溝、土坑と重複して

第2章 検出された遺構と遺物

検出。そのいずれよりも古い。調査時には、横断している試掘トレンチの北側を1号耕作痕、南側を2号耕作痕と分けて記録をしたが、本報告では2区畠として一括して報告する。

耕作痕の特徴 時期を異にするとみられる2つの方向がある。N37° E、北東から南西方向のものが試掘トレンチをはさんで北で6条、南で5条検出されている。これに対してN60° W、直交する北西から南東の方向のものが北で7条、南で8条検出されている。新旧の関係は、掘り方が浅いこと、覆土に差違が見られなかったことから明らかにできなかった。耕作痕は、幅15cm前後、深さ1～5cm、畝間は40～50cmである。3区、4区で検出されている畠と同一のものである。時期 古代、弘仁九年（818）の地震以前



第8図 2区畠遺構図

3区畠（第9図 図版12）

概要 調査区の中でも1区と交差している北側の一帯、南北約20m、東西約14mの範囲で検出されている。東側が1面、西側は上下2面で検出されているが一括をした。重複している1号・2号溝、4号土坑より古く、西側で重複している噴砂よりも古い。噴砂と耕作土の様子は第9図に示した。また、畠の南端は、道路状遺構で削平されたようで、ここにも時代性が現れている。

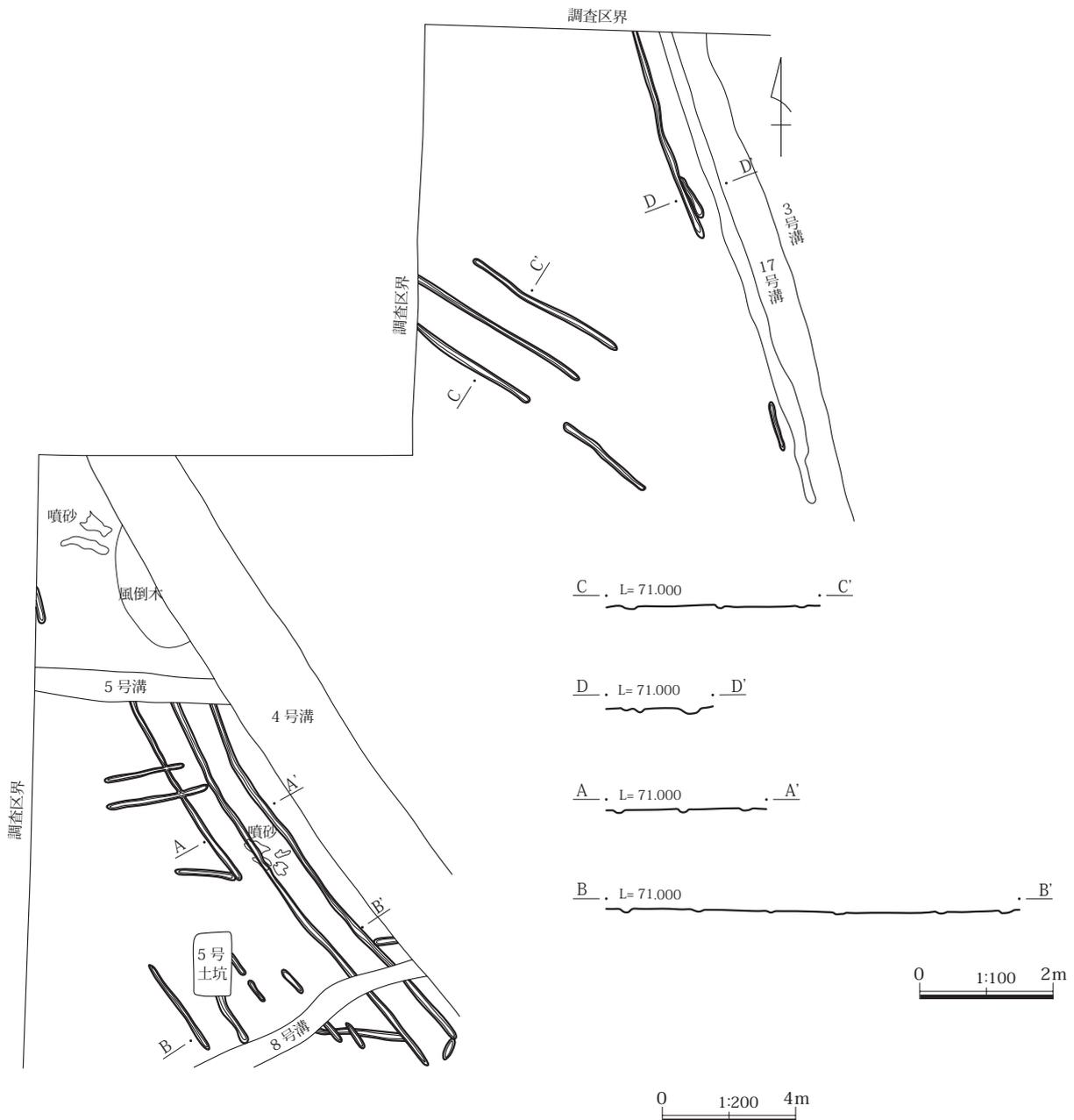
耕作痕の特徴 西側ではN68～73° Eの1方向、東側ではN41° EとN21° Wの直交する2方向がある。西側は、方向にわずかなずれがあり、一部で重複もしているが東の端を揃え、1区画とみてよいだろう。それに対して東側は、同じ区画としても方向は違い、重複をしていることがわかる。ただし、全く時期を異にするというのではなく、あったとしても耕作の時期が違う程度のものであろう。耕作痕は、幅が12～21cm、深さは1～7cmである。時期 古代、弘仁九年（818）の地震以前

第2章 検出された遺構と遺物

4区畠（第10図 図版2）

概要 調査区の西側一帯に広がっていたとみられるが、3号溝の西側、4号溝の西側がそれぞれ良好な状態である。3号溝の西側では、南北約13m、東西約10mの範囲にN60° WとN17° Wの2方向がある。4号溝の西側では、南北約18m、東西7mの範囲にN35° WとN86° W、N78° Eの3方向がある。噴砂より新しく、5号土坑、4号・5号・8号溝より古い。3号溝より古いが17号溝は畠の一部とみられる。同様に11号・14号・15号溝にもその可能性がある。調査面の違いからすれば、水田よりは古い。また、噴砂とは4号溝の脇で重複しているが、3区と同じように畠の方が古い。

耕作痕の特徴 幅が広いものは20cmを超しているが12～15cm前後、深さ1～3cmである。間隔は85～96cm、104～110cmである。時期 弘仁九年（818）の地震以前



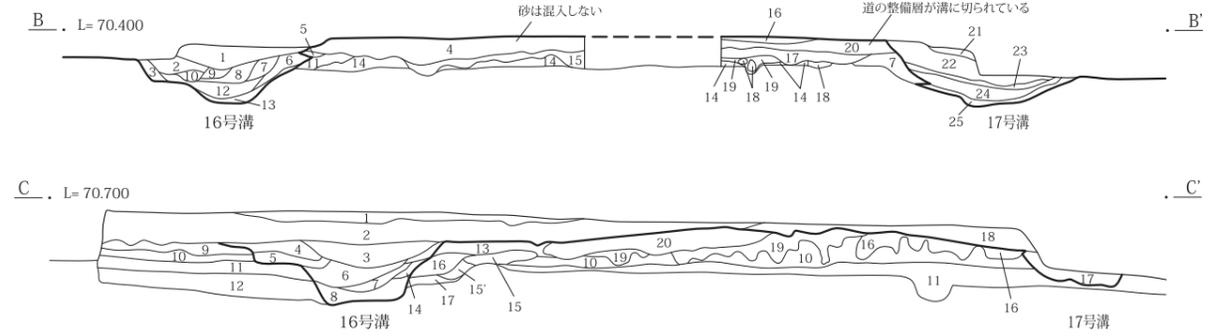
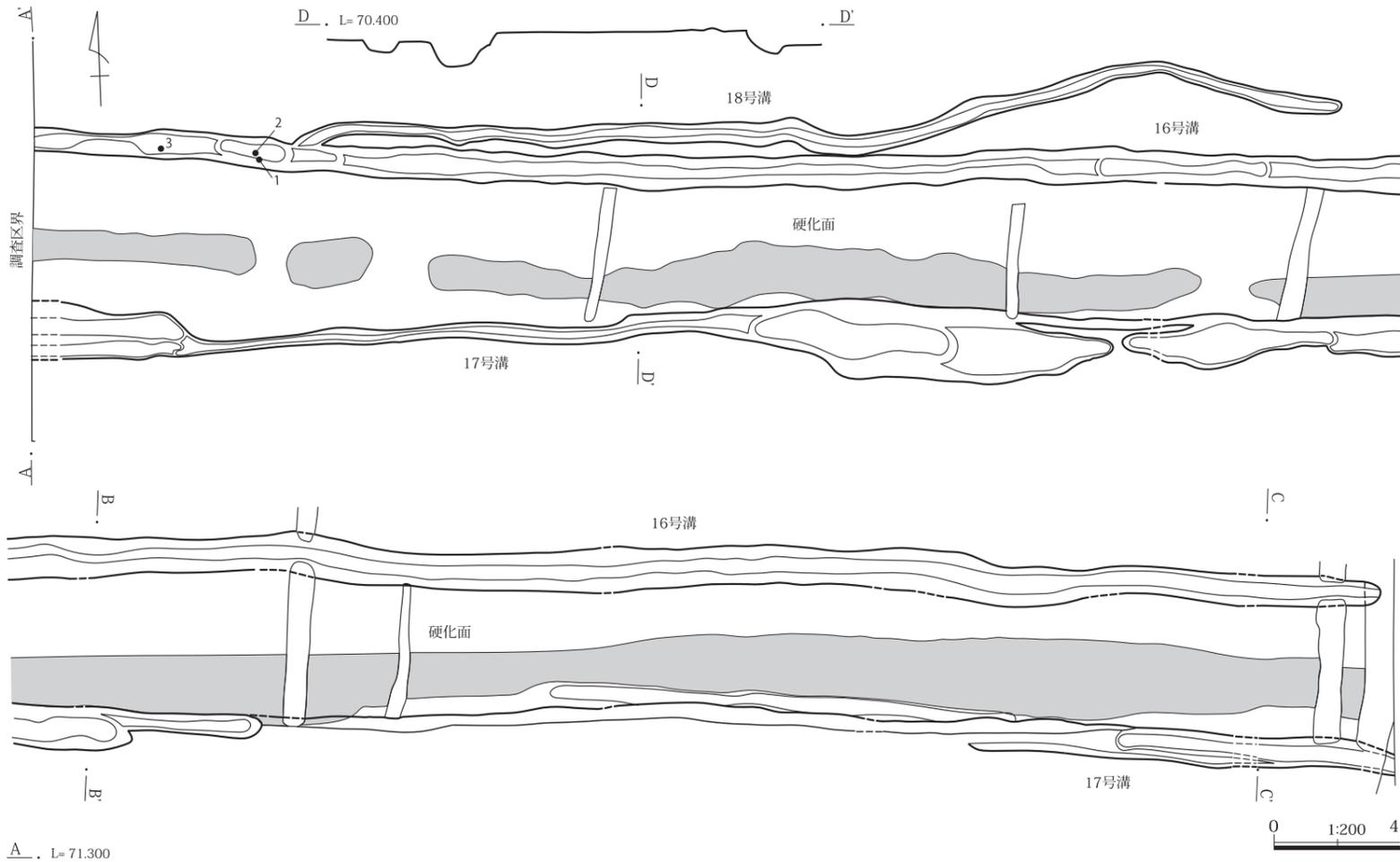
第10図 4区畠遺構図

4 道路状遺構(第11・33図 図版11・13)

概要 1区、3区で検出。1面の調査中、調査区を横断して東西に硬化面と、平行する6号・9号の溝を検出、道跡と判断する。その後、路面を調査するためにトレンチを設定、両側に平行する16号・17号溝を検出。最後に路面を断ち割って砂造成面の順で調査をした。幅が約6m、長さは90mにわたっている。規模や東西方向に一直線に伸びている様子から、計画的に整備された道であることがわかる。

重複 16号溝の覆土には弘仁九年の地震による噴砂があり、溝は地震以前に埋没。

規模 側溝の芯々間での距離は6m、路面の幅は4.20~4.30m。堅緻な細砂層が被覆、走向方向はN88°Wである。



B-B'

- 1 灰黄褐色 白色細粒混入、砂質
- 2 灰黄褐色 1より黒色味強、白色細粒混入
- 3 黒褐色 細粒少混
- 4~8 道硬化堆積 にぶい黄褐色土
- 9 灰黄褐色土
- 10 淡黄色 9に3~4cm塊混入
- 11 灰黄褐色 淡黄色土塊多混
- 12 灰黄褐色 粘質、均一土
- 13 灰黄褐色 黄橙色硬土混入
- 14 黒褐色土
- 15 4・14が塊状混入
- 16 にぶい黄褐色 堅緻
- 17 にぶい黄褐色 硬い砂質、鉄分沈着6と同じ
- 18 砂塊混入
- 19 黒褐色 As-C・砂塊混入
- 20 淡黄色 細砂、鉄分沈着層状にあり、道硬化堆積
- 21 黄色土塊多混、黄褐色~浅黄色土の斑混
- 22 暗灰色 白色細粒混入、均一、水田耕作土質
- 23 淡黄色 粘質土の薄い層
- 24 黄灰色 粘質土、均一、軟弱
- 25 明黄褐色土塊多混

C-C'

- 1 淡黄色 微細均質、塊多混、As-B直下汎濫層
- 2 淡黄色 均質、2~3mm白色軽石粒混入、水田耕作土質
- 3 にぶい黄色 2と同じ、白色軽石粒混入
- 4 浅黄色 白色細粒混入、砂質
- 5 浅黄色 白色細粒混入、砂質、細砂多混
- 6 黄褐色 白色細粒・細砂塊混入
- 7 黄褐色 細砂多混
- 8 灰黄色 淡黄微細土(壁土)斑混
- 9 黒褐色 0.5~1mm白色細粒多混、As-C
- 10 黒褐色 白色細粒As-C 9より多混
- 11 暗褐色土
- 12 淡黄色 微細粒、粘質
- 13 にぶい黄色 灰黄色微細土斑混
- 14 にぶい黄色 灰黄色土細砂多混
- 15 にぶい黄色 細砂多混、道整備関連
- 15' 15より砂少混
- 16 灰黄色 白色細粒多混
- 17 灰黄色 粘質、均一土
- 18 浅黄色 白色細粒混入、水田耕作土質
- 19 にぶい黄褐色 細砂とねったように塊状混入
- 20 灰黄色 砂・鉄分凝集縞状に重なる、堅緻

A-A'

- 1 現耕作土
- 2 黄灰色 旧耕作土
- 3 にぶい黄色土
- 4 黄褐色 鉄分沈着強、下部As-B混入、砂質
- 5 浅黄色 硬化面不確認、土質均一、上部鉄分沈着あり
- 6 道硬化堆積 暗灰黄色土
- 7 灰色 黄褐色土の固い塊・細砂縞状に混入、堅緻
- 8 灰黄色 1~2mm細砂多混、灰色の薄い層が縞状で堅緻
- 9 灰黄色 砂質、上部8に近い縞状、下部黒褐色土と塊状にねった状態で混入
- 10 灰黄色 細砂・黒褐色土がねったように混入
- 11 黒褐色 As-C混入、下部黄褐色土と斑混
- 12 黄灰色 砂質
- 13 灰黄色 細砂多混
- 14 暗灰黄色 砂質
- 15 黒褐色 粘質
- 16 暗灰黄色 均一土、水田耕作土質
- 17 灰白色 As-B純層
- 17' 灰褐色 純層に近い
- 18 灰黄褐色 白色細粒混入
- 19 灰黄褐色 白色細粒混入
- 20 黒褐色 As-C混入
- 21 灰白色 砂質
- 22 灰白色 噴砂
- 23 暗灰黄褐色 白色細粒混入、均一質、砂混入なし
- 23' 23にAs-C混入
- 24 黒褐色 土質は23と同じ
- 24' 褐灰色 21多混、24との中間
- 25 暗褐色 砂質、As-B混入
- 26 暗褐色 As-B塊混入
- 27 灰黄褐色 白色細粒混入
- 28 黒褐色 白色細粒混入
- 29 暗灰黄色土
- 30 暗灰黄色 黄褐色土粒、壁土混入
- 31 暗灰黄色 黄褐色土粒多混
- 32 暗灰黄色 灰黄色シルト塊壁土混入
- 33 暗灰黄色 粘質多混
- 34 黒褐色 粘質、噴砂混入
- 35 暗灰黄褐色 黄褐色土塊壁土混入

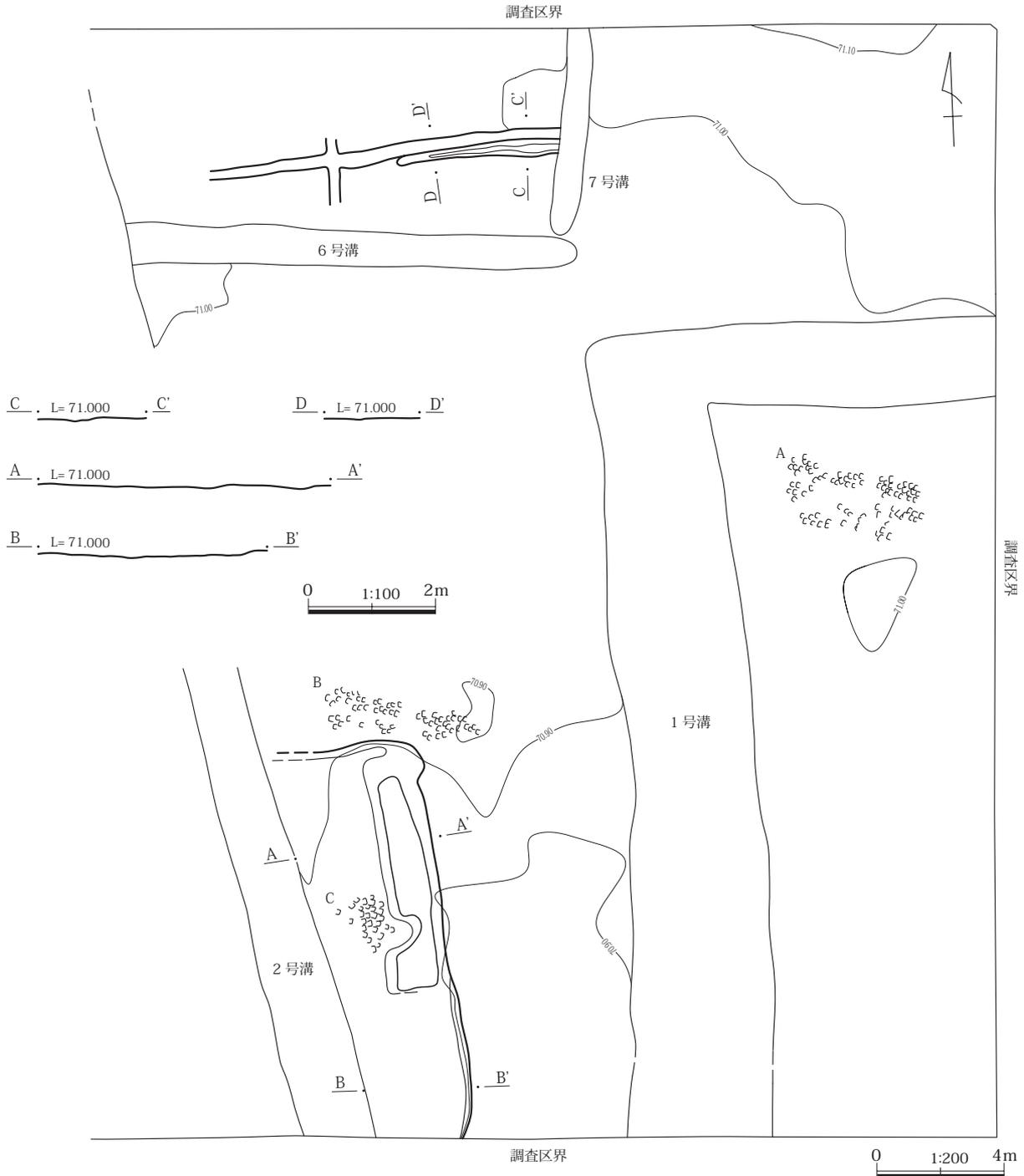
第11図 1区道路状遺構・16号・17号・18号溝遺構図

側溝は、北の16号溝が上幅75～142cm、深さ37～60cm、南の17号溝が上幅34～180cm、深さ28～49cmである。遺物 16号溝の覆土から土師器の甕、杯が出土。時期 古代、地震噴砂との切り合い、溝から出土した甕や杯の年代観から古代でも8世紀代

5 水田

4区水田（第12・13図 図版2）

概要 調査区東側、As-Bの下で畦、鋤跡を検出。地表からの深さは約70cm、東壁が70.90m前後、北壁が



第 12 図 4区水田遺構図

第2章 検出された遺構と遺物

70.95～71mである。畦は、南北2箇所で見出されている。北は、2号・6号・7号溝で囲まれた中で十字の交差箇所とその周囲である。畦の幅は10cm前後、高さは3cm前後である。南は、段による区画の北東の角で幅が1.60～2mもある大畦が見出されている。鋤跡は、特に集中していた3箇所を図化したもので、1m幅ほどの列にも見える密集状態である。方形の鋤刃先のように各集中箇所を3箇所を計測したところ、幅が10～18cm、奥行き8～12cmである。荒起こしか、畦の補修などの作業が考えられる。時期 平安時代、As-B下

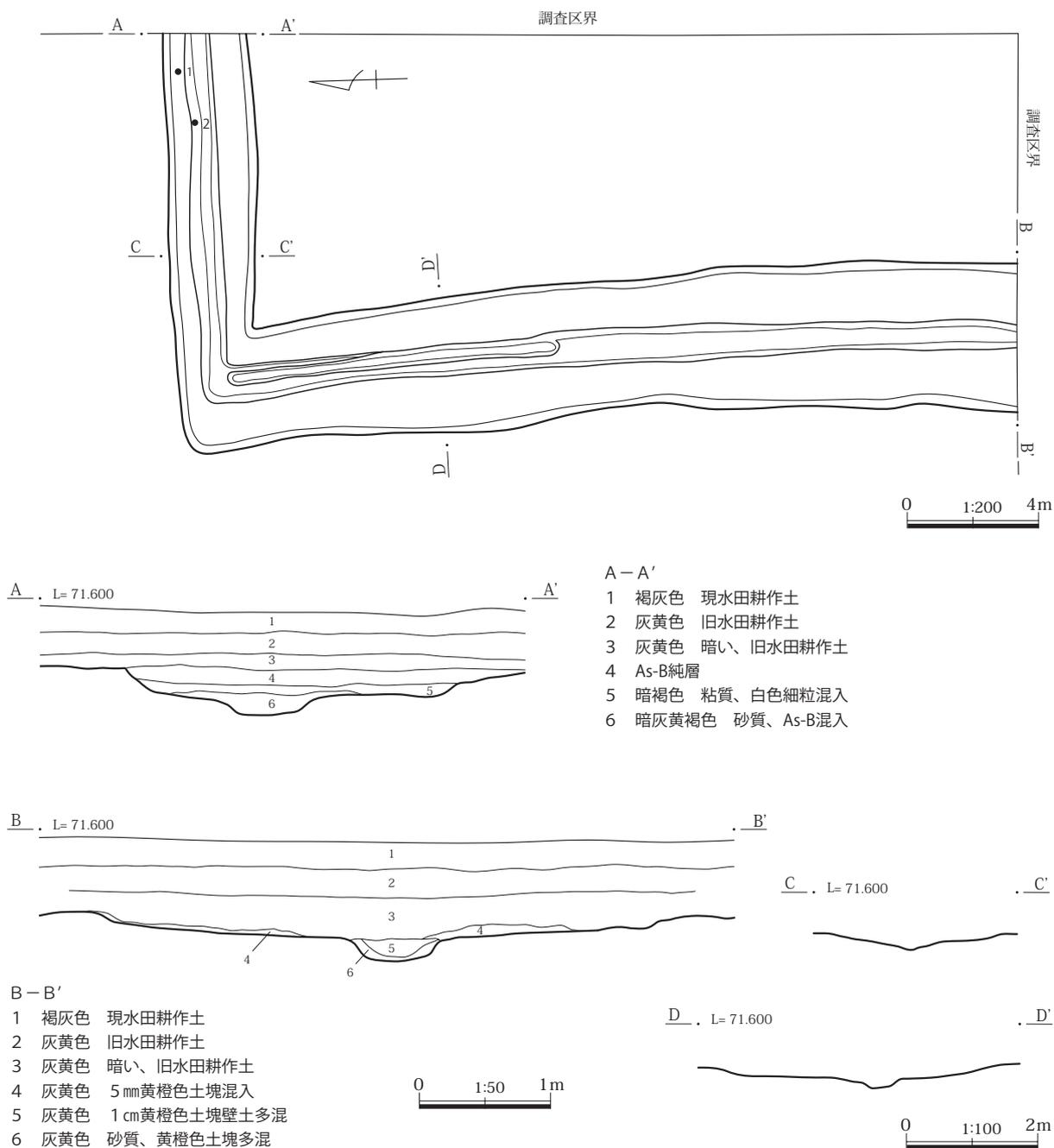


第13図 4区水田鋤痕遺構図

6 溝

4区1号溝 (第14・33図 図版7・13)

概要 調査区南東の1面、屋敷を囲む溝の一部で、北西側をL字形に検出。大半は調査区外である。北側は、検出長12.80m、幅2.40～2.70m、深さ17～30cm、走向がN87° W。西側は、検出長25.60m、幅3.50～4.55m、深さ25～34cm、走向がN7° Wである。北側よりも西側が広く、そしてわずかに深くなる。覆土の様子では、中央部にある一段深い掘り方のものが古く、浅くなるが大きく拡張されていることがわかる。水の流れた形跡はない。遺物 土師器杯、甕、須恵器甕、杯の破片が出土。時期 中世、東壁断面ではAs-B下水田を切っている。

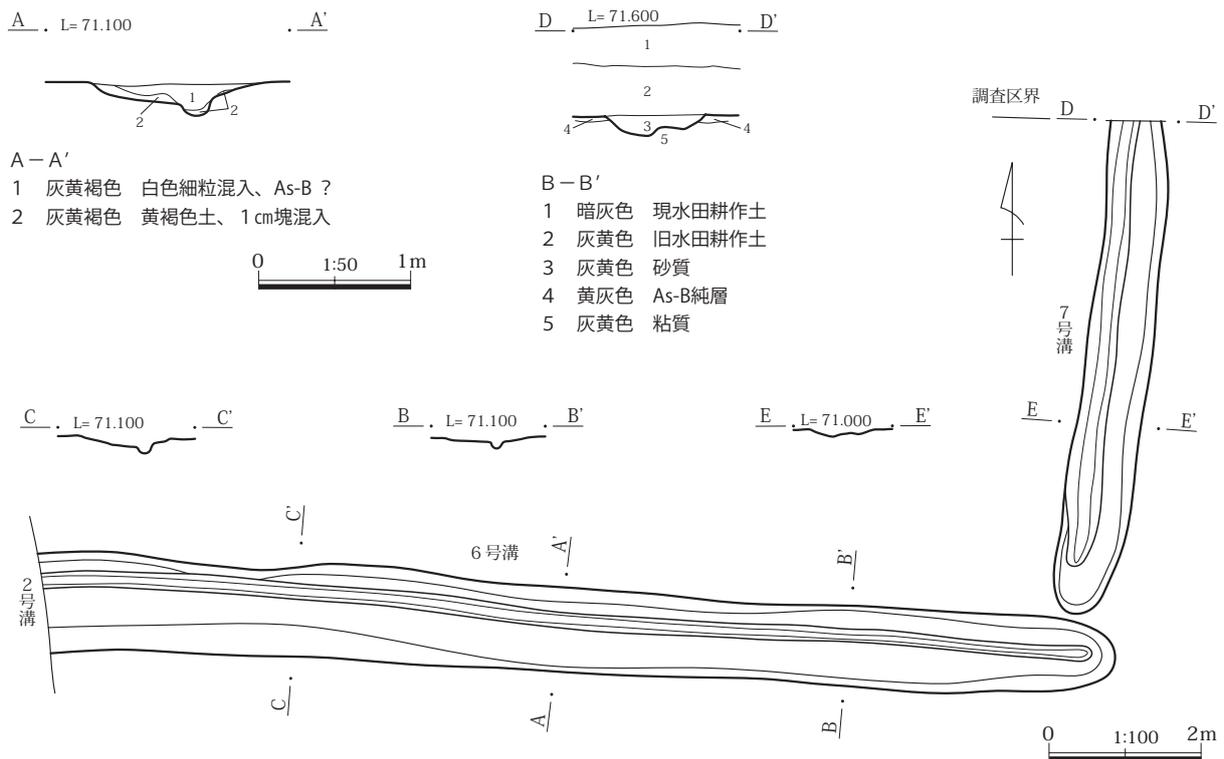


第14図 4区1号溝遺構図

第2章 検出された遺構と遺物

4区6号・7号溝 (第15図 図版8・9)

概要 1面、屋敷を囲む溝の一部で、南東側をL字形に検出。6号と7号との間は、わずかではあるが途切れている。6号の西端は2号溝と重複、7号の北端は調査区外である。2号溝より古く、水田跡よりは新しい。6号は、検出長14.06m、幅96～134cm、深さ6～26cm、直線的で中央部が細くなり、一段深い。走向はN87°Wである。7号は、走向がN7°E、検出長6.58m、幅68～90cm、深さ10～16cm、直線的で西側が一段深い。隣接する1号溝と似た二段の掘り込み構造であるが、全体の幅は半分以下である。また、屋敷とすると一辺が15mあまりと小規模である。覆土 As-Bを含んでいる。7号溝は、4層のAs-Bを切り込んでいる。
遺物 6号溝で須恵器甕、7号溝で土師器甕が出土している。時期 中世



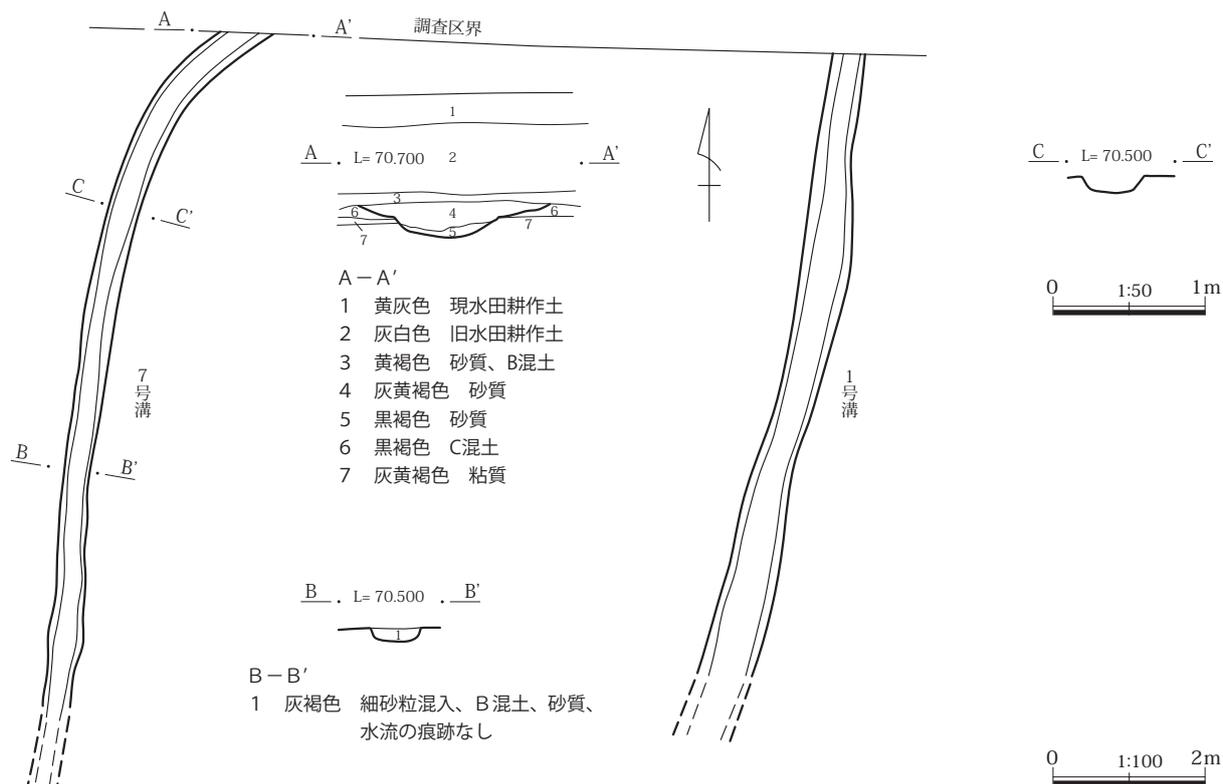
第15図 4区6号・7号溝遺構図

1区1号溝 (第16図 図版3)

概要 調査区の中央部、1面で南北に検出。道路状遺構、16号・17号・18号溝とは南北に直交して重複している。1号溝が新しい。2区1号溝の真南にあり、掘り方もよく似ていることから同一の溝である可能性が高い。さらに方向としては、北の4区2号溝にも可能性がある。走向はN15°E、検出長8.40m、幅42～70cm、北端の断面では、深さは30cm以上にもなる。遺物 ない。時期 中世、上面は削平されていて、現在の耕作土下で確認することができる。

1区7号溝 (第16図 図版4)

概要 調査区の西寄りの1面で検出。1号溝の西9mで平行。道路状遺構とは重複、7号溝が新しい。走向はN89°W、検出長9.60m、幅34～46cm、深さ9～12cm、南端は浅くなって途切れているが続いていた模様。また、北側が東に向かって蛇行している。覆土はAs-B混入灰褐～灰黄褐色土、As-Bは中位の一部でブロック状に見られた。水の流れた形跡はない。遺物 ない。時期 中世



第16図 1区1号・7号溝遺構図

1区2号溝 (第17図 図版3)

概要 調査区の東端、1面で検出。3号溝と平行。1号住居跡、道路状遺構とは重複、2号溝が新しい。走向はN 9° E、検出長11.90m、幅180cm、深さ105cmである。幅と深さは南端断面で計測した。覆土 細砂が縞状に堆積。遺物 未掲載の土師器杯・甕、S字状口縁台付甕、須恵器甕細片。時期 中世

1区3号溝 (第17図 図版3)

概要 調査区の東端、1面で2号溝に平行して検出。1号住居跡、道路状遺構と重複し3号溝が新しい。10号溝、9号・10号土坑よりも古い。走向はN 6° E、検出長11.90m、幅145cm、深さ55cmである。幅と深さは南端断面で計測した。覆土 自然堆積、暗褐色土、上層にAs-Bが混入。2号溝のような細砂は見られない。遺物 ない。時期 中世

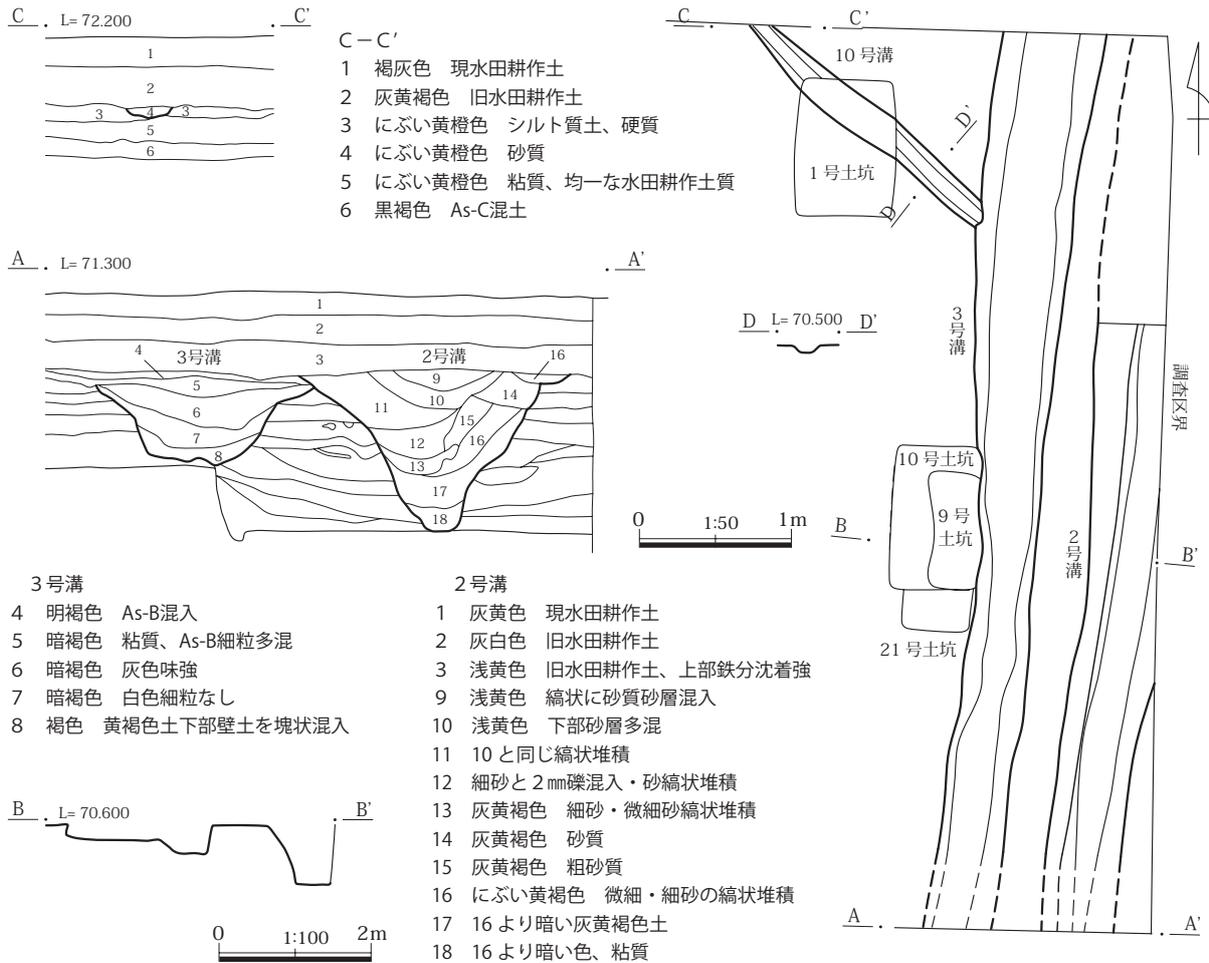
1区10号溝 (第17図)

概要 調査区の北東隅、1面で3号溝に重複して検出。3号溝よりも新しく、1号土坑よりも古い。走向はN49° W、検出長3.85m、幅24～47cm、深さ7～17cmである。覆土 にぶい黄橙色土、自然堆積である。遺物 ない。時期 中世

1区4号溝 (第18図 図版3)

概要 調査区の中央部、1面で検出。5号溝、11号溝が1mほどの距離で平行している。2区7号溝が真北にあり、掘り方もよく似ていることから同じ溝の可能性はある。道路状遺構とは重複、新しい。走向はN 6° E、検出長11.90m、幅170cm、深さ90cmである。覆土 にぶい黄褐色土、褐色土の自然堆積、一部にAs-Bが混入している。遺物 ない。時期 中世、掘り込み面は11号溝と同じで、5号溝よりも古い。

第2章 検出された遺構と遺物



第17図 1区2号・3号・10号溝遺構図

1区5号溝（第18図 図版3）

概要 調査区の中央部、1面で検出。4号溝と11号溝の間にある。掘り込みは浅く、北端は道路状遺構の硬化面と接する所で途切れている。走向はN 3° E、検出長9m、幅27～56cm、深さ3～11cmである。覆土 As-Bが混入する暗褐色土の自然埋没。遺物 ない。時期 中世

1区11号溝（第18図）

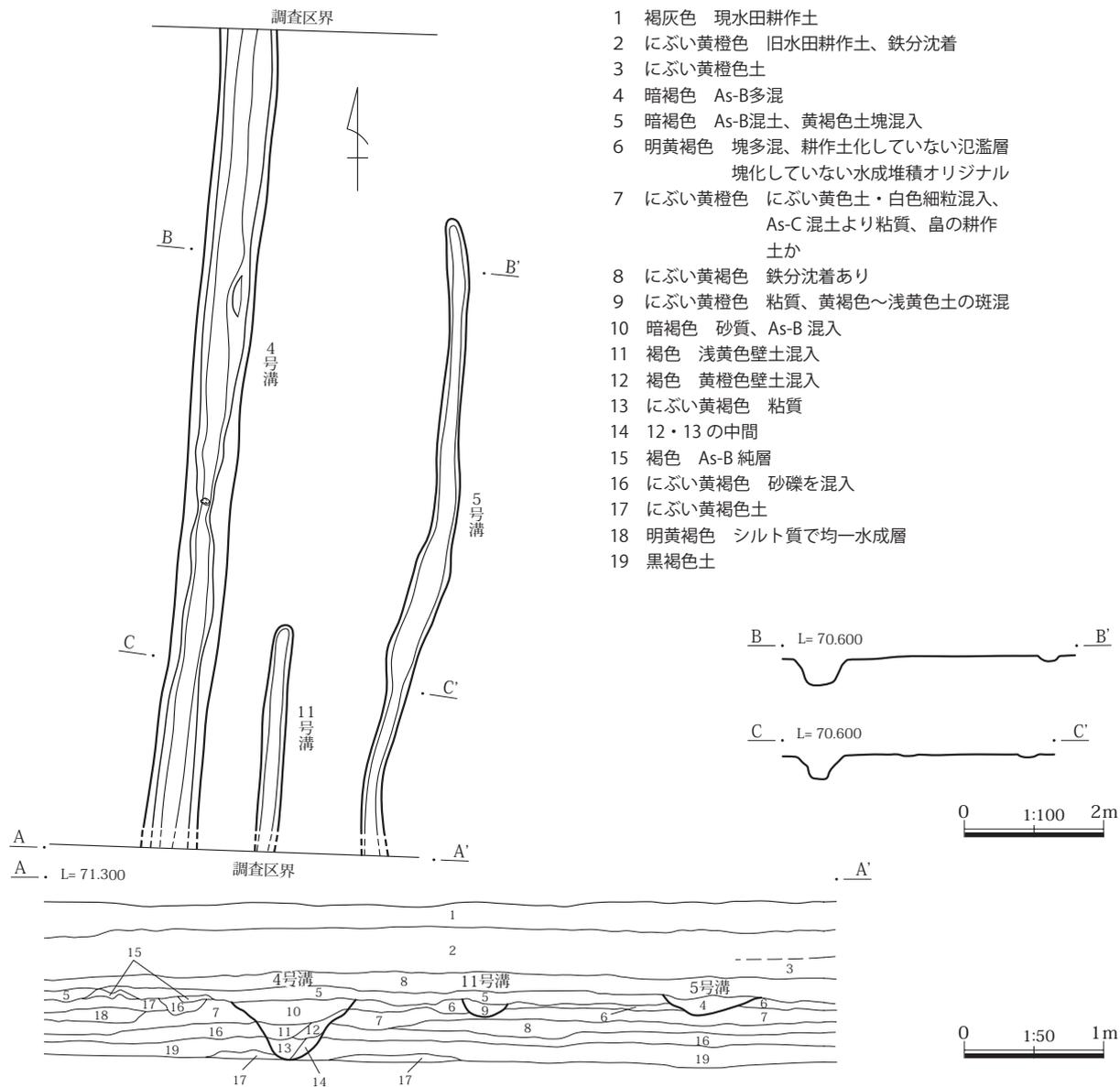
概要 調査区の中央部、1面で検出。道路状遺構の硬化面のところで途切れている。11号溝が新しい。走向はN 5° E、検出長3m、幅28～33cm、深さ2～8cmである。覆土 にぶい黄橙色土の自然埋没。遺物 ない。時期 中世

1区6号溝（第19図 図版4）

概要 調査区中央の北壁際、1面で検出。走向はN 9° W、検出長15.10m、幅62～109cm、深さ4～10cmである。覆土 As-Bが混入している褐灰色土で埋没。遺物 ない。時期 中世

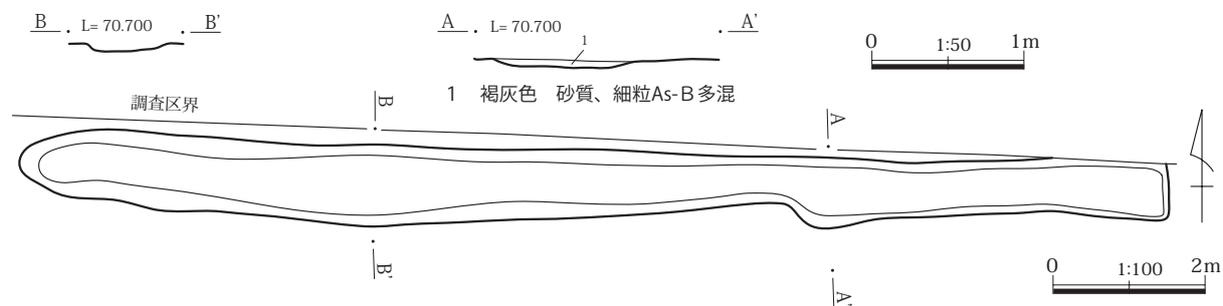
1区8号溝（第20図 図版4）

概要 調査区西端、3区との交点に近い1面で検出。7号溝と平行。道路状遺構に重複、8号溝が新しい。走



- 1 褐灰色 現水田耕作土
- 2 にぶい黄橙色 旧水田耕作土、鉄分沈着
- 3 にぶい黄橙色土
- 4 暗褐色 As-B多混
- 5 暗褐色 As-B混土、黄褐色土塊混入
- 6 明黄褐色 塊多混、耕作土化していない氾濫層塊化していない水成堆積オリジナル
- 7 にぶい黄橙色 にぶい黄色土・白色細粒混入、As-C混土より粘質、畠の耕作土か
- 8 にぶい黄褐色 鉄分沈着あり
- 9 にぶい黄褐色 粘質、黄褐色～浅黄色土の斑混
- 10 暗褐色 砂質、As-B混入
- 11 褐色 浅黄色壁土混入
- 12 褐色 黄橙色壁土混入
- 13 にぶい黄褐色 粘質
- 14 12・13の中間
- 15 褐色 As-B純層
- 16 にぶい黄褐色 砂礫を混入
- 17 にぶい黄褐色土
- 18 明黄褐色 シルト質で均一水成層
- 19 黒褐色土

第18図 1区4号・5号・11号溝遺構図



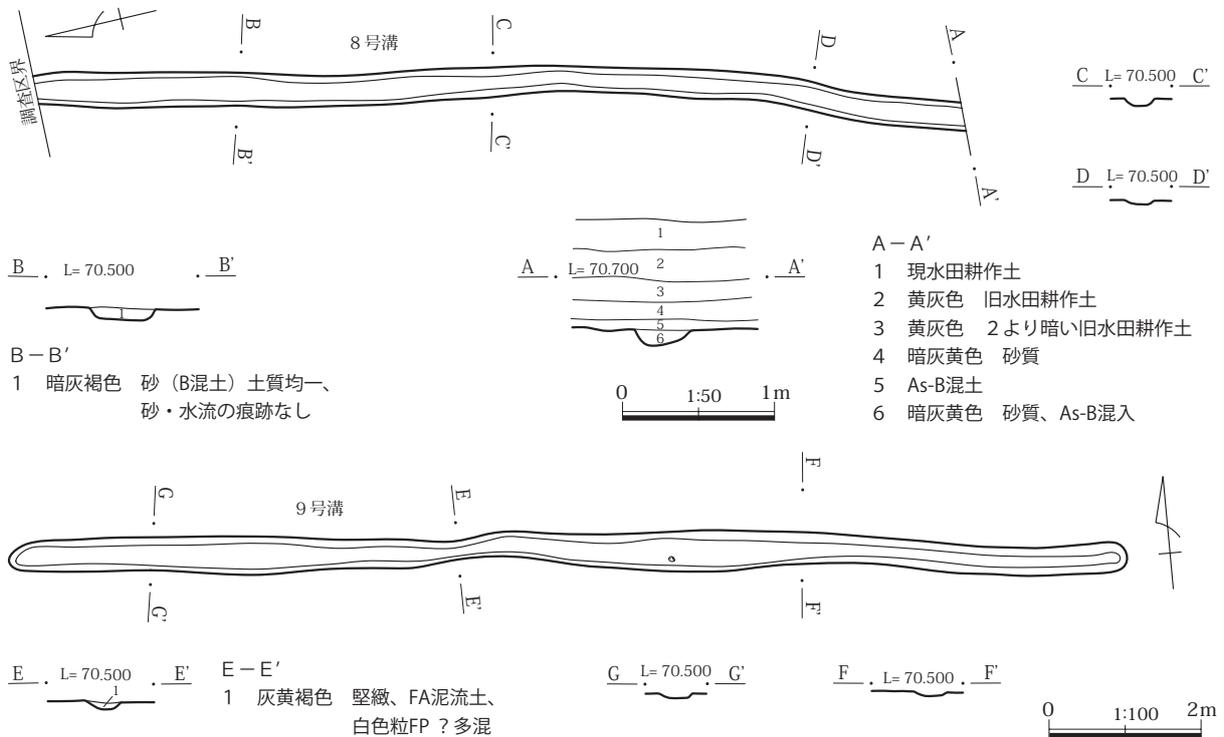
第19図 1区6号溝遺構図

向はN13° E、検出長12.22m、幅33～48cm、深さ5～10cmである。覆土 As-Bが混入した暗灰褐色土で埋没。遺物 ない。時期 中世

第2章 検出された遺構と遺物

1区9号溝（第20図 図版4）

概要 調査区東寄りの1面で検出。6号溝と平行、道路状遺構南縁に重複、9号溝が新しい。走向はN84°W、検出長14.67m、幅27～56cm、深さ4～8cmである。覆土 灰黄褐色土で埋没。遺物 ない。時期 中世



第20図 1区8号・9号溝遺構図

1区12号溝（第21図）

概要 調査区東寄りの3面で検出。12号～15号溝と平行、道路状遺構、16号溝、1号掘立柱建物跡と重複、道路状遺構、16号溝より新しく、1号掘立柱建物跡より古い。走向はN30°E、検出長12.90m、幅68～90cm、深さ9～40cmである。覆土 明黄褐色砂層で埋没。遺物 未掲載の土師器杯細片 時期 中世

1区13号溝（第21図 図版5）

概要 調査区東寄りの3面で検出。2区9号溝の延長線上にあたり、覆土の様子と掘り方もよく似ていることから同一の溝である可能性が高い。14号溝と重複、13号溝が古い。走向はN28°E、検出長13.20m、幅78～210cm、深さ13～67cmである。覆土 中位に約45cm、厚い細砂層があり、上下はにぶい黄褐色土、褐色土、褐灰色土で埋没。時期 道路状遺構よりも古いという調査時の所見であったが、南壁断面を検討した結果、道路状遺構よりも新しい。

1区14号溝（第21図 図版5）

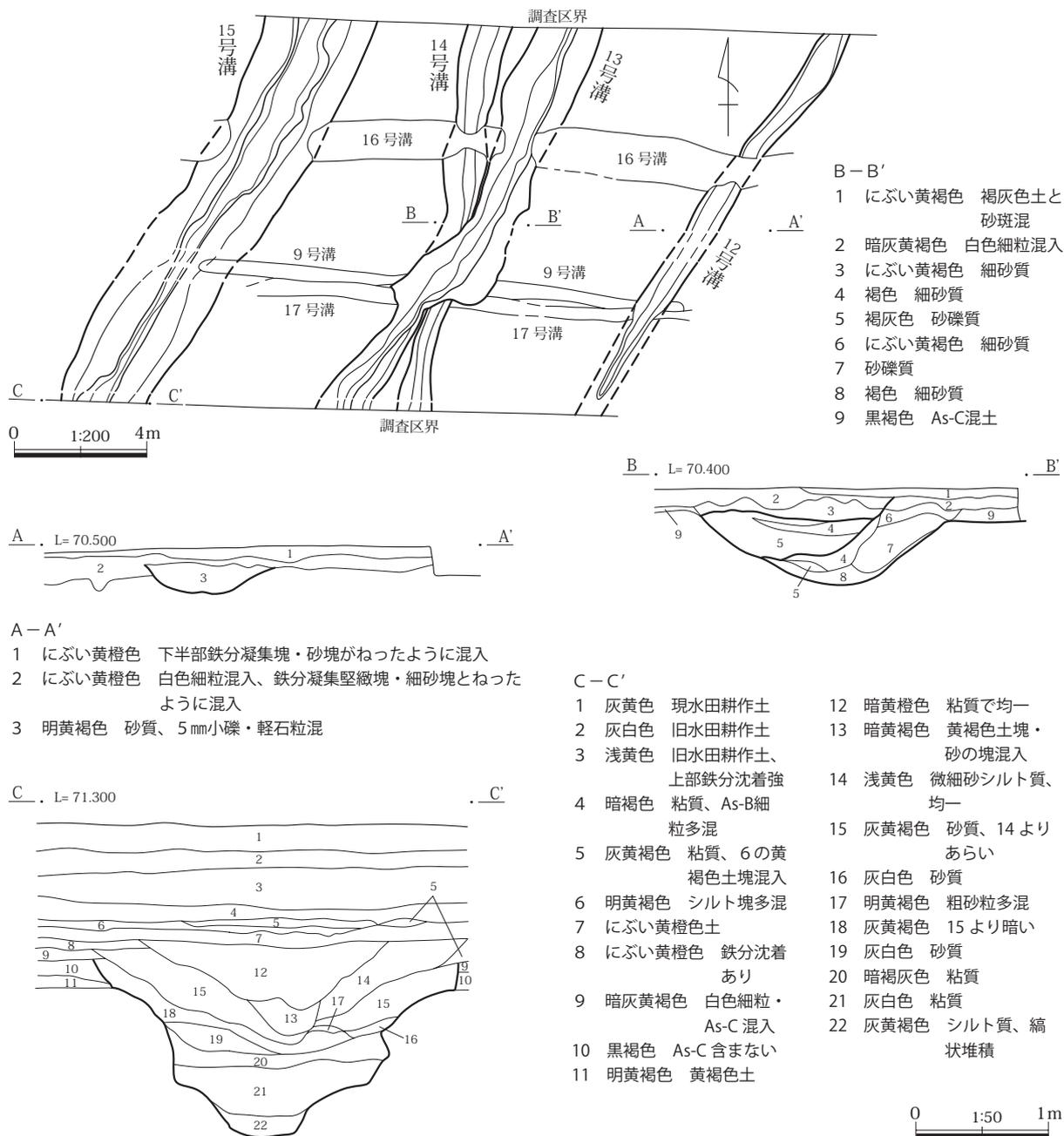
概要 調査区東寄りの3面で検出。2区8号溝の延長線上にあたり、掘り方もよく似ていることから同一の溝である可能性が高い。13号溝と重複、14号溝が新しい。走向はN16°E、検出長11.56m、幅54～82cm、深さ9～57cmである。覆土 中位に厚い細砂礫層があり、にぶい黄褐色土、褐色土とともに埋没。遺物 未掲載の土師器甕細片 時期 中世

1区15号溝（第21・33図 図版13）

概要 調査区東寄りの3面で検出。1区の中では最も大きな溝である。12号～14号溝と平行、2区6号溝の

延長線上にあたり、覆土の様子と掘り方も良く似ていることから同一の溝である可能性が高い。道路状遺構に重複、15号溝が新しい。走向はN28° E、検出長13.20m、幅2.56～3.18m、深さ1.20～1.81mである。覆土

底面には砂層が厚く堆積、強い流れの跡を示す穴が連続してあいている。遺物 未掲載の土師器杯・甕、S字状口縁台付甕細片 時期 中世



第21図 1区12号・13号・14号・15号溝遺構図

2区1号溝 (第22図 図版5)

概要 調査区西寄りの1面で検出。調査区を縦断し、3号溝、7号溝とは平行している。4号溝に重複、1号溝が新しい。1区1号溝の北延長線上にあたり、掘り方も似ていることから同一の溝である可能性が高い。走向はN 8° E、検出長9.30m、幅92～132cm、深さ9～16cm、断面では最大の幅190cm、深さ58cmを測る。

第2章 検出された遺構と遺物

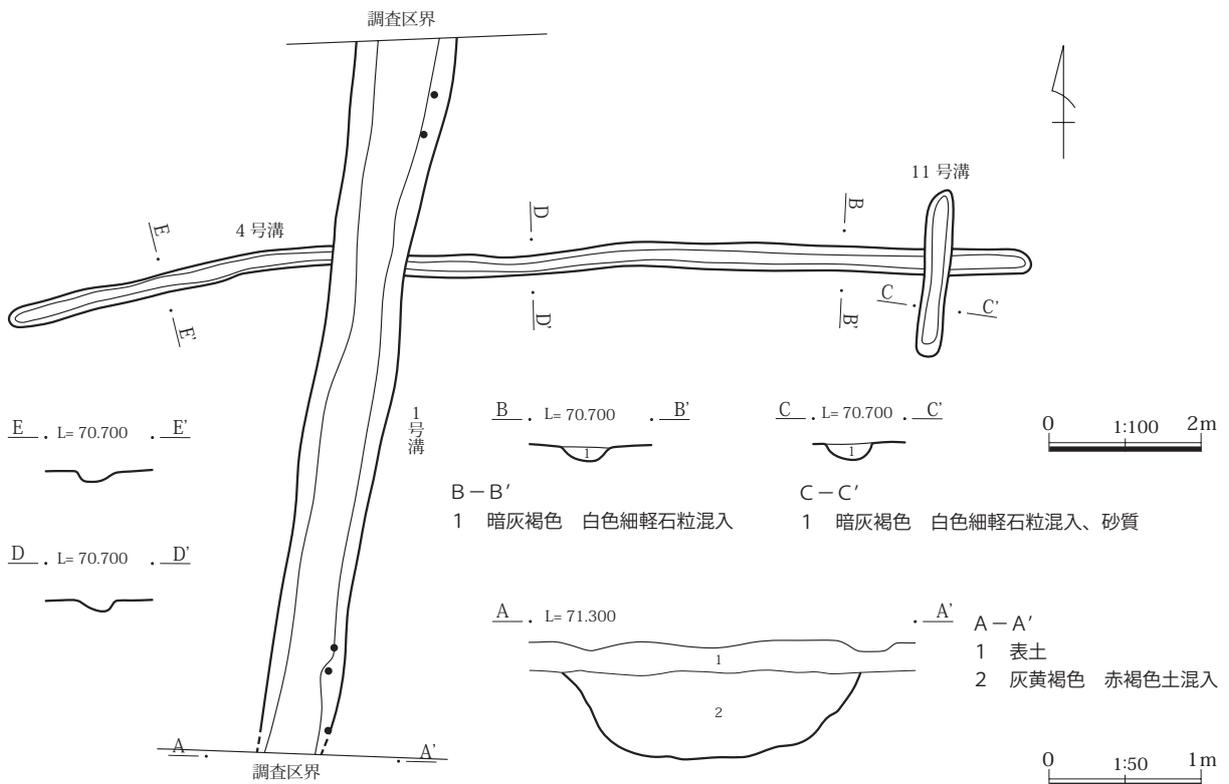
覆土 灰黄褐色土で埋没。遺物 未掲載の土師器杯・甕、須恵器杯・甕細片、縄文土器深鉢破片、陶磁器破片出土。東法面に護岸用と思われる木杭5本が残されていた。時期 現在の水田耕作土下で検出したが覆土の様子、同一とみられる1区1号溝の様子からすると中世。

2区4号溝（第22図 図版5）

概要 調査区西寄りの1面で検出。2区では唯一、東西方向の溝である。1号溝、11号溝が直交して重複、4号溝が古い。西の延長線上には、3区1号・2号溝がある。走向はN89°W、検出長13.50m、幅24～37cm、深さ5～13cm、東から西への傾斜である。覆土 暗灰褐色土で埋没。遺物 ない。時期 中世

2区11号溝（第22図 図版6）

概要 調査区東寄りの1面で検出。4号溝に重複、11号溝が新しい。走向はN11°E、検出長2.22m、幅30～35cm、深さ7～13cmである。覆土 暗灰褐色土で埋没。遺物 ない。時期 中世



第22図 2区1号・4号・11号溝遺構図

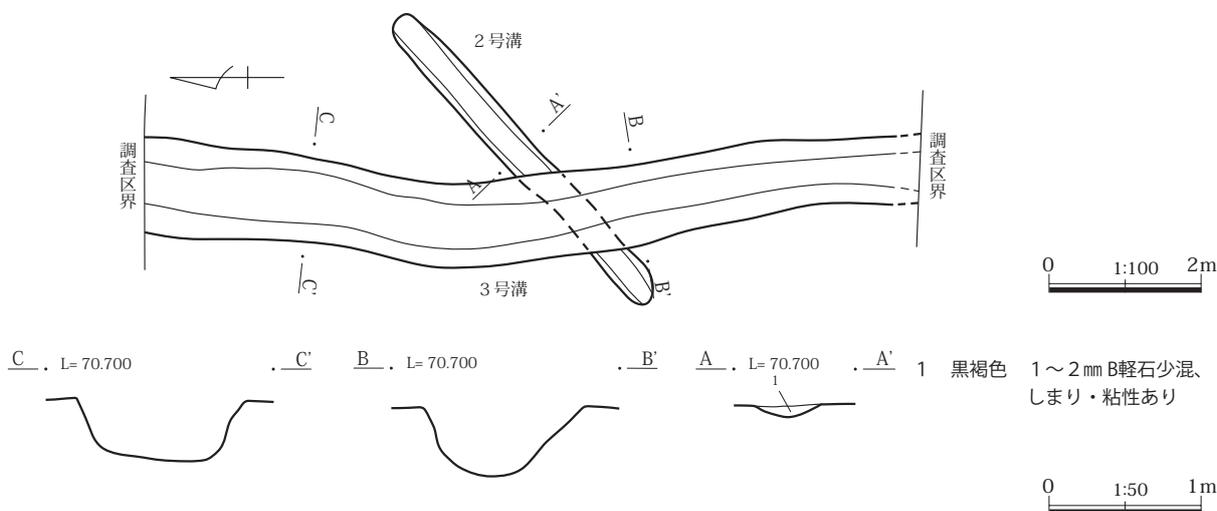
2区2号溝（第23・33図 図版5・13）

概要 調査区東寄りの1面で検出。3号溝に重複、2号溝が古い。重機による掘削が深かったために、両端が削平されている。走向はN48°E、検出長5m、幅40～48cm、深さ1～9cmである。覆土 As-Bが混入している黒褐色土で埋没。遺物 覆土に混入して鍔の釣り手金具が出土。割れ口は新しく、鋌には木質が残されていた。本来ならば良好な状態であったことをうかがわせる。釘1点も出土している。覆土に混入して縄文土器深鉢破片も出土。時期 中世

2区3号溝（第23・25図）

概要 調査区東寄りの1面で検出。1区3号溝の北延長線上にあたり、掘り方も似ていることから同一の溝である可能性がある。2号溝とは重複、3号溝が新しい。走向はN8°W、検出長9.90m、幅83～132cm、深

さ35～47cm 北から南への傾斜である。覆土 砂を多く含んだ明黄褐色土、褐灰色土で埋没。遺物 未掲載の土師器杯・甕細片、縄文土器深鉢破片 時期 中世



第23図 2区2号・3号溝遺構図

2区5号溝 (第24・25・33図 図版12・13)

概要 調査区中央、やや東寄りの1面で検出。3号溝と7号溝の間であって、調査区を斜めに縦断している。調査区南側の断面によると畠、6号溝より新しく、1号掘立柱建物跡、1号土坑より古いことがわかる。走向はN34°W、検出長11.80m、幅60～85cm、深さ21～33cm 覆土 黒褐色土で埋没、中位にAs-Bの2次堆積がある。2層は、3号土坑の覆土と同じようであるとコメントされている。遺物 長頸壺、縄文土器深鉢破片 時期 中世

2区6号溝 (第24・25図 図版5・6・12)

概要 調査区中央、やや東寄りの2面で検出。8号溝と平行、5号溝、1号・2号土坑より古い。1区15号溝の北延長線上にあたり、覆土、掘り方もよく似ていることから同一の溝である可能性が高い。走向はN28°E、検出長11.50m、幅2.80～2.90m、深さ176cmである。覆土 中位以下に細砂層が連続している。特に最下層には砂礫が多い。遺物 未掲載の土師器杯・甕、S字状口縁台付甕細片、縄文土器深鉢破片 時期 中世、覆土は少なくとも3時期に区分ができ、幅が減少して浅くなることが読み取れる。

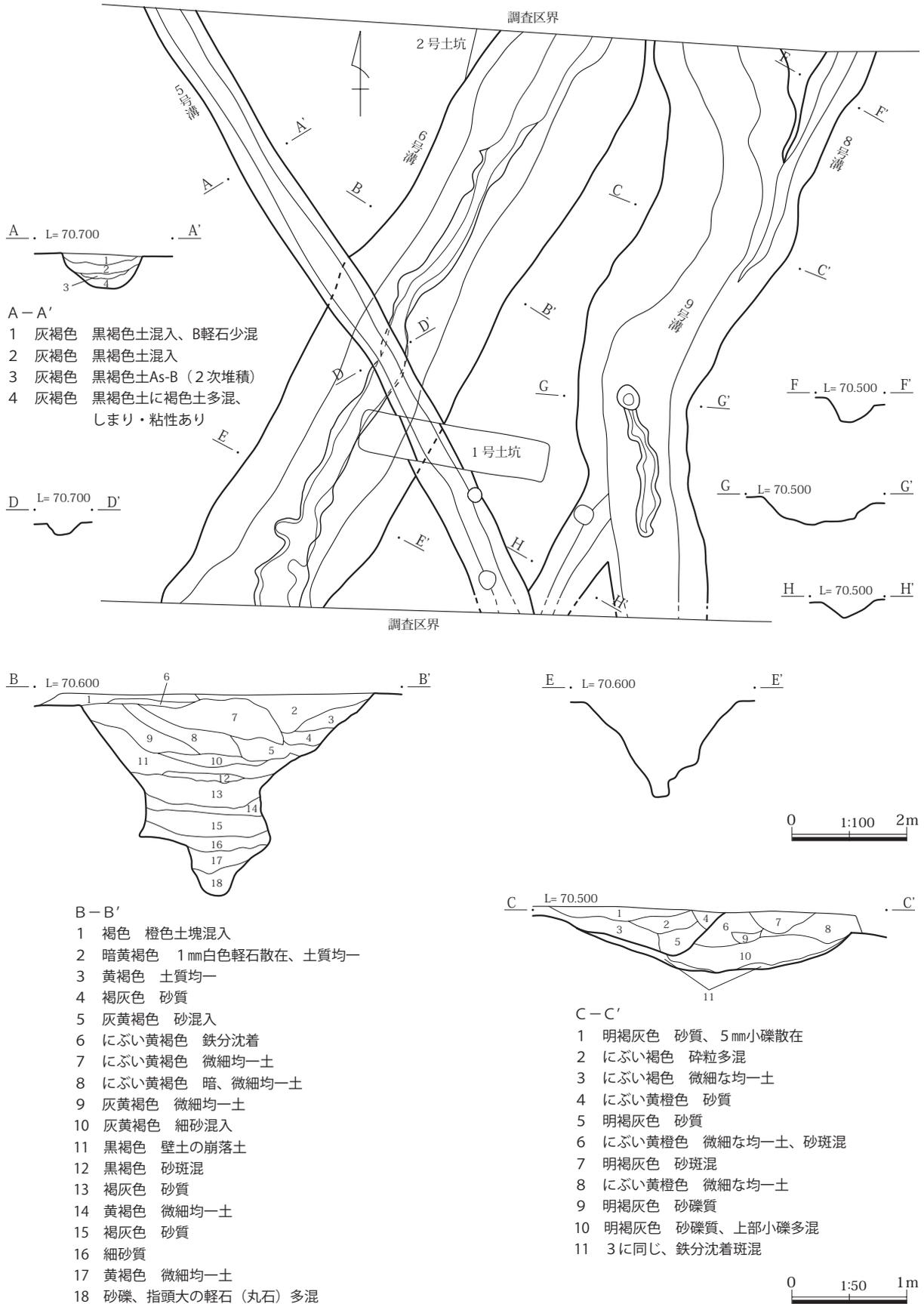
2区8号溝 (第24・25図 図版6)

概要 調査区中央、やや東寄りの2面で検出。6号溝と平行、1号掘立柱建物跡、5号・9号溝より古い。1区14号溝の北延長線上にあたり同一の溝である可能性がある。走向はN26°E、検出長10.80m、幅85～90cm、深さ40cm前後である。覆土 明黄褐色土で埋没、下層に砂礫が多い。遺物 未掲載の土師器甕細片、縄文土器深鉢破片 時期 中世

2区9号溝 (第24・25図 図版6)

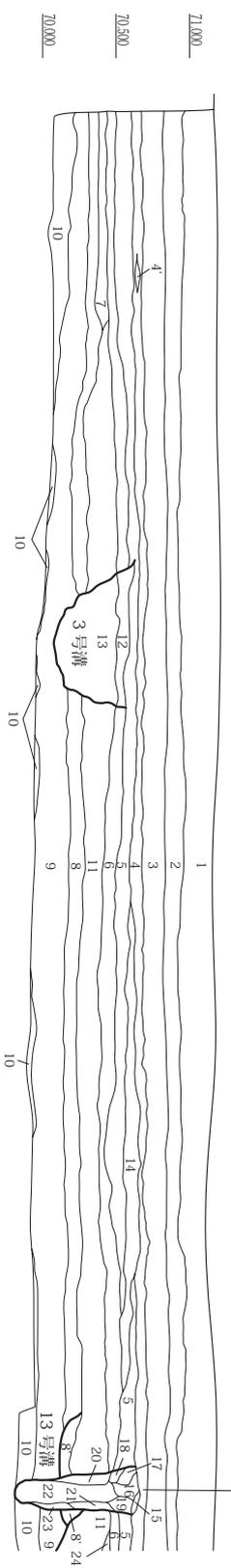
概要 調査区中央、やや東寄りの2面で検出。緩く蛇行していて浅い。8号溝に重複、9号溝が新しい。1区13号溝の延長線上にあたり、掘り方もよく似ていることから同一の溝である可能性がある。走向はN7°W、検出長10.10m、幅163～216cm、深さ55～60cmである。覆土 下位に砂礫を多く含む。遺物 縄文土器深鉢破片 時期 中世、6号溝の最新の時期に近い。

第2章 検出された遺構と遺物

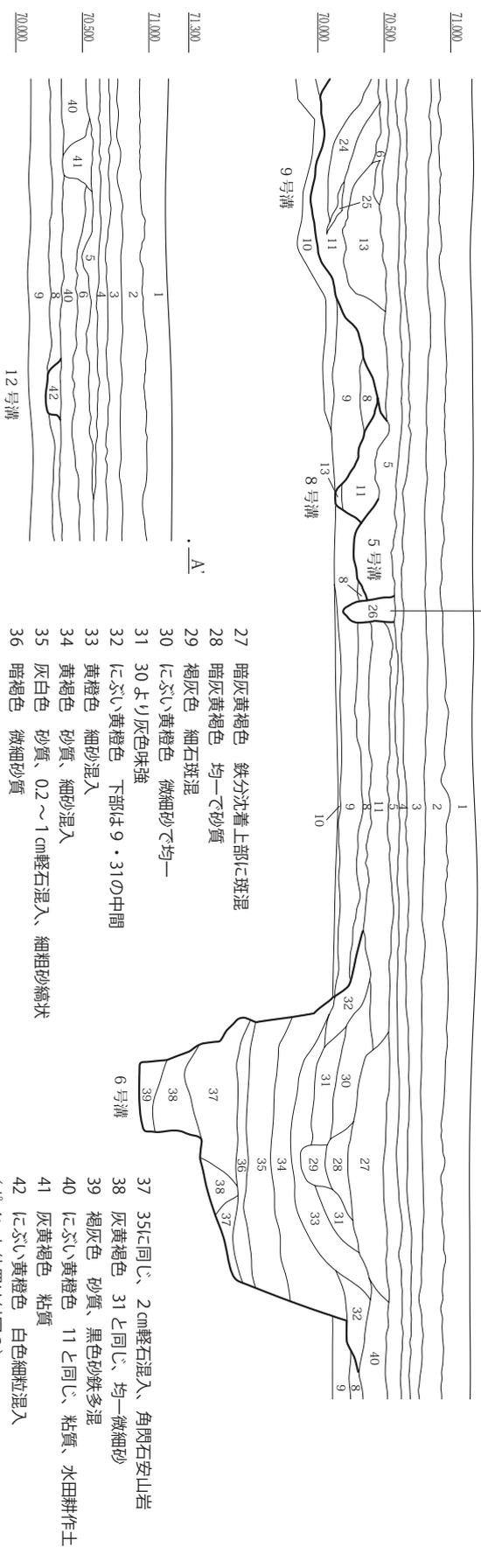


第24図 2区5号・6号・8号・9号溝遺構図

A₁ L=71,300



- 1 褐灰色 現水田耕作土
- 2 にぶい黄褐色 旧水田耕作土
- 3 にぶい黄褐色 下部鉄分沈着斑混、旧水田耕作土
- 4 にぶい黄褐色 As-B混入、一部鉄分沈着、軽石少混、3・5の間
- 4' 灰白色 微細砂
- 5 灰黄褐色 土質均一堅緻、水田耕作土
- 6 暗灰褐色 土質均一堅緻、水田耕作土
- 7 褐灰色 6より明色土、土質6と同じ
- 8 黒褐色 白色細粒多混、As-C少混
- 8' 灰黄褐色 砂質
- 9 黒褐色土
- 10 灰白色 砂質、砂混入なし
- 11 明黄褐色 砂質、土質均一、下部砂混入
- 12 明黄褐色 砂多混、混土層、1~5mm軽石混入
- 13 褐灰色 砂質、3~10mm軽石多混
- 14 黄褐色 灰黄褐色土に1~2cm微細粒塊混入、汜濫層か
- 15 灰黄褐色 白色細粒混入、As-B多混
- 16 灰黄褐色 白色細粒混入、軟弱で下部空隙あり
- 17 灰黄褐色 灰味強い白色細粒
- 18 灰黄褐色 灰味強い白色細粒・炭化物混入
- 19 灰黄褐色 白色細粒・炭化物混入
- 20 灰黄褐色 黄褐色土塊(壁土)混入
- 21 灰黄褐色土
- 22 灰黄褐色 空隙著しい柱痕
- 23 灰黄褐色土
- 24 暗黄褐色 白色細粒層状に混入
- 25 砂質
- 26 灰黄褐色 白色細粒混入、As-B堅緻か?



- 1 黒褐色土
- 2 灰白色 砂質、砂混入なし
- 3 明黄褐色 砂質、土質均一、下部砂混入
- 4 明黄褐色 砂多混、混土層、1~5mm軽石混入
- 5 褐灰色 砂質、3~10mm軽石多混
- 6 黄褐色 灰黄褐色土に1~2cm微細粒塊混入、汜濫層か
- 7 灰黄褐色 白色細粒混入、As-B多混
- 8 灰黄褐色 白色細粒混入、軟弱で下部空隙あり
- 9 灰黄褐色 灰味強い白色細粒
- 10 灰黄褐色 灰味強い白色細粒
- 11 灰黄褐色 灰味強い白色細粒・炭化物混入
- 12 灰黄褐色 白色細粒・炭化物混入
- 13 灰黄褐色 黄褐色土塊(壁土)混入
- 14 灰黄褐色土
- 15 灰黄褐色 空隙著しい柱痕
- 16 灰黄褐色土
- 17 暗黄褐色 白色細粒層状に混入
- 18 砂質
- 19 灰黄褐色 白色細粒混入、As-B堅緻か?
- 20 暗灰黄褐色 鉄分沈着上部に斑混
- 21 暗灰黄褐色 均一で砂質
- 22 褐灰色 礫石斑混
- 23 にぶい黄褐色 微細砂で均一
- 24 30より灰色味強
- 25 にぶい黄褐色 下部は9・31の間
- 26 黄褐色 細砂混入
- 27 黄褐色 砂質、細砂混入
- 28 黄褐色 砂質、細砂混入
- 29 灰白色 砂質、0.2~1cm軽石混入、細粗砂筒状
- 30 暗褐色 微細砂質
- 31 35に同じ、2cm軽石混入、角閃石安山岩
- 32 灰黄褐色 31と同じ、均一微細砂
- 33 褐灰色 砂質、黒色砂鉄多混
- 34 にぶい黄褐色 11と同じ、粘質、水田耕作土
- 35 灰黄褐色 粘質
- 36 にぶい黄褐色 白色細粒混入
- 37 35に同じ、2cm軽石混入、角閃石安山岩
- 38 灰黄褐色 31と同じ、均一微細砂
- 39 褐灰色 砂質、黒色砂鉄多混
- 40 にぶい黄褐色 11と同じ、粘質、水田耕作土
- 41 灰黄褐色 粘質
- 42 にぶい黄褐色 白色細粒混入

第25図 2区南壁、3号・13号・9号・8号・5号・6号・12号溝遺構図



第2章 検出された遺構と遺物

2区7号溝 (第26図 図版5・6)

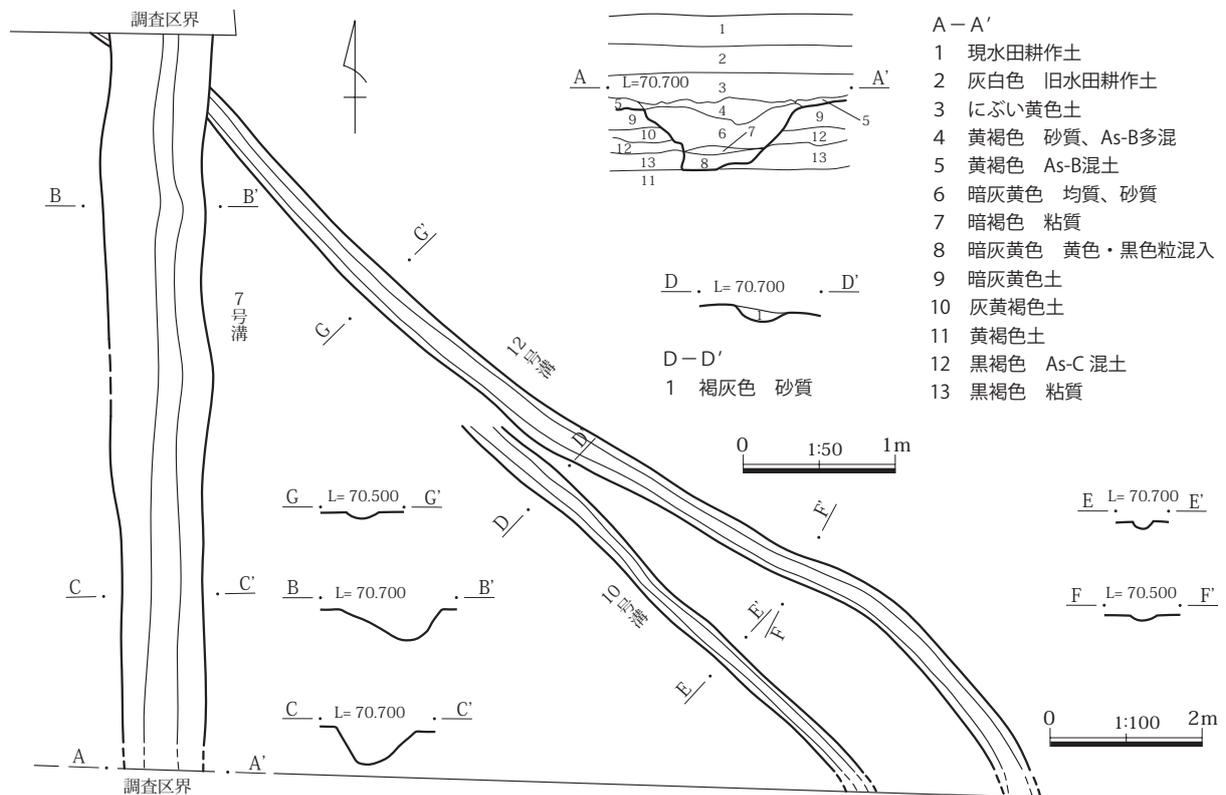
概要 調査区中央、やや西寄りの1面で検出。調査区を縦断し、1号、3号溝とは平行している。2面で検出した12号溝と北端で重複、7号溝が新しい。1区4号溝の延長線上にあたり、掘り方も似ていることから同一の溝である可能性が高い。走向はN-S、検出長9.40m、幅104～135cm、深さ38～49cm 覆土 As-Bが混入している黄褐色土、暗灰黄色土で埋没。遺物 未掲載の土師器杯・甕細片 時期 中世

2区10号溝 (第26図 図版6)

概要 調査区中央部の1面、北西から南東の方向で検出。南端は調査区外にまで続くが、北端は試掘トレンチで途切れている。途切れた上に、掘り方も浅いことから北側にある畠の一部という可能性もある。また、方向や掘り方、規模の点から4号溝、あるいは1区10号溝との関連も考えられる。走向はN47°W、検出長6.65m、幅24～42cm、深さ5～14cmである。覆土 褐灰色土で埋没。遺物 ない。時期 古代～中世

2区12号溝 (第25・26図 図版6)

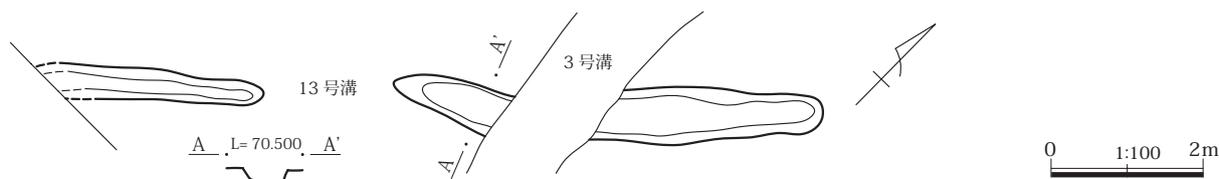
概要 調査区の中央部の2面で検出。7号溝と重複、12号溝が古い。走向はN43°W、検出長15.40m、幅35～48cm、深さ6～9cmである。覆土 にぶい黄橙色土で埋没。遺物 ない。時期 中世、掘り込み面は6号溝と同じである。



第26図 2区7号・10号・12号溝遺構図

2区13号溝 (第25・27図 図版7)

概要 調査区の東寄りの2面で検出。1号掘立柱建物跡、9号溝、3号溝と重複しているが、古い方から13号溝、9号溝、1号掘立柱建物跡の順である。また、2号溝とは上下の位置関係にあり、掘り残しがあったか、同じ溝でも時期を異にしている可能性がある。走向はN45°E、検出長9.70m、幅32～76cm、深さ2～20cmである。覆土 灰黄褐色土で埋没。遺物 ない。時期 中世、6号溝、12号溝と同じ掘り込み面である。



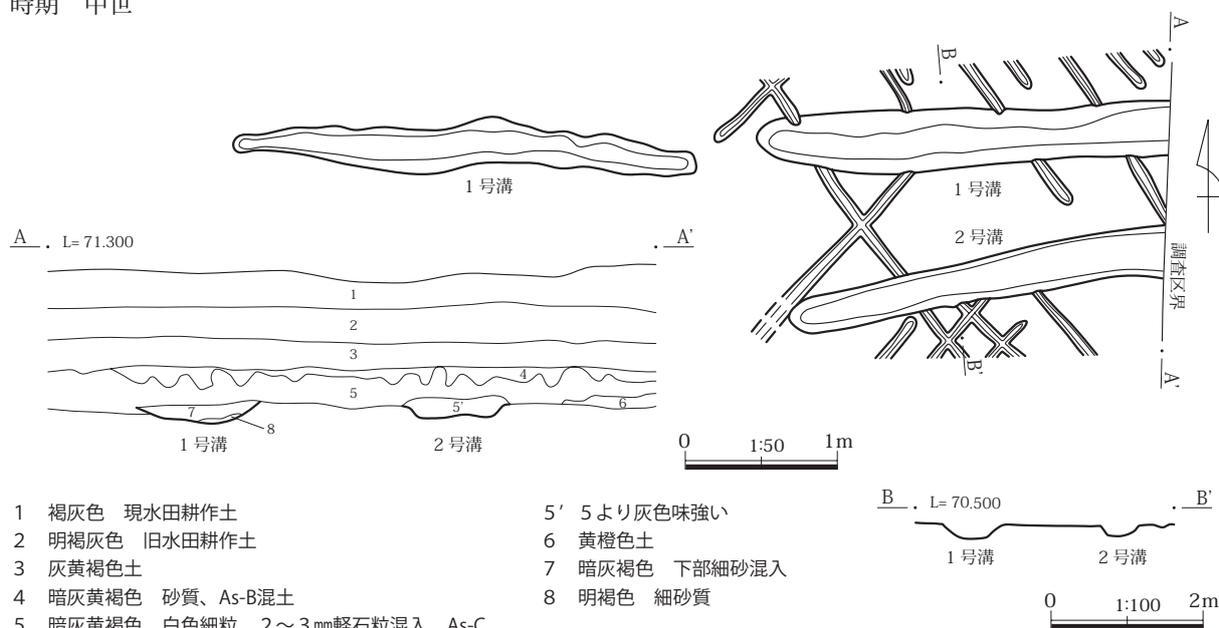
第27図 2区13号溝遺構図

3区1号溝（第28図 図版7）

概要 調査区の北東、1面で検出。2号溝と1.50mの間隔で平行する。畠と重複しているが1号溝が新しい。走向はN86°E、検出長5.42m、幅64～85cm、深さ13～21cmである。覆土 下部に細砂が混入する暗灰褐色土で埋没。遺物 縄文土器深鉢破片 時期 中世

3区2号溝（第28図 図版7）

概要 調査区の北東、1面で検出。1号溝と1.50mの間隔で平行する。畠と重複しているが2号溝が新しい。走向はN86°E、検出長5m、幅50～70cm、深さ9～18cmである。覆土 暗灰黄褐色土で埋没。遺物 ない。時期 中世



- | | |
|------------------------------|---------------|
| 1 褐灰色 現水田耕作土 | 5' 5より灰色味強い |
| 2 明褐灰色 旧水田耕作土 | 6 黄橙色土 |
| 3 灰黄褐色土 | 7 暗灰褐色 下部細砂混入 |
| 4 暗灰黄褐色 砂質、As-B混土 | 8 明褐色 細砂質 |
| 5 暗灰黄褐色 白色細粒、2～3mm軽石粒混入、As-C | |

第28図 3区1号・2号溝遺構図

4区2号溝（第29・33・34図 図版7・13）

概要 調査区の中央部を縦断、1面で検出。全体が水田に重複し北側で6号溝とも重複している。走向はN16°W、検出長36.40m、幅107～250cm、深さ28～48cmである。覆土 3時期に変遷、にぶい黄褐色土、褐灰色土、褐色土で埋没、いずれも細砂が多く混入している。遺物 不明金具2点、釘1点、陶器甕、軟質陶器すり鉢、土師器杯・甕、S字状口縁台付甕、須恵器杯・甕、陶磁器、縄文土器深鉢破片が覆土から出土。時期 中世

4区3号溝（第29・34図 図版7・8・13）

概要 調査区の中央部を縦断、1面で検出。2号溝と17号溝にはさまれている。全体が水田に重複、3号溝が新しい。走向はN15°W、検出長36.40m、幅160～228cm、深さ55～76cm、A断面に当初の姿が現れ、B断面からは埋没した後、その流路を利用して浅い溝が少なくとも4条、流れていることがわかる。覆土 細砂

第2章 検出された遺構と遺物

を多く含む暗灰黄色土、暗黄褐色土などで埋没。遺物 須恵器甕、元豊通寶1点、鉄鏃1点、馬歯、陶器甕、軟質陶器片口、磁器青磁、陶磁器、縄文土器深鉢破片が覆土で出土。時期 中世

4区17号溝（第29図 図版9）

概要 調査区の中央部を縦断、2面で検出。1面で検出した3号溝の西側で平行している。走向はN19°W、検出長14.86m、幅24～56cm、深さ4～10cmである。覆土 灰黄褐色土で埋没。遺物 ない。時期 古代～中世、A断面の7層が畠の耕作土とすると畠よりも古くなる。

4区4号溝（第30図 図版8）

概要 調査区西側を北西から南東の方向に縦断、1面で検出。5号・8号～10号溝と重複しているが4号溝が新しい。逆台形の断面形、しっかりと掘り方で一直線に伸びている。走向はN32°W、検出長27.30m、幅2.40～2.70m、深さ56～86cmである。覆土 にぶい黄褐色土、灰褐色土などで人為埋没。遺物 瀬戸天目茶碗、縄文土器深鉢破片 時期 道という見方、中世としたが現代まで下るとい調査所見もある。

4区5号溝（第30図 図版8）

概要 調査区西側、北西隅寄りの1面で畠、4号溝と重複して検出。畠より新しく、4号溝より古い。9号・10号溝とは直交するようであるが4号溝で途切れ、東側では未検出。走向はN86°W、検出長5.66m、幅70～90cm、深さ16～23cmである。覆土 灰黄色土、灰色土で埋没。遺物 未掲載の土師器杯細片、縄文土器深鉢破片 時期 中世

4区8号溝（第30図 図版9）

概要 調査区の南西部を3号溝の西から南西の方向に横断。2面で検出。6号土坑、4号・10号・11号溝より古いが畠、12号溝よりは新しい。走向はN65°E、検出長26.38m、幅35～100cm、深さ7～28cmである。覆土 暗褐色土で埋没。遺物 未掲載の土師器杯・甕細片、縄文土器深鉢破片 時期 中世

4区9号溝（第30図 図版9）

概要 調査区の西側、2面で4号・8号・11号溝と重複して検出。4号溝よりは古い11号溝よりは新しい。8号溝との関係は不明。10号溝とは約3mの間隔で平行している。走向はN9°W、検出長18.90m、幅28～60cm、深さ5～14cmである。南北に傾斜はない。覆土 暗灰黄色土で埋没。遺物 未掲載の土師器杯細片、縄文土器深鉢破片 時期 中世

4区10号溝（第30図 図版9）

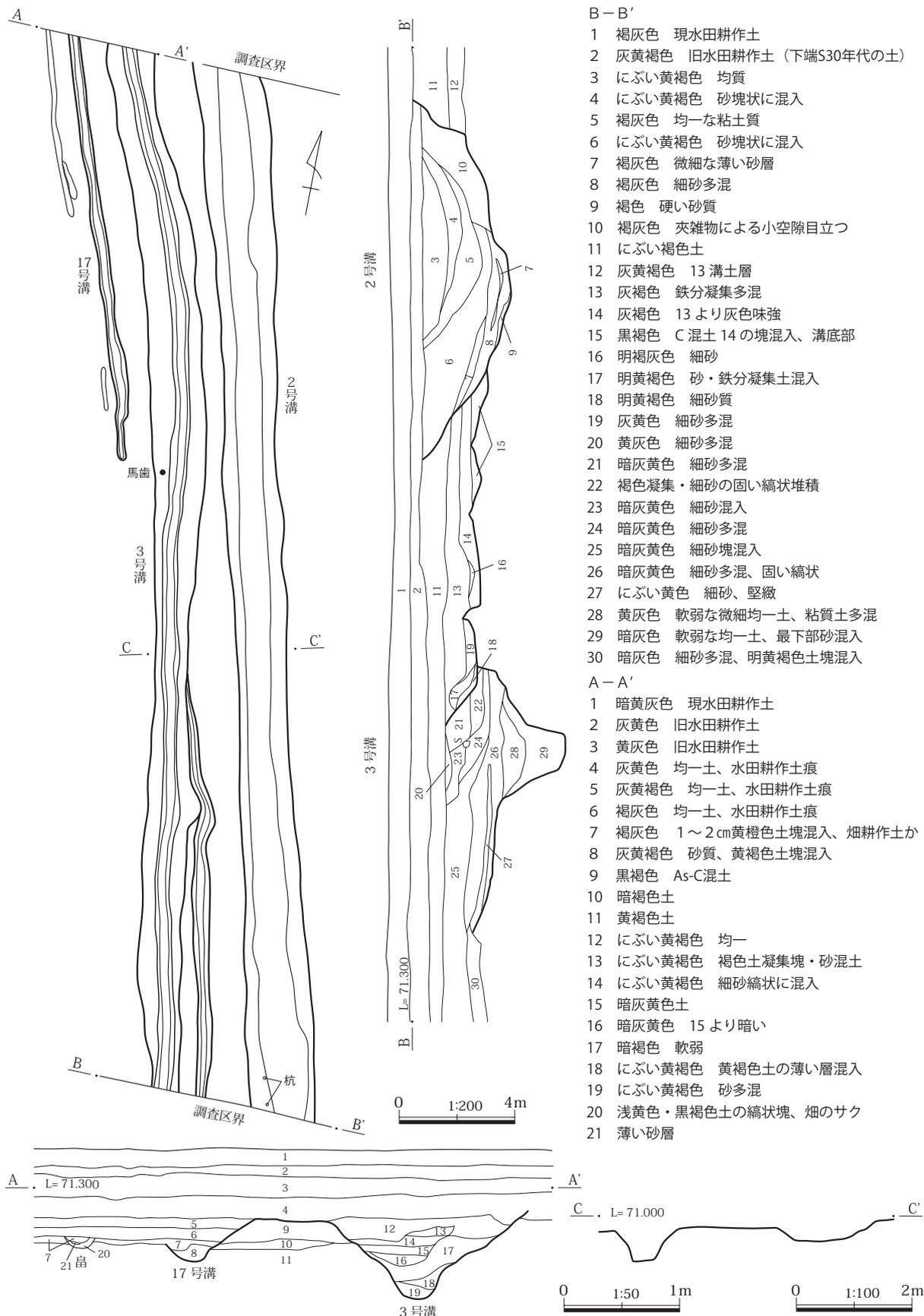
概要 調査区の西側、2面で8号・11号・14号溝と重複して検出。10号溝が新しい。走向はN7°W、検出長14.50m、幅58～86cm、深さ4～14cmである。覆土 暗灰黄色土で埋没。遺物 縄文土器深鉢破片 時期 中世

4区11号溝（第30図 図版9）

概要 調査区の西側、北西から南東の方向に縦断、2面で8号～10号・15号溝と重複して検出。9号溝より古い。走向はN35°W、検出長17.80m、幅26～50cm、深さ11～31cmである。覆土 暗灰黄色土、淡黄色土で埋没、中位に地震による噴砂がある。遺物 未掲載の土師器甕、S字状口縁台付甕細片、縄文土器深鉢破片 時期 古代、噴砂は弘仁九年の地震、溝は地震以前

4区12号溝（第30図 図版9）

概要 調査区の中央部寄り、北東から南西の方向に縦断、2面で8号溝と重複して検出。8号溝よりも古い。走向はN26°E、検出長5.80m、幅36～64cm、深さ4～16cmである。覆土 暗灰黄色土で埋没。遺物 未掲



第29図 4区2号・3号・17号溝遺構図

載の土師器杯・甕細片、縄文土器深鉢破片 時期 中世

4区13号溝 (第30図 図版9)

概要 調査区の中央部寄り、北東から南西の方向に縦断、2面で3号溝と重複して検出。3号溝よりも古い。走向はN43° E、検出長7.20m、幅34～40cm、深さ14～24cmである。覆土 淡黄色土、暗黄色土で埋没、中位に細砂層が堆積。遺物 未掲載の土師器杯細片、縄文土器深鉢破片 時期 中世

4区14号溝 (第30図 図版9)

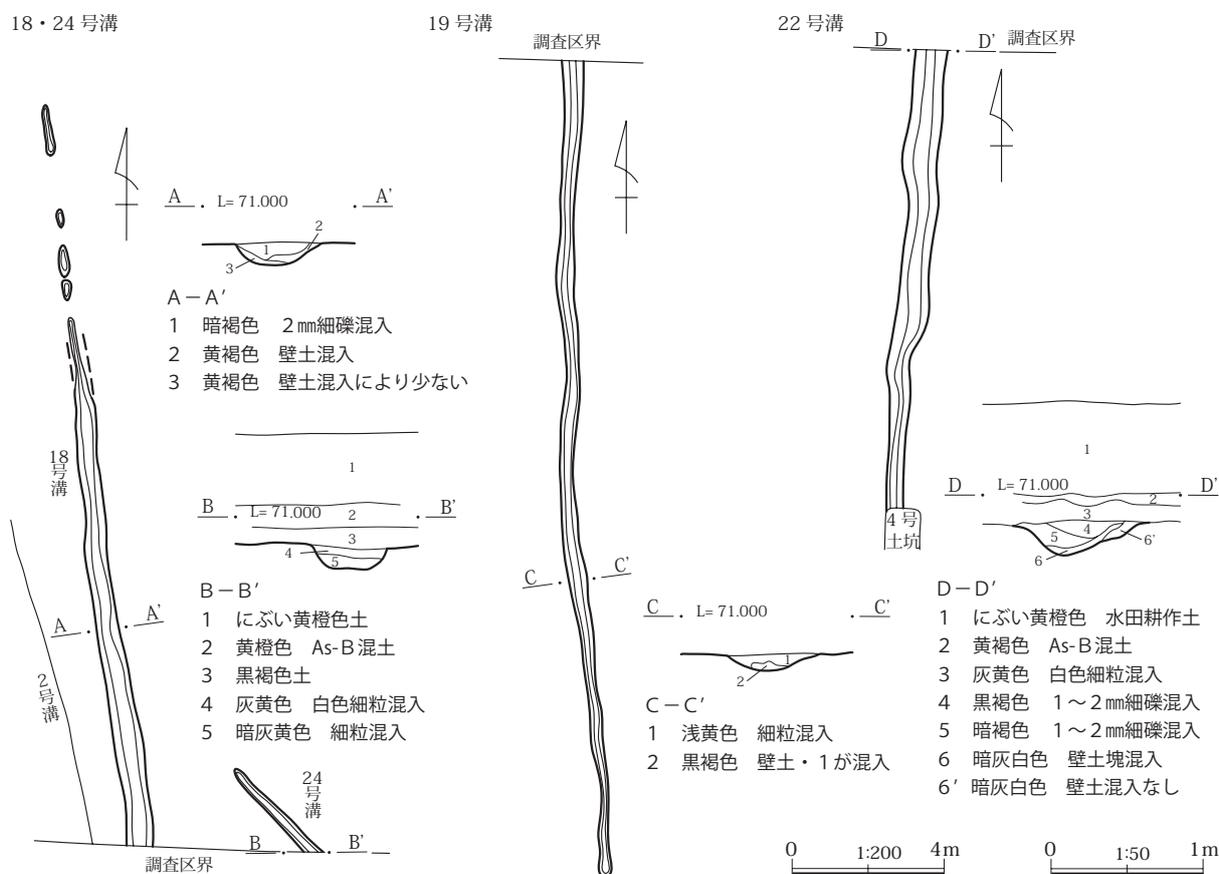
概要 調査区の西側、2面で10号溝と重複して検出。東西に横断、15号溝とは約1mの間隔で平行する。走向はN79° E、検出長7.30m 幅20～36cm 深さ1～5cmである。覆土 灰黄色土で埋没。遺物 ない。時期 中世

4区15号溝 (第30図 図版9)

概要 調査区の西側、2面で9号・11号溝と重複して検出。東西に横断、14号溝とは約1mの間隔で平行する。走向はN76° E、検出長4.90m、幅32～70cm、深さ3～5cmである。覆土 灰褐色土で埋没。遺物 ない。時期 中世

4区18号溝 (第31図 図版9)

概要 調査区の中央部、2面で検出。北端は削平されて途切れている。走向はN12° W、検出長19.78m、幅50～76cm、深さ5～14cmである。覆土 暗褐色土と黄褐色土で埋没。遺物 縄文土器深鉢破片 時期 中世



第31図 4区18号・24号・19号・22号溝遺構図

第2章 検出された遺構と遺物

4区24号溝 (第31図 図版10)

概要 調査区の中央部、2面で南壁にかかって検出。走向はN47° W、検出長9m、幅23～32cm、深さ2～5cmである。覆土 暗灰黄色土、灰黄色土で埋没。遺物 ない。時期 中世

4区19号溝 (第31図 図版10)

概要 調査区の中央部を縦断して2面で検出。南端は途切れている。走向はN 6° W、検出長21.60m、幅20～54cm、深さ2～9cmである。覆土 浅黄色土、黒褐色土で埋没。遺物 ない。時期 中世

4区22号溝 (第31図 図版10)

概要 調査区の中央部を縦断、2面で検出。南端で1号土坑と重複。土坑よりも古い。走向はN 5° E、検出長12.20m、幅42～92cm、深さ10～36cmである。覆土 黒褐色土、暗褐色土、暗灰白色土で埋没。遺物 未掲載の土師器杯・甕細片、縄文土器深鉢破片 時期 中世

4区20号溝 (第32図 図版10)

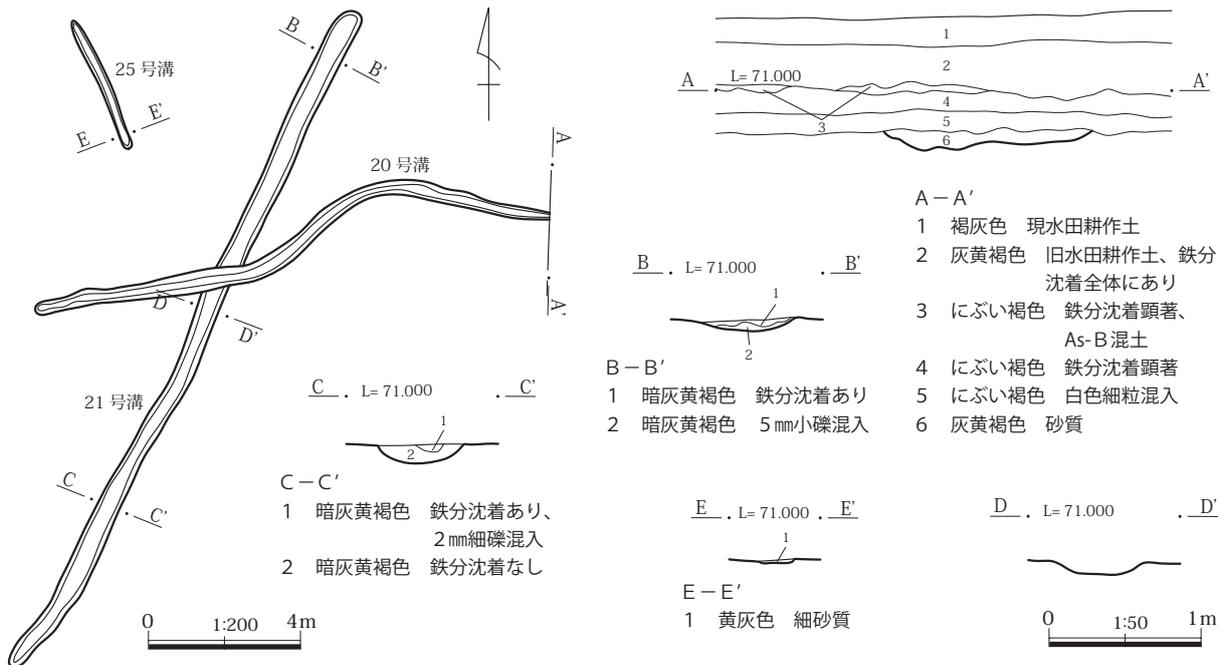
概要 調査区の東側、2面で21号溝と重複して検出。21号溝よりも新しい。東端は調査区外へ続いている。走向はN21° E、検出長14.34m、幅18～58cm、深さ3～9cmである。覆土 灰黄褐色土で埋没。遺物 縄文土器深鉢破片 時期 中世

4区21号溝 (第32図 図版10)

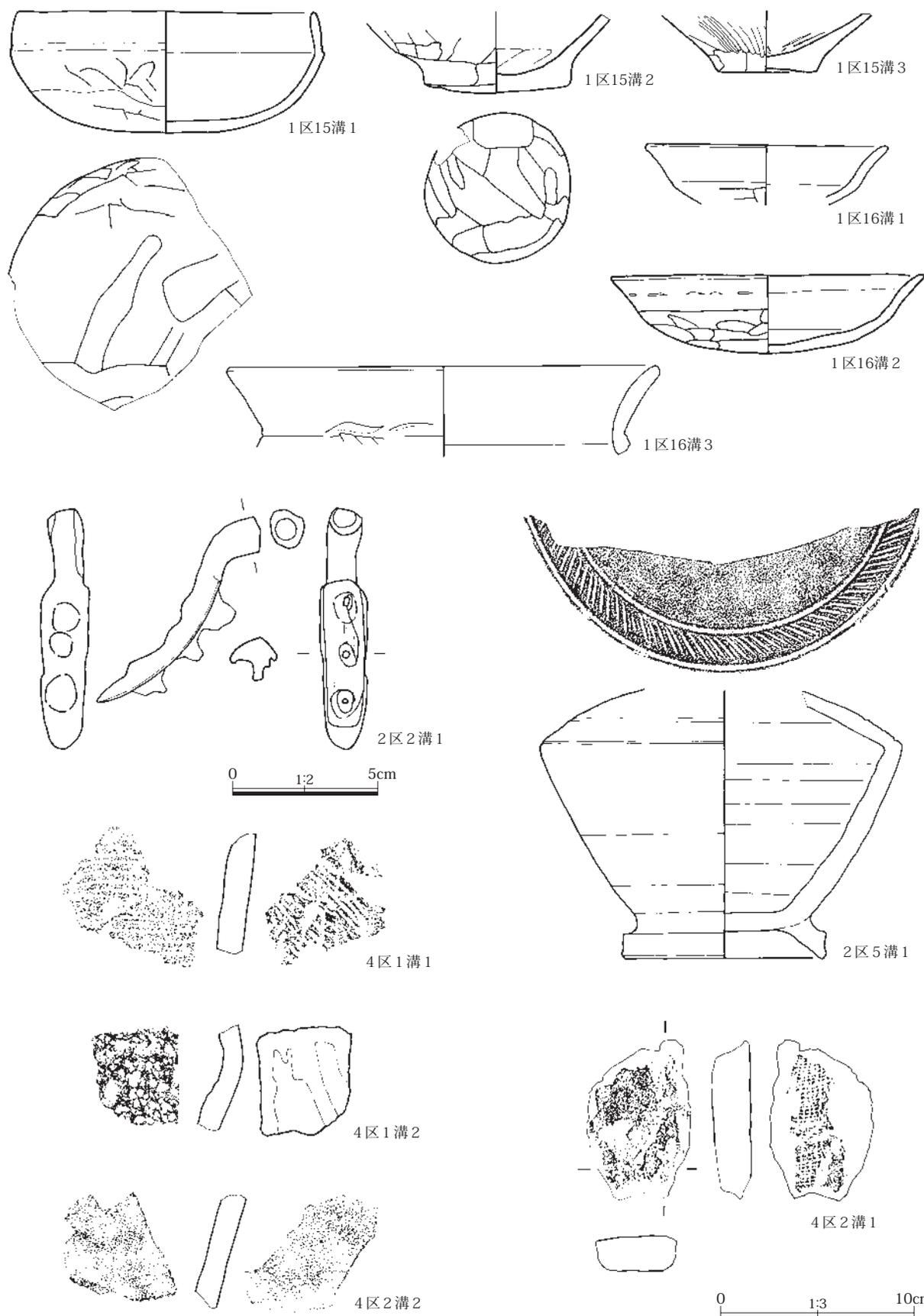
概要 調査区の東側、2面で20号溝と重複して検出。20号溝よりも古い。走向はN77° E、検出長19.56m、幅44～68cm、深さ6～13cmである。覆土 暗灰黄褐色土で埋没。鉄分凝集がある。遺物 縄文土器深鉢破片 時期 中世

4区25号溝 (第32図)

概要 調査区東側の中央、2面で19号溝と21号溝の間で検出。走向はN22° W、検出長3.68m、幅22～30cm、深さ1～3cmである。覆土 黄灰色砂層で埋没。遺物 ない。時期 4号溝の西側で検出された畠の耕作痕と方向、幅や深さが似ている。耕作痕の可能性はある。

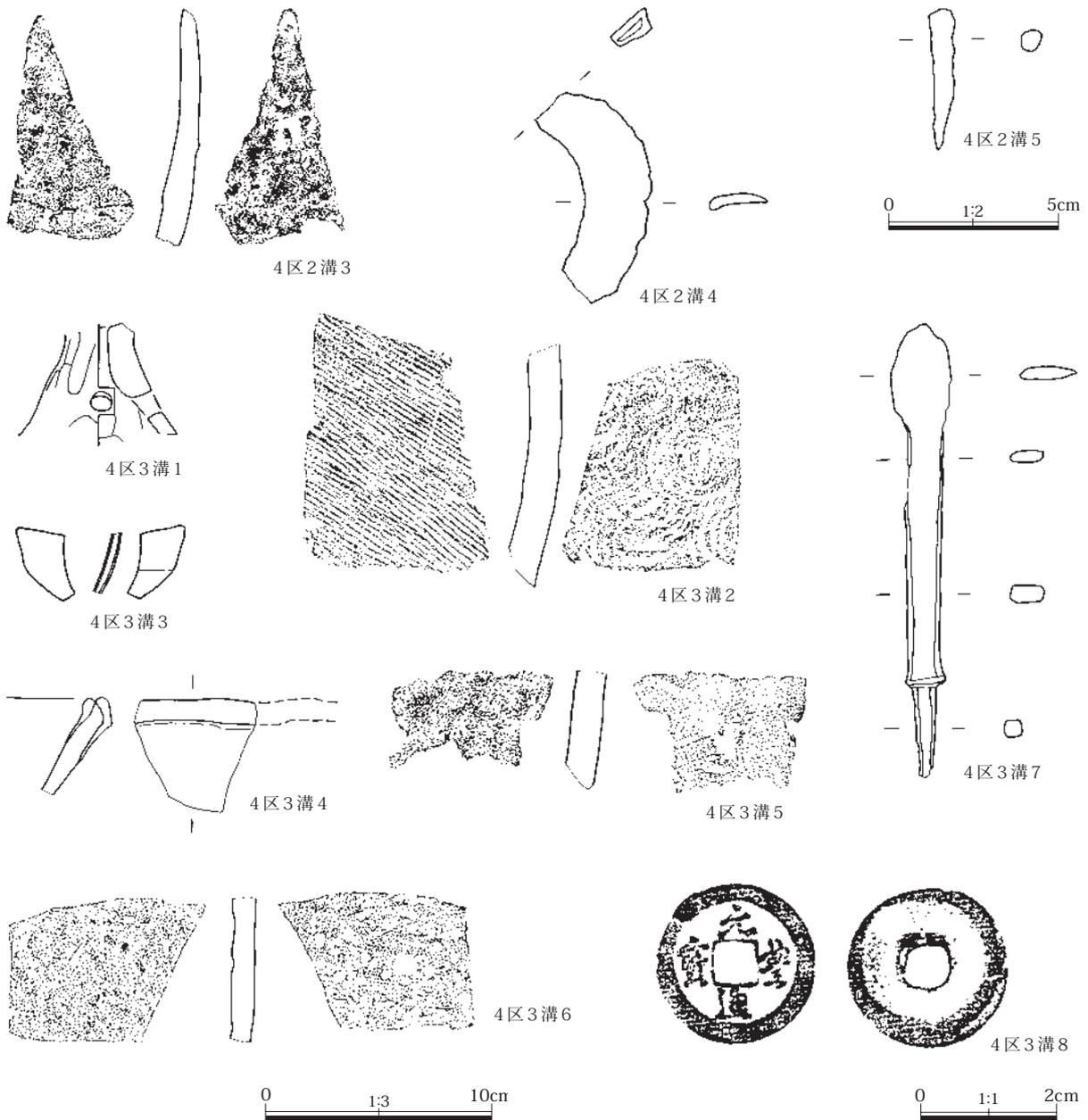


第32図 4区20号・21号・25号溝遺構図



第33图 1区15号·16号·2区2号·5号·4区1号·2号溝遺物図

第2章 検出された遺構と遺物



第34図 4区2号・3号溝遺物図

7 土坑

1区1号土坑 (第35図)

概要 調査区北東隅の1面で10号溝に重複して検出。溝より新しい。形状 方形 長軸182cm、短軸134cm、深さ40cm 主軸方位N 2° E 遺物 未掲載の土師器杯・甕の細片 時期 中世

1区2号土坑 (第35図)

概要 調査区北東隅の1面、単独で検出。1号の南西、30cm足らずの位置にある。形状 円形 長軸137cm、短軸135cm、深さ40cm 遺物 未掲載の土師器杯細片 時期 中世

1区3号土坑 (第35図)

概要 調査区北東隅の1面、単独で検出。1号の南2mの位置にある。形状 方形 長軸146cm、短軸95cm、

7 土坑

深さ63cm 主軸方位N 9° E 底面で検出された土坑は長軸60cm、短軸58cm、深さ5cmである。遺物 未掲載の土師器杯細片 時期 中世

1区4号土坑 (第35図)

概要 調査区東寄りの1面、道路状遺構の硬化面に重複して検出。円形の上に方形が重複。形状 方形 長軸176cm、短軸143cm、深さ36cm 主軸方位N84° W 遺物 未掲載の土師器甕細片 時期 中世

1区5号土坑 (第35図)

概要 調査区東寄りの1面、1号掘立柱建物跡に重複して検出。土坑が新しい。南側が調査区外となっている。形状 方形 長軸153cm以上、短軸92cm、深さ30cm 主軸方位N 5° E 遺物 未掲載の土師器杯 時期 中世

1区6号土坑 (第35図)

概要 調査区東寄りの1面、道路状遺構の硬化面に重複して検出。土坑が新しい。形状 方形 長軸190cm、短軸112cm、深さ32cm 主軸方位N 4° W 遺物 未掲載の土師器杯細片 時期 中世

1区7号土坑 (第35図)

概要 調査区東寄りの1面、単独で検出。8号と1mの位置にある。形状 円形 長軸74cm、短軸71cm、深さ32cm 遺物 ない。時期 中世

1区8号土坑 (第35図)

概要 調査区東寄りの1面、単独で検出。16号と50cm足らずの位置にある。形状 円形 長軸85cm、短軸85cm、深さ39cm 遺物 ない。時期 中世

1区9号土坑 (第35図)

概要 調査区東寄りの1面、10号土坑と重複して検出。10号より新しい。下層には21号土坑があり、全体が3号溝にも重複している。形状 方形 長軸156cm、短軸73cm、深さ23cm 主軸方位N 4° W 遺物 ない。時期 中世

1区10号土坑 (第35図)

概要 調査区東寄りの1面、9号土坑と重複して検出。9号より古い。形状 方形 長軸191cm、短軸121cm、深さ19cm 主軸方位N 3° E 遺物 ない。時期 中世

1区11号土坑 (第35図)

概要 調査区東寄りの1面、16号・17号土坑に重複して検出。最も新しい。形状 方形 長軸115cm以上、短軸172cm、深さ45cm 主軸方位N 8° E 時期 中世

1区12号土坑 (第35図)

概要 調査区東寄りの1面、16号・17号・23号土坑に重複して検出。最も新しい。形状 円形 長軸105cm、短軸104cm、深さ46cm 遺物 未掲載の土師器甕細片 時期 中世

1区13号土坑 (第36図)

概要 調査区東寄りの1面、道路状遺構の硬化面に重複して検出。土坑が新しい。形状 方形 長軸287cm、短軸80cm、深さ17cm 主軸方位N86° W 遺物 ない。時期 中世

1区14号土坑 (第36図)

概要 調査区東寄りの1面、18号・19号・22号土坑と重複して検出。最も古いか。形状 方形 長軸145cm、短軸85cm、深さ6cm 主軸方位N 4° W 遺物 ない。時期 中世

1区15号土坑 (第36図)

第2章 検出された遺構と遺物

概要 調査区中央西寄りの1面、道路状遺構の硬化面に重複して検出。道路状遺構より新しい。形状 方形
長軸114cm、短軸48cm、深さ16cm 主軸方位N80° W 時期 中世

1区16号土坑(第36図)

概要 調査区東寄りの1面、11号・12号・17号土坑と重複して検出。古い方から17号、16号、11号・12号
の順である。形状 方形 長軸297cm、短軸107cm、深さ54cm 主軸方位N10° E 遺物 未掲載の土師器杯
細片 時期 中世

1区17号土坑(第36図)

概要 調査区東寄りの1面、11号・16号土坑と重複して検出。最も古い。形状 方形 長軸264cm、短軸77cm、
深さ66cm 主軸方位N16° E 遺物 ない。時期 中世

1区18号土坑(第36図)

概要 調査区東寄りの1面、14号・19号・20号・22号・24号土坑と重複して検出。最も新しい。形状 方
形 長軸187cm、短軸95cm、深さ48cm 主軸方位N10° E 遺物 ない。時期 中世

1区19号土坑(第36図)

概要 調査区東寄りの1面、14号・18号・22号・24号土坑と重複して検出。18号土坑より古く、14号・22
号・23号土坑より新しい。形状 方形 長軸50cm以上、短軸86cm、深さ46cm 主軸方位N10° E 遺物 ない。
時期 中世

1区20号土坑(第36図)

概要 調査区東寄りの1面、18号・22号・23号土坑と重複して検出。形状 方形 長軸105cm、短軸98cm、
深さ62cm 主軸方位N 2° W 遺物 未掲載の土師器甕細片 時期 中世

1区21号土坑(第36図)

概要 調査区東寄りの1面、9号・10号土坑とともに3号溝に重複して検出。3基の中では最も古い。形状
方形 長軸60cm以上、短軸90cm、深さ22cm 主軸方位N 7° E 遺物 ない。時期 中世

1区22号土坑(第36図)

概要 調査区東寄りの1面、14号・18号・19号・20号・23号・24号土坑と重複して検出。形状 方形 長
軸123cm以上、短軸48cm以上、深さ42cm 主軸方位N-S 遺物 ない。時期 中世

1区23号土坑(第36・38図 図版13)

概要 調査区東寄りの1面、12号、18号、20号と重複して検出。12号・18号・20号土坑より古い。形状
方形 長軸257cm、短軸88cm、深さ8cm 主軸方位N 3° W 遺物 白磁碗 時期 中世

1区24号土坑(第36図)

概要 調査区東寄りの1面、18号・19号・24号土坑と重複して検出。24号土坑との関係は不明であるが、ほ
か2基よりは古い。形状 方形 長軸153cm、短軸73cm、深さ73cm 主軸方位N13° E 遺物 ない。時期
中世

2区1号土坑(第36図)

概要 調査区の中央やや東寄りの1面で5号溝、1号掘立柱建物跡と重複して検出。5号溝より新しい。掘立
柱建物跡と前後するとみられるが関係は不明である。形状 方形 長軸331cm、短軸73cm、深さ20cm 主軸
方位N80° W 遺物 未掲載の土師器杯・甕細片 時期 中世 覆土にAs-Bが混入している。

2区2号土坑(第36図)

7 土坑

概要 調査区の中央やや東寄りの1面、畠に重複して検出。畠より新しい。北側は調査区外である。形状 方形 長軸206cm以上、短軸122cm、深さ30cm 主軸方位N11°E 遺物 ない。時期 中世

2区3号土坑(第36図)

概要 調査区の中央やや東寄りの1面、畠に重複して検出。畠より新しい。形状 方形 長軸221cm、短軸125cm、深さ16cm 主軸方位N 4°E 遺物 ない。時期 中世 覆土にAs-Bが混入している。

3区1号土坑(第36図)

概要 調査区南寄りの1面、道路状遺構に重複して検出。道路状遺構より新しい。形状 円形 長軸78cm、短軸60cm、深さ28cm 遺物 ない。時期 中世

3区2号土坑(第36図)

概要 調査区南寄りの1面、道路状遺構に重複して検出。道路状遺構より新しい。形状 円形 長軸61cm、短軸56cm、深さ21cm 遺物 ない。時期 中世

3区3号土坑(第36図)

概要 調査区北西寄りの1面、畠の耕作痕に重複して検出。畠より新しい。形状 方形 長軸100cm、短軸74cm、深さ18cm 主軸方位N10°W 遺物 ない。時期 中世

3区4号土坑(第37図)

概要 調査区北東寄りの1面、畠の耕作痕に重複して検出。畠より新しい。形状 円形 長軸75cm、短軸75cm、深さ14cm 遺物 ない。時期 中世

3区5号土坑(第37図)

概要 調査区中央の2面、畠の耕作痕に重複して検出。畠より新しい。形状 円形 長軸101cm、短軸97cm、深さ26cm 遺物 ない。時期 中世

3区6号土坑(第37図)

概要 調査区北寄りの2面、単独で検出。形状 円形 長軸69cm、短軸66cm、深さ23cm 遺物 ない。時期 中世

4区1号土坑(第37・38図 図版13)

概要 調査区中央のやや北寄り1面、2号・3号土坑と並んで検出。形状 方形 長軸224cm、短軸94cm、深さ40cm 主軸方位N 3°E 覆土にAs-Bが混入している。遺物 青磁碗が覆土に混入。時期 中世

4区2号土坑(第37図)

概要 調査区中央のやや北寄り1面、3号土坑と重複して検出。3号土坑より新しい。形状 方形 長軸196cm、短軸101cm、深さ43cm 主軸方位N 8°W 遺物 ない。時期 中世

4区3号土坑(第37図)

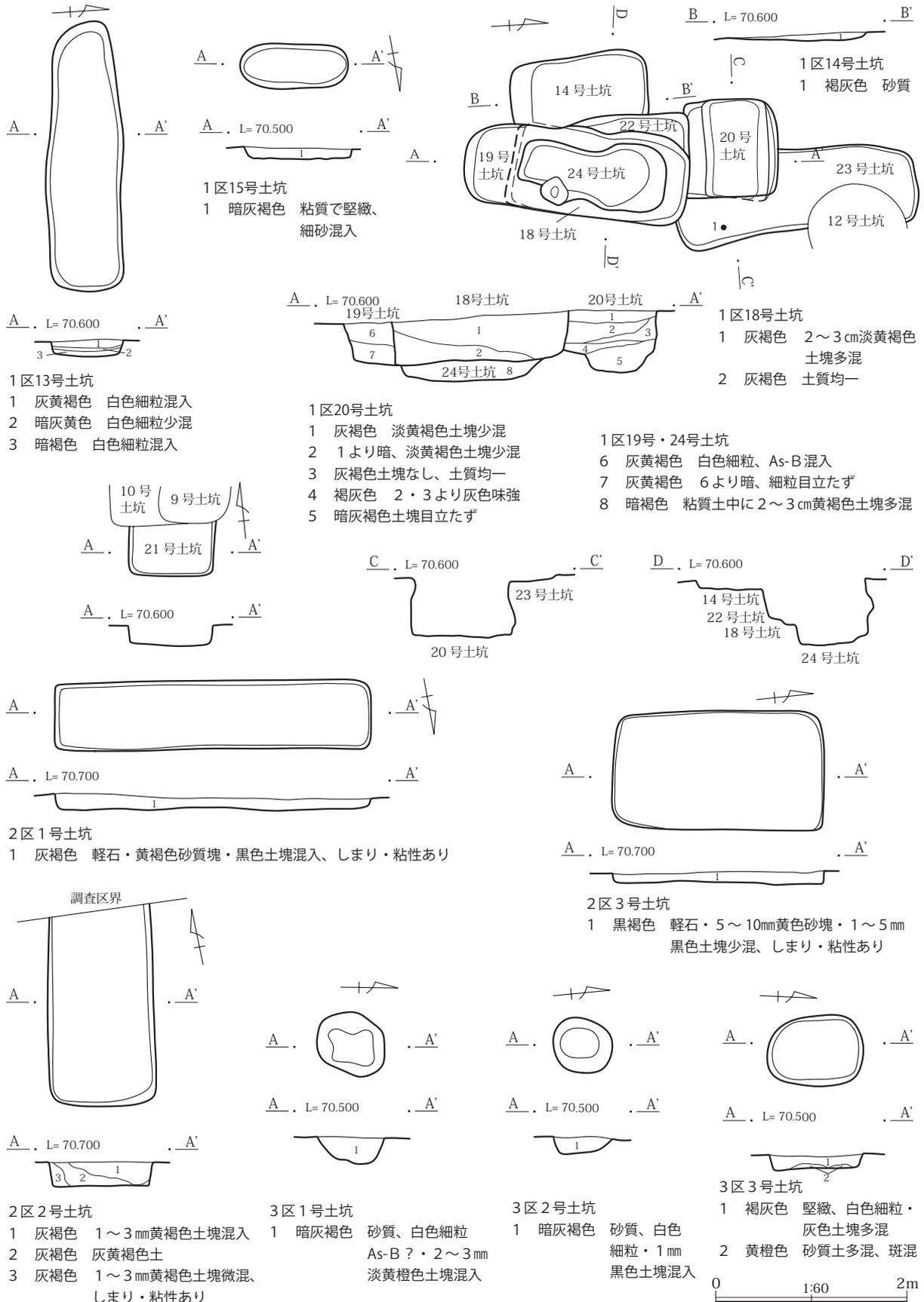
概要 調査区中央やや北寄り1面、2号土坑と重複して検出。2号土坑より古い。形状 方形 長軸168cm、短軸81cm、深さ45cm 主軸方位N 6°E 遺物 未掲載の土師器甕細片 時期 中世

4区4号土坑(第37・38図 図版13)

概要 調査区北東隅の1面、単独で検出。形状 方形 長軸149cm、短軸84cm、深さ23cm 主軸方位N11°W 覆土にAs-Bが混入している。遺物 須恵器蓋 時期 中世

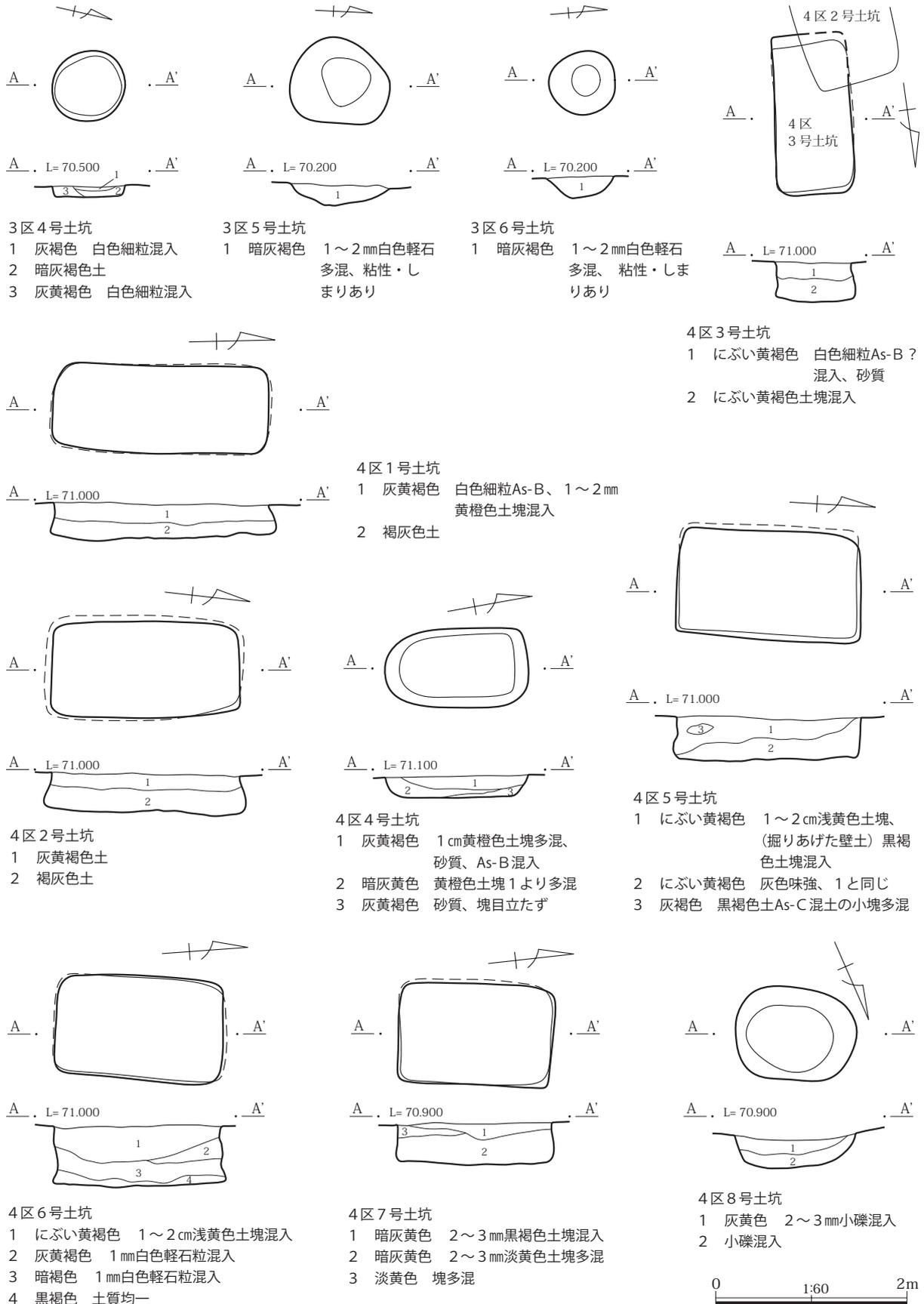
4区5号土坑(第37図)

7 土坑



第36図 1区13号~15号・18号~24号・2区1号~3号・3区1号~3号土坑遺構図

第2章 検出された遺構と遺物



第37図 3区4号・5号・6号・4区1号~8号土坑遺構図

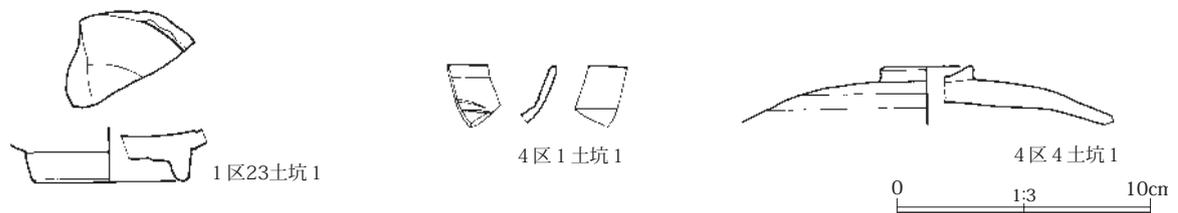
7 土坑

概要 調査区南西隅寄りの2面、畠の耕作痕に重複して検出。畠より新しい。形状 方形 長軸193cm、短軸114cm、深さ45cm 主軸方位N-S 遺物 未掲載の須恵器甕細片、縄文土器深鉢胴部破片 時期 中世
4区6号土坑 (第37図)

概要 調査区南西隅寄りの2面、8号溝に重複して検出。8号溝より新しい。形状 方形 長軸175cm、短軸110cm、深さ67cm 主軸方位N 9° E 遺物 未掲載の土師器杯・甕細片 時期 中世
4区7号土坑 (第37図)

概要 調査区中央の西寄り2面、単独で検出。形状 方形 長軸162cm、短軸107cm、深さ47cm 主軸方位N 8° E 遺物 未掲載の土師器杯細片、縄文土器深鉢破片 時期 中世
4区8号土坑 (第37図)

概要 調査区のほぼ中央の2面、17号溝の延長線上を調査中に検出。形状 方形 長軸126cm、短軸97cm、深さ36cm 主軸方位N62° E 遺物 ない。時期 中世



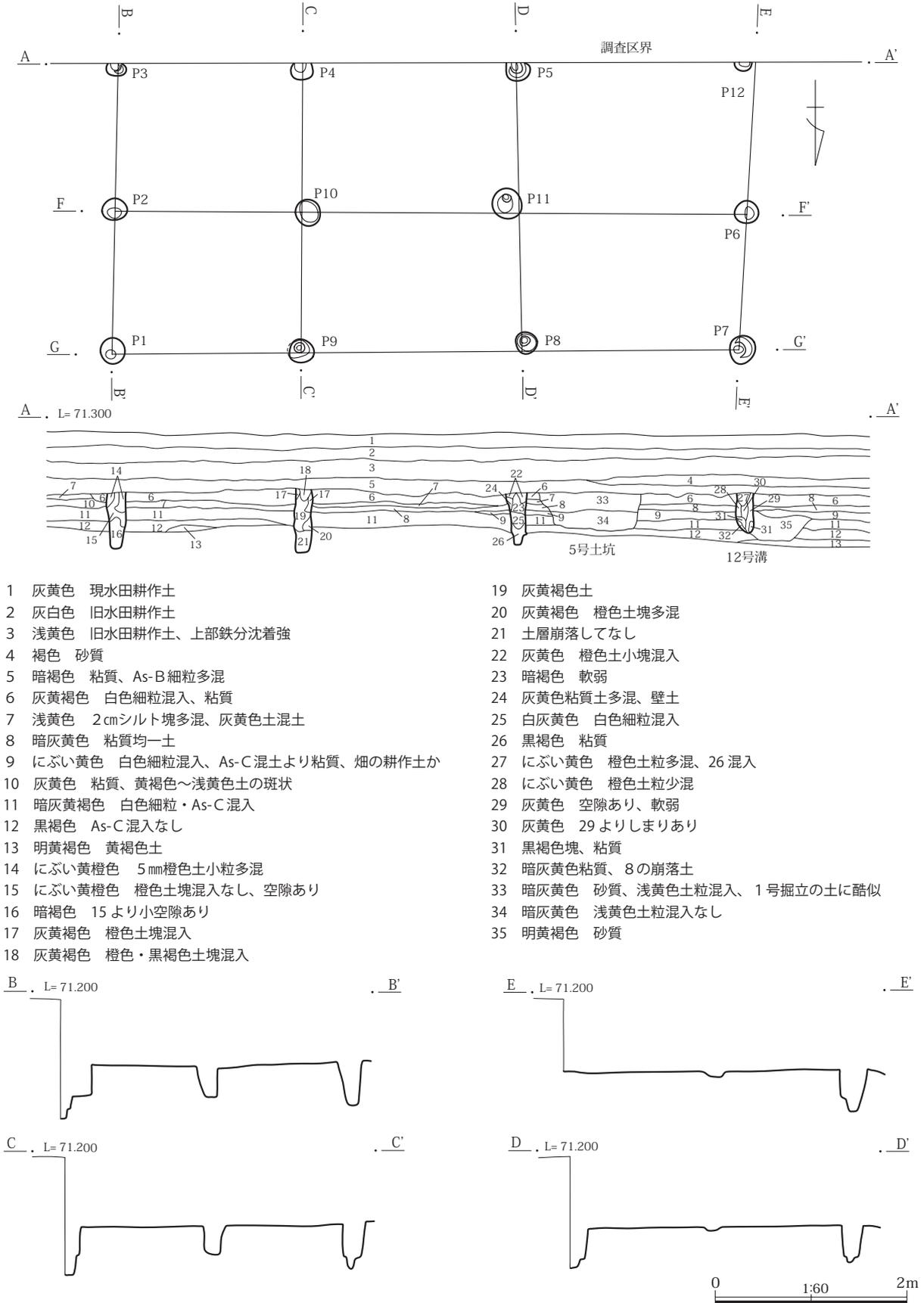
第38図 1区23号・4区1号・4区4号土坑遺物図

8 掘立柱建物跡

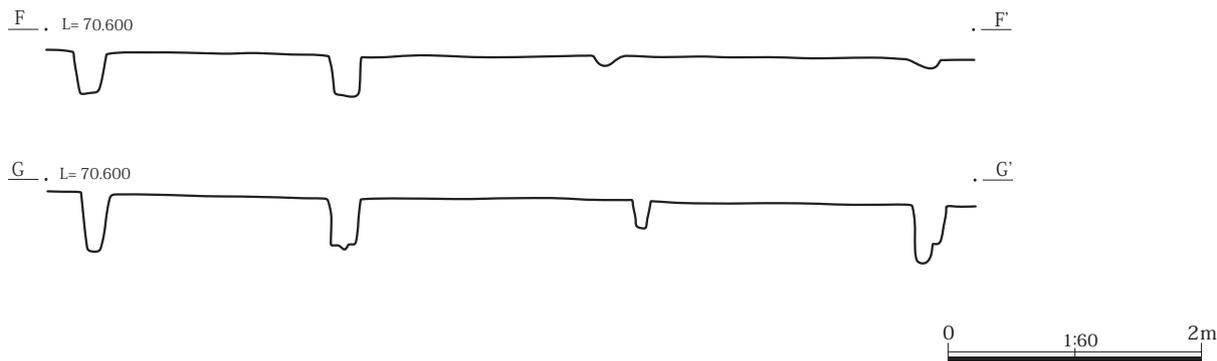
1区1号掘立柱建物跡 (第39・40図 図版10)

概要 調査区の南東隅に近い1面、南側は調査区の壁にかかり検出。現状では桁行3間、梁間2間の総柱。規模 北桁行6.60m、南桁行6.62m 東梁間3.04m、西梁間3.05m 主軸方位N91° E 柱穴は円形、P 3、P 5、P 7、P 8、P 9、P 11で柱痕が認められた。長径・短径・深さは、次のとおりである。P 1は28・26・48cm、P 2は27・23・33cm、P 3は21・13以上・23cm、P 4は23・16以上・52cm、P 5は25・20以上・42cm、P 6は25・24・5cm、P 7は31・27・47cm、P 8は23・22・40cm、P 9は26・24・53cm、P 10は28・25・35cm、P 11は32・31・32cm、P 12は19以上・8以上・43cmである。柱間は、梁間が145～160cm、平均150cm、桁行が195～250cmと幅があり平均では220cmである。掘り込み面は、調査区南壁5層上面、同じ層位と見られるのが2号・3号・5号溝、5号土坑である。このうちで5号土坑とは重複しているが、北側には1区の土坑が集中している。

第2章 検出された遺構と遺物



第39図 1区1号掘立柱建物跡遺構図(1)

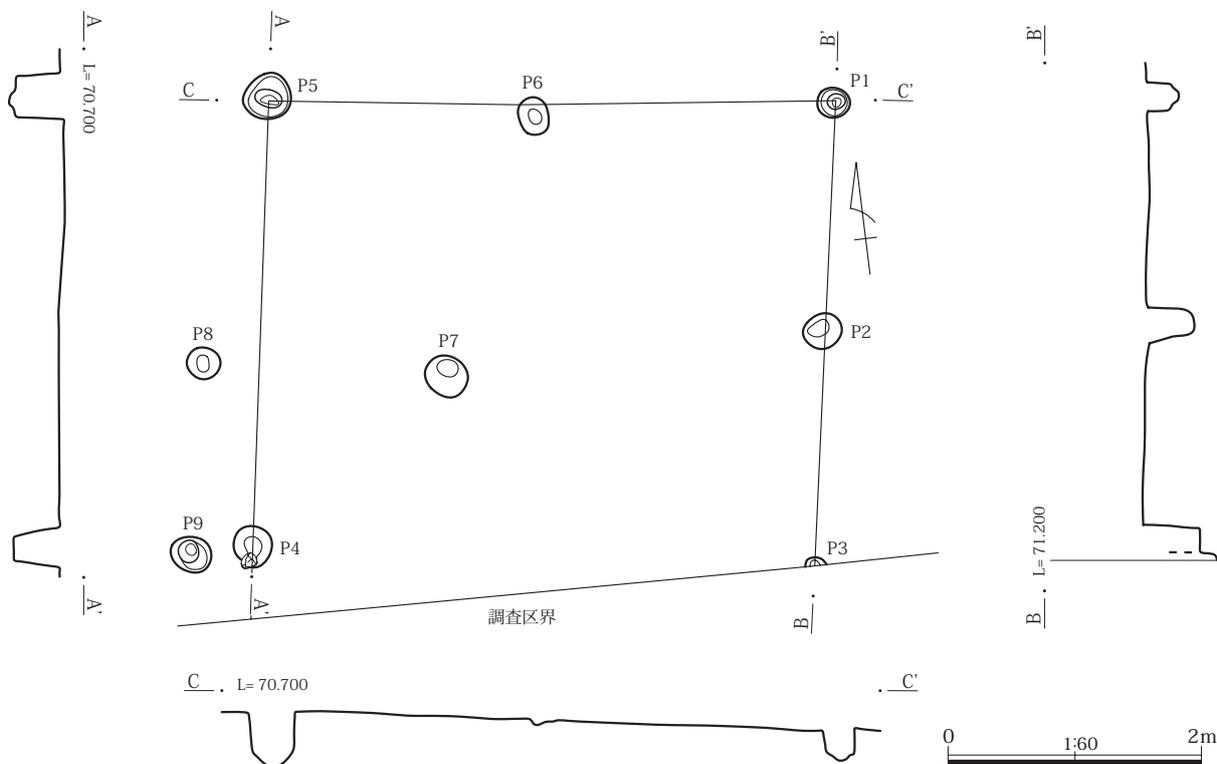


第40図 1区1号掘立柱建物跡遺構図(2)

2区1号掘立柱建物跡(第41図 図版10)

概要 調査区東寄りの1面で検出。南側は調査区外である。13号・5号溝と重複していて最も新しい。南北棟、桁行2間以上、梁間2間、規模 東桁行3.65m以上、北梁間4.48m 主軸方位N9° E 想定するプラン内には西桁側に3本の柱穴がある。これは、1号とは別の掘立柱建物跡の可能性があり。柱穴の長径・短径・深さは次のとおりである。P 1は25・24・26cm、P 2は30・28・37cm、P 3は17・7以上・58cm、P 4は33・30・39cm、P 5は37・35・43cm、P 6は29・23・21cmである。P 1とP 5で柱痕らしい掘り方が認められた。また、P 4の上端には被熱跡がある割石がある。柱間は、P 1とP 2が180cm、P 2とP 3が185cm、P 4とP 5が355cm、P 5とP 6が210cm、P 6とP 1が238cmである。

想定するプラン内には西桁側に、本跡とは別のP 7～P 9、3本の柱穴がある。柱穴の長径・短径・深さは、P 7が34・30・64cm、P 8は27・24・35cm、P 9は33・28・55cmである。時期 中世

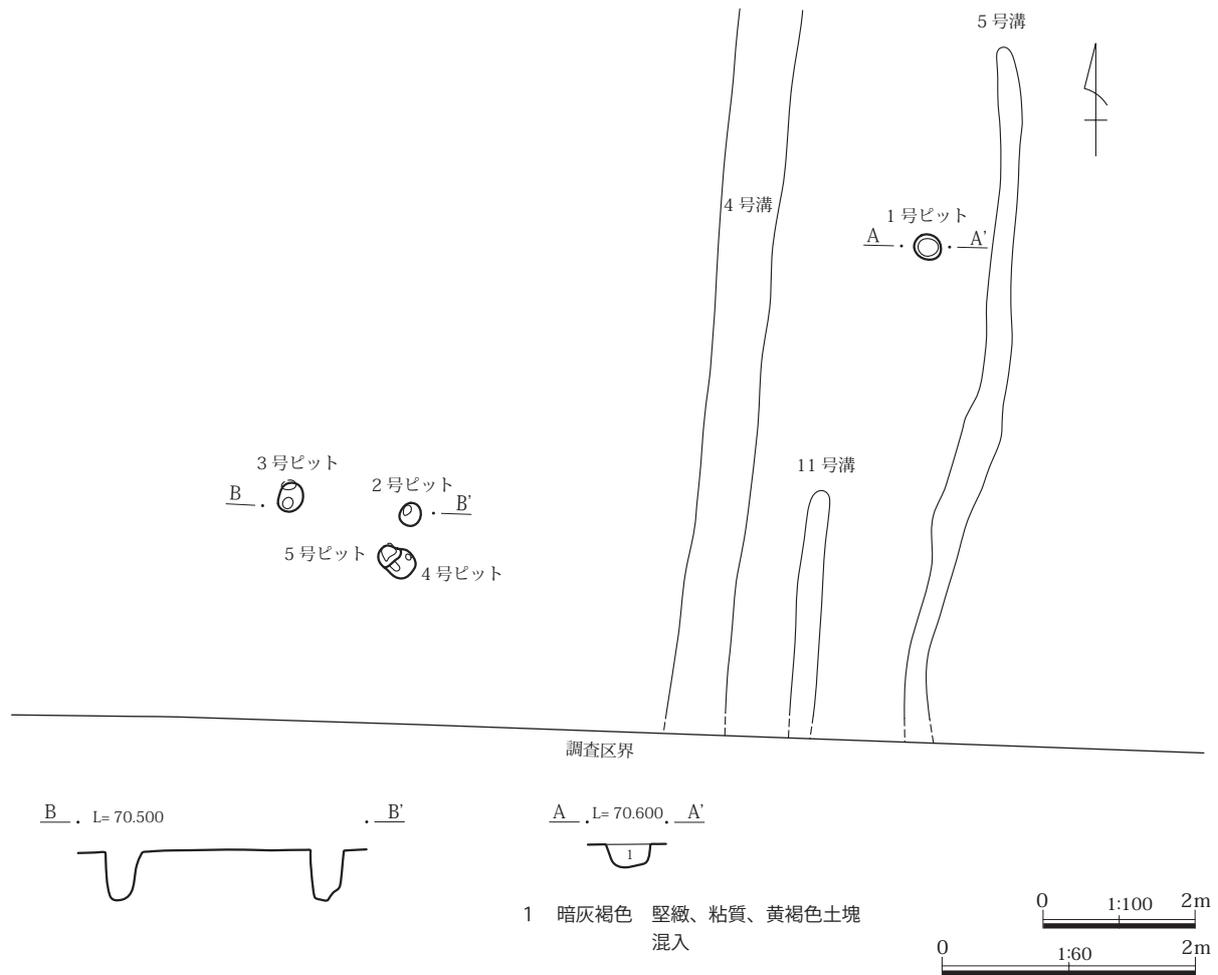


第41図 2区1号掘立柱建物跡遺構図

9 ピット

1区ピット (第42図)

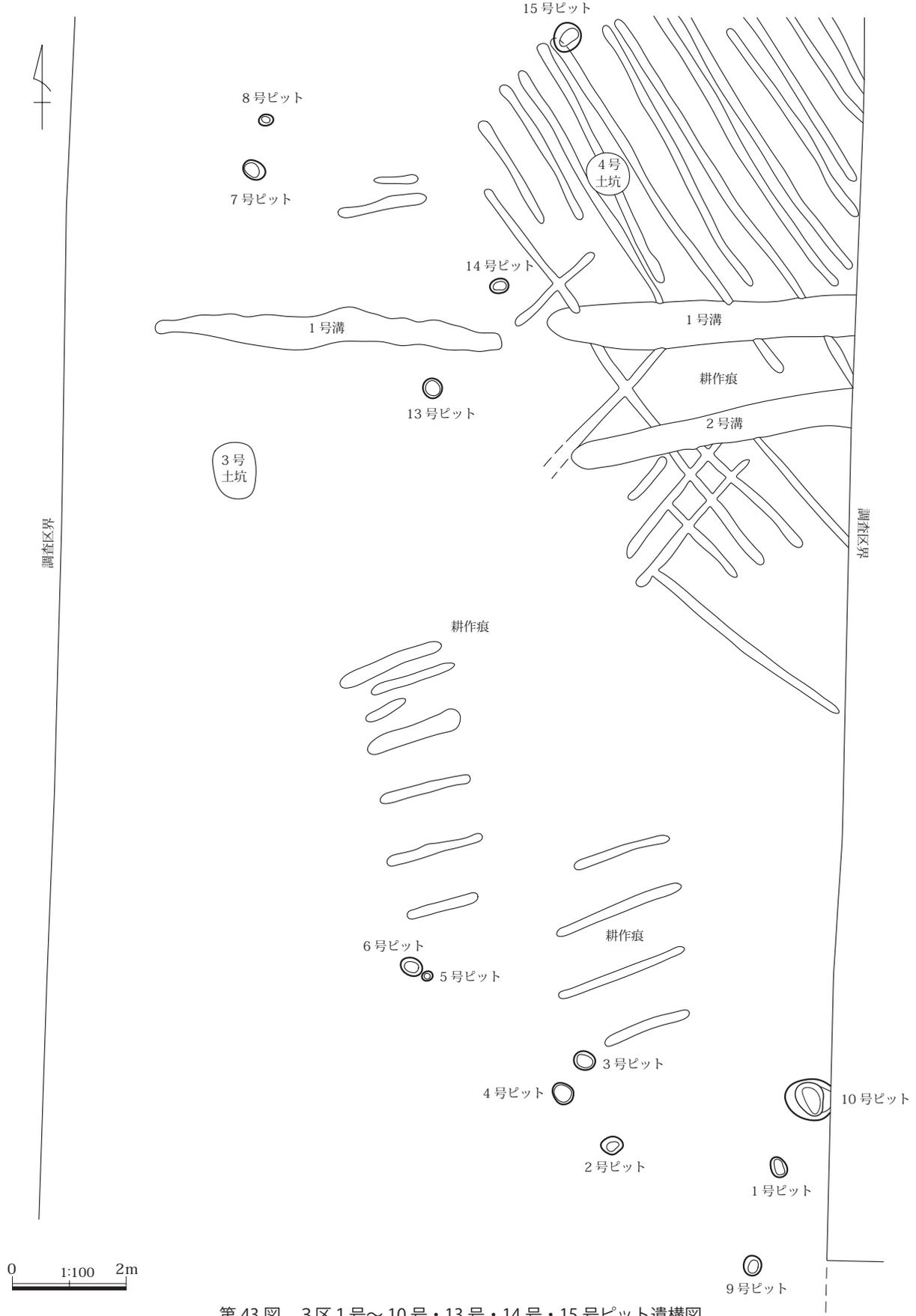
概要 調査区中央部の1面、1号溝と5号溝との間で5基を検出。1号は道路状遺構に重複、2号から5号は道路状遺構に隣接している。規模 直径が24～39cm、深さ18～57cmである。形状については円形が1・2・5号、方形が3・4号である。性格 集中していることから掘立柱建物跡として検討したが、まとまりがなく単独のピットのままとした。時期 中世



第42図 1区1号～5号ピット遺構図

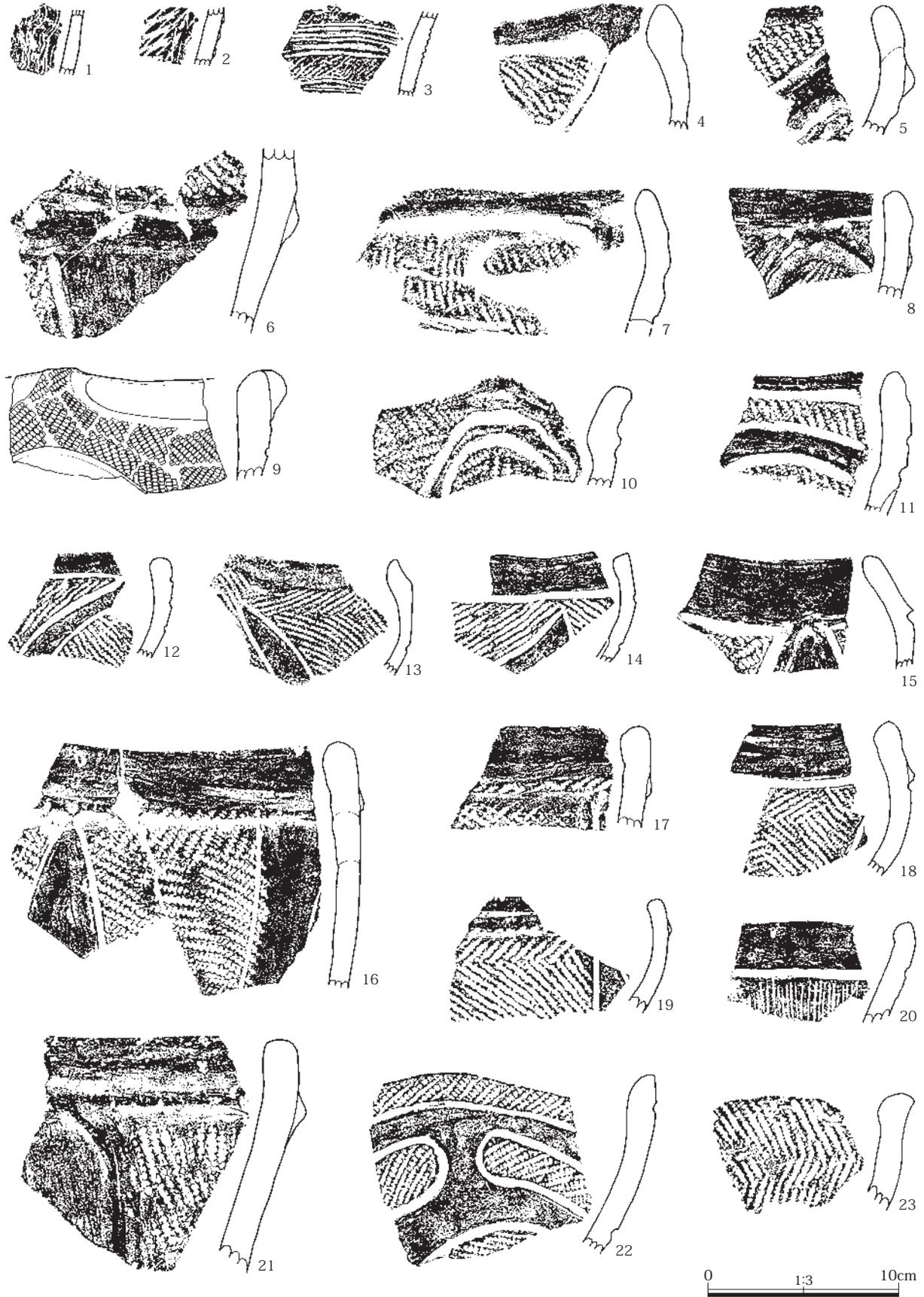
3区ピット (第43図)

概要 調査区中央、道路状遺構から北側の1面で13基を検出。10mほど離れて北と南に半数ずつでまとまる。ともに畝の耕作痕とは隣接しているが、ちょうど耕作痕の途切れたあたりである。15号だけは耕作痕に重複している。また、北側では3号、4号、2基の土坑とも混在している。土坑とピットを区別するのは規模の大小であるが、10号だけは例外的な大きさと土坑と比べても差がない。規模 直径が18～73cm、35cm前後が半数以上を占める。深さは9～35cmである。形状については、6・7・8号が方形のほかはすべて円形である。性格 1区同様、軽易な建物の一部と想定したが可能性にとどまる。時期 中世、10号だけが東壁の深掘りで掘り込み面を確認することができた。

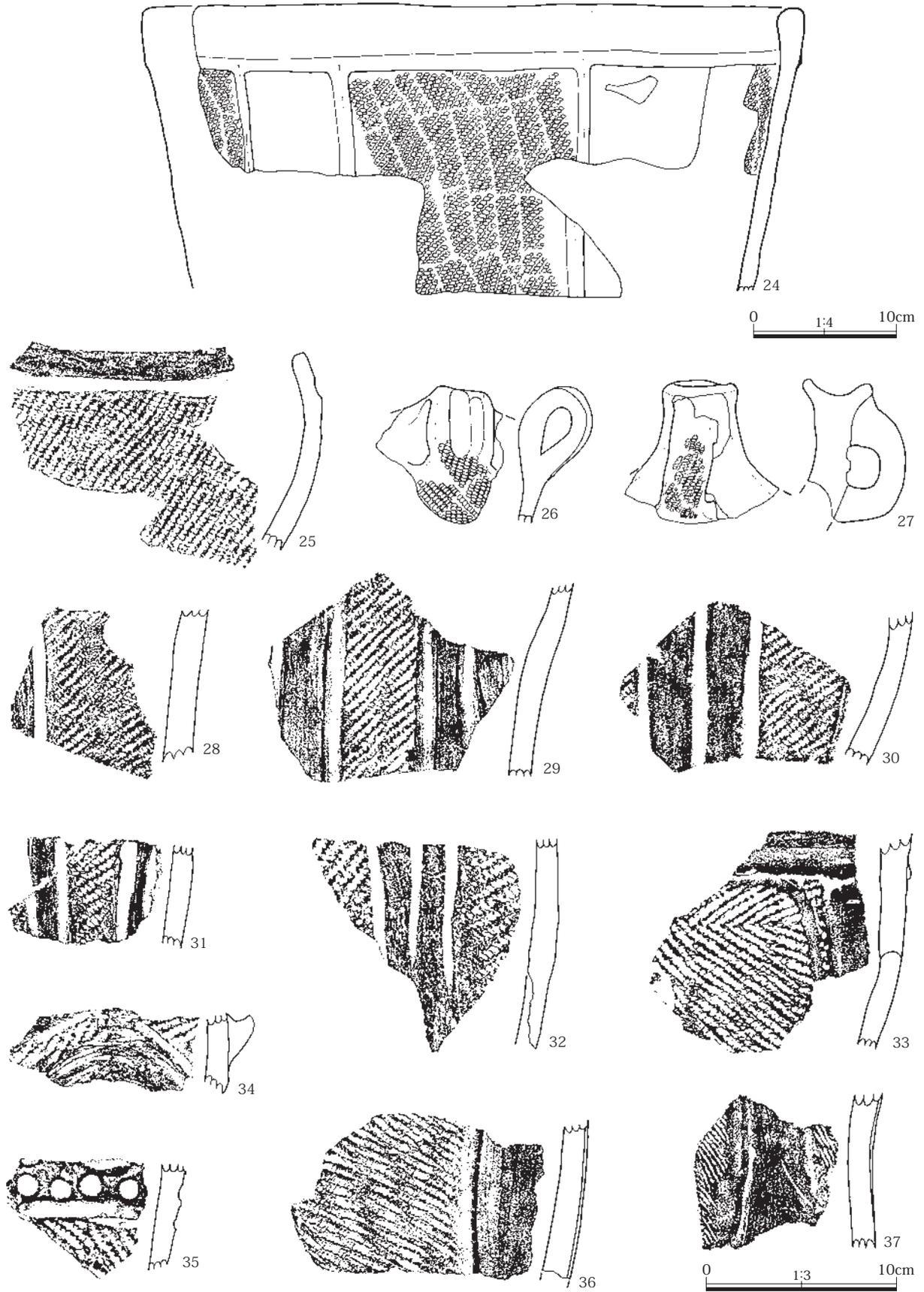


第43図 3区1号~10号・13号・14号・15号ピット遺構図

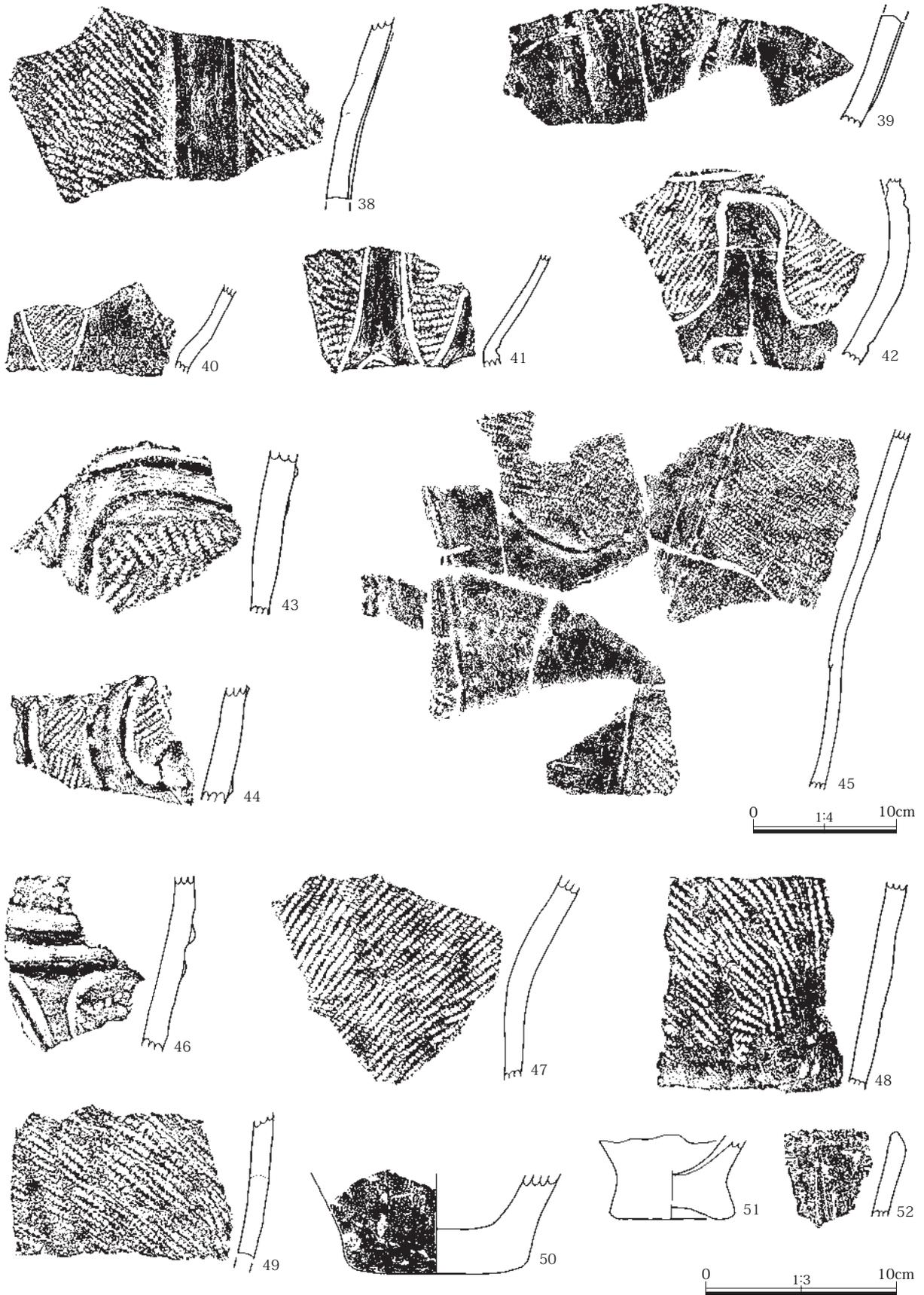
第2章 検出された遺構と遺物



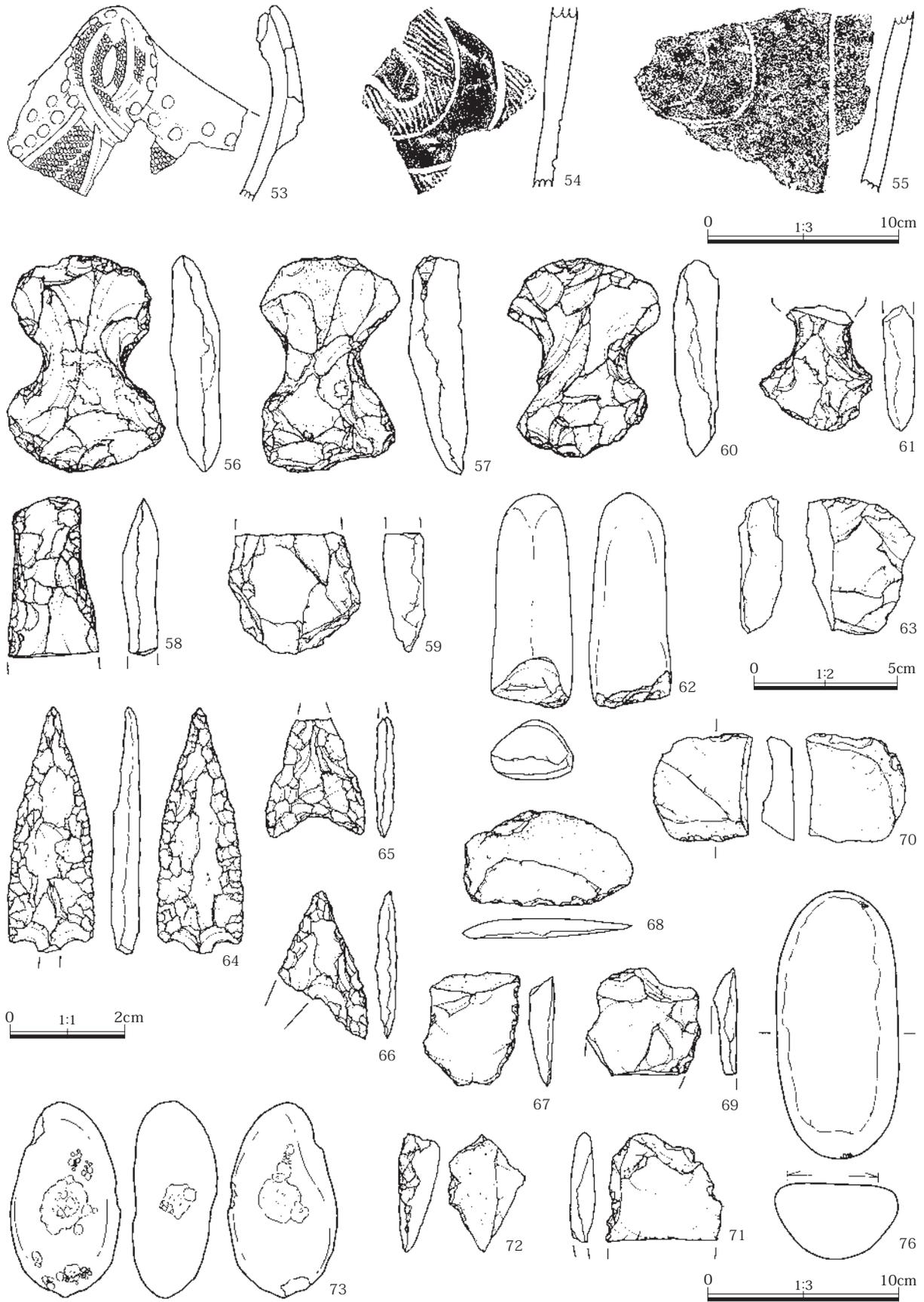
第44図 遺構外遺物図(1)



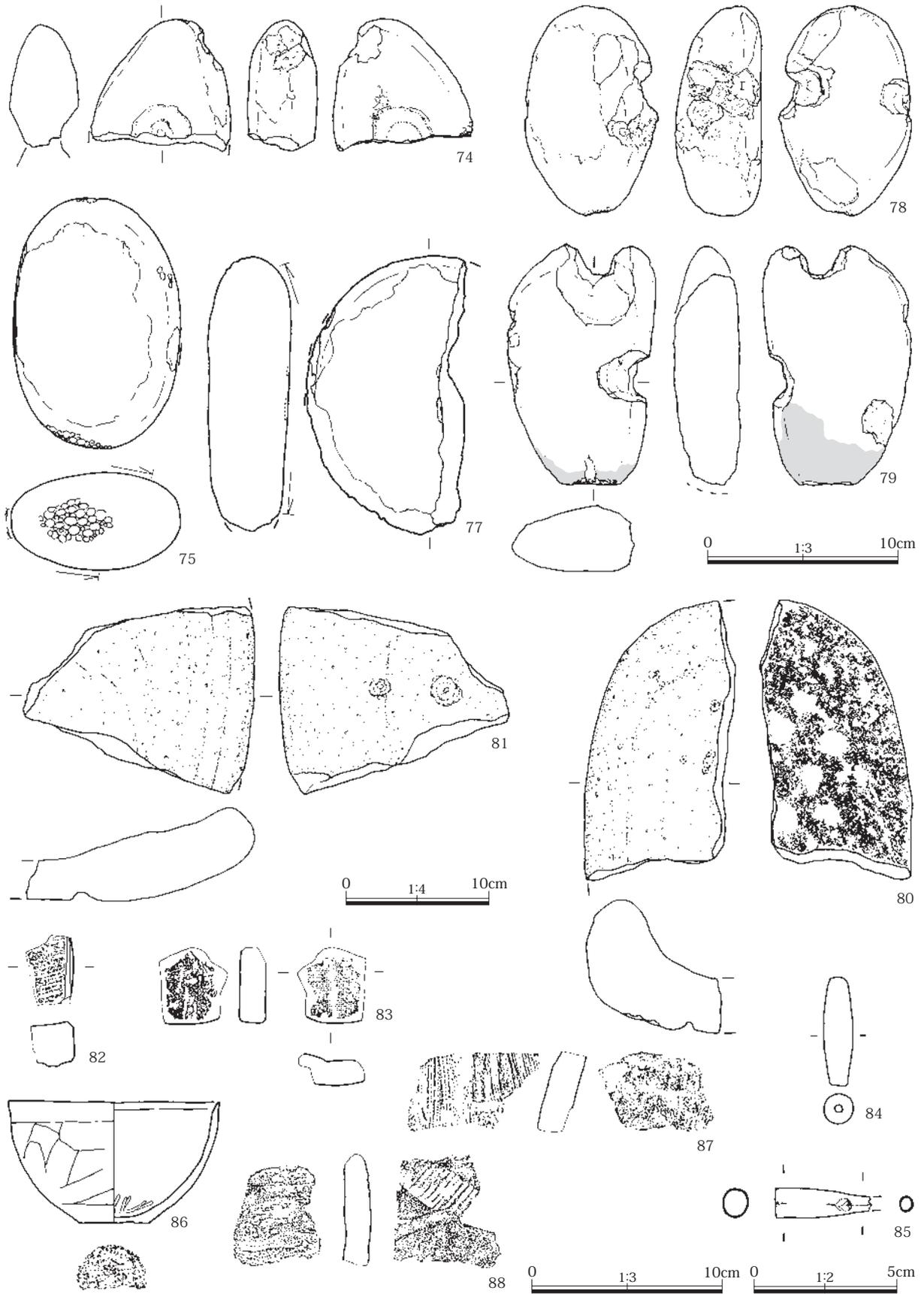
第 45 图 遺構外遺物图 (2)



第46図 遺構外遺物図(3)



第47图 遺構外遺物图(4)



第48図 遺構外遺物図(5)

遺物観察表

土器類観察表

出土位置	種別	器形	口径 (長) cm	底径 (幅) cm	器高 (厚) cm	残存	胎土	色調	焼成	形・成調整等	図番
1区1住1	土師器	坏	(10.8)	-	-	口縁部片	細砂粒	赤褐	酸化		7
4区1住1	土師器	甕	17.0	-	25.3	略完	砂粒	にぶい橙	酸化	胴部中位に接合痕	7
4区1住2	土師器	甕	17.1	3.3	28.0	略完	砂粒	明赤褐	酸化		7
4区1住3	土師器	甕	-	-	0.6	胴部	砂粒	にぶい橙	酸化		7
4区1住4	土師器	甕	-	6.6	-	胴部下半	砂粒	にぶい黄褐	酸化	胴部丸み,煤付着	7
1区15溝1	土師器	坏	(15.2)	-	6.2	1/4	細砂粒	赤褐	酸化		33
1区15溝2	土師器	甕	-	7.4	-	底部	砂粒	にぶい橙	酸化		33
1区15溝3	土師器	甕	-	(5.0)	-	底部	砂粒	にぶい橙	酸化		33
1区16溝2	土師器	坏	(16.0)	-	4.0	1/4	砂粒	明褐	酸化	外底非回転ケズリ	33
1区16溝1	土師器	坏	(12.2)	-	-	口縁部片	砂粒	橙	酸化		33
4区1溝1	埴輪	円筒	-	-	1.4	破片		にぶい赤褐	酸化	内外面ハケ目?	33
4区2溝1	瓦	平瓦	(8.1)	(5.3)	1.9	破片	砂粒	灰	還元	布目	33
4区3溝1	土師器	器台	-	-	0.7	脚部上半	砂粒	にぶい橙	酸化	4方向円形透かし	34
4区3溝2	須恵器	甕	-	-	1.5	胴部片	砂粒	灰	還元	外面平行タタキ目,内面同心円タタキ目	34
遺構外83	瓦	平瓦	(4.0)	(3.5)	1.4	破片		にぶい橙	還元	布目	48
遺構外82	瓦	平瓦	(3.6)	(2.4)	-	破片	砂粒	褐灰	還元	面取りあり	48
遺構外86	土師器	坏	(10.8)	(3.6)	6.4	1/5	白色粒	にぶい黄橙	酸化		48
遺構外87	埴輪	円筒	-	-	1.6	破片	細砂粒	橙	酸化	外面ハケ目	48
2区5溝1	須恵器	壺	-	10.0	-	頸部欠	細砂粒	灰	還元	肩部に櫛文	33
1区16溝3	土師器	甕	(21.8)	-	-	口縁部片	砂粒	橙	酸化		33
4区4土1	須恵器	蓋	摘み径(3.4)	-	-	天井部片	砂粒	灰白	還元		38
遺構外84	土製品	土錘	3.8	1.0	1.05	略完	細砂粒	褐	酸化		48

陶磁器観察表

出土位置	種別	器形	口径 (長) cm	底径 (幅) cm	器高 (厚) cm	残存	胎土	色調	焼成	形・成調整等	備考	図番
1区23土1	磁器	白磁 碗	-	(6.4)	-	底部片	精良	灰	還元		12C	38
4区1土1	磁器	青磁? 碗	-	-	0.4	口縁部片	精良	オリーブ黄	還元		中世	38
4区1溝2	陶器	甕	-	-	1.3	肩部片	砂粒	灰	還元	褐色釉?	中世	33
4区2溝3	陶器	甕	-	-	1.3	胴部片	砂粒	灰オリーブ	還元	外面に格子目スタンプ	中世	33
4区2溝2	軟質陶器	すり鉢	-	-	1.2	胴部片	砂粒	灰	還元		中世	33
4区3溝4	軟質陶器	片口	-	-	0.9	口縁部片		灰オリーブ	還元			34
4区3溝5	陶器	甕	-	-	1.4	胴部片		にぶい赤褐		外面に格子目叩き		34
4区3溝6	陶器	甕	-	-	1.0	胴部片		褐		内外面褐色,焼締め?		34
4区3溝3	磁器	青磁 碗	-	-	0.4	体部片	精良	暗オリーブ	還元	釉が厚い		34
遺構外 88	軟質陶器	甕	-	-	1.4	胴部片		灰	還元	外面に平行叩き目		48

金属品観察表

出土位置	種別	器形	長 cm	幅 cm	厚 cm	重さ g	残存	図番
遺構外 85	銅	キセル吸口	(3.3)	0.9	0.9	2.3	略完	48
2区2溝1	鉄	錠	(6.8)	1.6	1.4 × 1.1	22.4		33
4区2溝4	鉄	不明金具	(6.3)	1.8	0.3	11.1		34
4区2溝5	鉄	釘	(4.1)	0.6	0.6	1.9	略完	34
4区3溝8	銅銭	元豊通宝	径 2.3	-	-	2.3	略完	34
4区3溝7	鉄	鍬	全長 13.5			22.3	略完	34
		鍬身	10.6	1.8	0.4			
		茎	2.9	0.6	0.5			

第2章 検出された遺構と遺物

縄文土器観察表

番号	器形	残存	胎土	色調	焼成	形・成調整等	備考	図番
1	深鉢	胴部片	粗砂	にぶい黄橙	良好	半截竹管による平行沈線を縦位に複数条施紋。	前期後葉	44
2	深鉢	胴部片	粗砂	にぶい橙	ふつう	刻みを付した浮線を斜位に複数条施紋。右端の浮線は弧を描いている。紋様帯内のモチーフか。	諸磯b式	44
3	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、石英	明黄褐	良好	集合沈線による横帯構成。地紋に無節L R 縄紋施紋。	諸磯b式	44
4	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。口縁部楕円状区画。R L 縄紋充填施紋。	加曽利E 3式	44
5	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁部楕円状区画。区画内にR L 縄紋充填施紋。	加曽利E 3式	44
6	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	5と同一個体。胴部懸垂紋構成。	加曽利E 3式	44
7	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	橙	ふつう	口縁部楕円状区画。区画内にR L 縄紋充填施紋。	加曽利E 3式	44
8	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線による分岐懸垂紋構成。R L 縄紋充填施紋。	加曽利E 4式	44
9	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁で、波頂部に突起を付し、突起を基点に隆線を口縁に沿わせる。以下、沈線による曲線モチーフを描き、R L 縄紋を充填施紋。	加曽利E 4式	44
10	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁で、波頂部が緩く外反。2条の沈線による縦位楕円状区画。R L 縄紋充填施紋。	加曽利E 4式	44
11	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい橙	ふつう	波状口縁。沈線による曲線モチーフを描き、R L 縄紋を充填施紋。	加曽利E 4式	44
12	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	明黄褐	ふつう	沈線による分岐懸垂紋構成。L R 縄紋充填施紋。	加曽利E 4式	44
13	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	浅黄橙	ふつう	波状口縁。波頂部を基点に隆線を口縁に沿わせ、以下、沈線による分岐懸垂紋構成。L R 縄紋充填施紋。	加曽利E 4式	44
14	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁部に沈線をめぐらせ、以下、沈線による分岐懸垂紋構成。R L 縄紋充填施紋。	加曽利E 4式	44
15	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線による分岐懸垂紋構成。隆線に沈線に沿わせる。R L 縄紋充填施紋。	加曽利E 4式	44
16	深鉢	口縁部片	粗砂、細礫、白色粒	灰黄褐	ふつう	口縁部に隆線をめぐらせ、以下、沈線による分岐懸垂紋構成。L R 縄紋充填施紋。	加曽利E 4式	44
17	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁部に隆線をめぐらせ、以下、隆線による懸垂紋構成。L R 縄紋充填施紋。	加曽利E 4式	44
18	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁に沿って隆線をめぐらせ、以下、沈線による懸垂紋構成。L R 縄紋充填施紋。	加曽利E 4式	44
19	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	灰黄褐	ふつう	口縁部に隆線をめぐらせ、以下、沈線による懸垂紋構成。L R 縄紋充填施紋。	加曽利E 4式	44
20	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁部に沈線をめぐらせ、以下、条線を縦位施紋する。	加曽利E 4式	44
21	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、白色粒	橙	ふつう	口縁部に隆線をめぐらせ、以下、隆線による分岐懸垂紋構成。R L 縄紋充填施紋。	加曽利E 4式	44
22	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。沈線による楕円状や曲線モチーフを描き、附加条L R + R 縄紋充填施紋。	加曽利E 4式	44
23	深鉢	口縁部片	粗砂、石英、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	波状口縁。R L 縄紋を充填施紋。	加曽利E 4式	44
24	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい橙	ふつう	推定口径45.0cm。口縁部に隆線をめぐらせ、以下、隆線による懸垂紋構成。R L 縄紋縦位充填施紋。	加曽利E 4式	45
25	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁下に沈線をめぐらせ、以下、R L 縄紋を縦位充填施紋。	加曽利E 4式	45
26	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	橙	ふつう	橋状把手。R L 縄紋を充填施紋し、把手の中心を削り取る。	加曽利E 4式	45
27	深鉢	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	波頂部の橋状把手。把手にR L 縄紋縦位施紋。波頂部上端に円形の凹み。	加曽利E 4式	45

遺物観察表

番号	器形	残存	胎土	色調	焼成	形・成調整等	備考	図番
28	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	沈線による胴部懸垂紋構成。R L 縄紋縦位充填施紋。	加曽利 E 3 式	45
29	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	浅黄橙	ふつう	沈線による胴部懸垂紋構成。R L 縄紋縦位充填施紋。	加曽利 E 3 式	45
30	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	沈線による胴部懸垂紋構成。R L 縄紋縦位充填施紋。	加曽利 E 3 式	45
31	深鉢	胴部片	粗砂、石英、白色粒	橙	良好	沈線による胴部懸垂紋構成。R L 縄紋縦位充填施紋。	加曽利 E 3 式	45
32	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	沈線による胴部懸垂紋構成。R L 縄紋縦位充填施紋。	加曽利 E 3 式	45
33	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁部に隆線をめぐらせ、以下、隆線による懸垂紋構成。L R 縄紋充填施紋。	加曽利 E 4 式	45
34	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線による分岐懸垂紋構成。L R 縄紋充填施紋。	加曽利 E 4 式	45
35	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁下に円形刺突、沈線をめぐらせ、以下、R L 縄紋充填施紋。	加曽利 E 4 式	45
36	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、白色粒	橙	ふつう	隆線による胴部懸垂紋構成。R L 縄紋縦位充填施紋。	加曽利 E 4 式	45
37	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	橙	良好	隆線による胴部懸垂紋構成。L R 縄紋縦位充填施紋。	加曽利 E 4 式	45
38	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線による胴部懸垂紋構成。L R 縄紋縦位充填施紋。	加曽利 E 4 式	46
39	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	浅黄橙	ふつう	隆線による胴部懸垂紋構成。L R 縄紋縦位充填施紋。	加曽利 E 4 式	46
40	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	橙	ふつう	沈線により縦位楕円状区画を描き、区画内に R L 縄紋を充填施紋。	加曽利 E 4 式	46
41	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	沈線による縦位楕円状区画内に L R 縄紋充填施紋。胴部上位、下位の 2 帯構成。	加曽利 E 4 式	46
42	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	口縁部に沈線をめぐらせ、以下、沈線による分岐懸垂紋構成。胴部上位、下位の 2 帯構成。附加条 R L + L 縄紋充填施紋。	加曽利 E 4 式	46
43	深鉢	胴部片	粗砂、細礫、白色粒	浅黄橙	ふつう	隆線による分岐懸垂紋構成。R L 縄紋充填施紋。	加曽利 E 4 式	46
44	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線による J 字状紋。R L 縄紋充填施紋。	加曽利 E 4 式	46
45	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線による胴部懸垂紋、縦位楕円状区画。L R 縄紋縦位充填施紋。	加曽利 E 4 式	46
46	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	隆線、沈線による曲線モチーフ。L R 縄紋充填施紋。	加曽利 E 4 式	46
47	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	明黄褐	ふつう	R L 縄紋を縦位充填施紋。	加曽利 E 4 式	46
48	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	浅黄橙	良好	L R 縄紋を縦位充填施紋。	加曽利 E 4 式	46
49	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	橙	ふつう	L R 縄紋を縦位充填施紋。	加曽利 E 4 式	46
50	深鉢	底部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	残存部は無紋。	加曽利 E 式	46
51	深鉢	底部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	残存部は無紋。やや上げ底。	加曽利 E 式	46
52	ミニチュア?	口縁部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	推定口径 6.0cm。縦位の擦痕。	加曽利 E 式?	46
53	深鉢	口縁部片	粗砂多	にぶい橙	良好	波状口縁で、波頂部に環状突起を付し、突起上に沈線を施す。突起、口縁に沿って円形刺突をめぐらせ、以下、沈線によるモチーフを描き、R L 縄紋を充填施紋。	称名寺 I 式	47
54	深鉢	胴部片	粗砂、白色粒	にぶい黄橙	ふつう	沈線により渦巻状、J 字状モチーフを描き、L R 縄紋を充填施紋する。	称名寺 I 式	47
55	深鉢	胴部片	粗砂多	にぶい赤褐	ふつう	沈線による縦位、J 字状モチーフ。	称名寺 II 式	47

第2章 検出された遺構と遺物

石器観察表 ※破損品の法量は現存値

番号	器種	形態	石材	長さ cm	幅 cm	重さ g	残存	調整加工等
56	打 斧	分 銅	黒色頁岩	11.3	8.2	230.5	完形	括れ部エッジ潰れ・捲縛痕あり、上下両端の刃部再生
57	打 斧	分 銅	黒色頁岩	10.2	7.2	217.9	完形	括れ部エッジ潰れ・捲縛痕あり、刃部再生後に廃棄
58	打 斧	短 冊	黒色頁岩	8.3	4.2	86.5	下半欠損	刃部磨耗が不明だが、完成状態に近い段階の破損?
59	打 斧	不明	ホルンフェルス	6.3	6.9	113.1	刃部破片	加工粗く、製作段階の破損?
60	打 斧	分 銅	黒色頁岩	10.3	7.9	182.5	下端刃部欠	括れ部エッジ潰れ、上端刃部は磨耗、下端刃部再生
61	打 斧	分 銅	黒色頁岩	6.6	5.8	53.3	上半欠損	括れ部エッジ潰れ・捲縛痕あり、刃部に磨耗痕あり
62	礫 器		粗粒輝石安山岩	11.2	4.3	219.1	完形	棒状礫の背面側剥離面を打面に裏面側を連続剥離
63	石 核		黒色安山岩	4.8	3.8	28.5	完形	小形・板状剥片の表裏両面で小形剥片を剥離
64	有舌尖頭器		黒色頁岩	4.2	1.5	3.6	茎欠損	表裏両面に第一次剥離面を残す、右側縁は鋸歯状
65	石 鏃	凹基無	黒色安山岩	2.1	1.5	1.1	先端欠損	先端部欠損、薄身で完成状態
66	石 鏃	凹基無	黒色安山岩	2.6	1.6	1.2	脚部欠損	先端部衝撃剥離痕あり、使用時破損?
67	削 器		黒色頁岩	5.8	5.0	43.4	完形	剥片裏面に浅い小剥離痕が連続、剥片の稜線磨耗
68	削 器		黒色頁岩	5.0	8.8	54.8	完形	幅広剥片の端部に浅い小剥離痕が連続する
69	加工痕		黒色頁岩	5.7	5.9	45.0	背面被熱	側縁の加工は粗く、加工意図は不明
70	加工痕		黒色頁岩	5.6	5.2	67.4	右半欠損	端部に礫面を取り込み、浅く粗い剥離を施す
71	加工痕		黒色頁岩	5.8	6.0	46.4	完形	幅広剥片の右側縁裏面に粗い剥離を施す
72	加工痕		黒色頁岩	6.2	4.0	40.7	完形	幅広端部に粗い加工、刃部磨耗あり
73	凹 石		粗粒輝石安山岩	10.3	5.8	237.0	完形	表裏両面中央に類ロート状の凹穴1、左側集合打痕
74	凹 石		粗粒輝石安山岩	6.9	7.3	177.2	下半欠損	表裏両面中央に類ロート状の凹穴2、先端集合打痕
75	磨 石		粗粒輝石安山岩	13.2	8.8	917.0	完形	表裏両面とも磨耗、左側縁は打痕・磨耗
76	磨 石		粗粒輝石安山岩	14.0	6.9	555.4	完形	楕円偏平礫の背面に磨耗面が形成、小口部に打痕
77	磨 石		花崗岩	14.6	8.4	762.1	下半欠損	表裏両面とも磨耗、礫周辺は風化による劣化で破損
78	石製品		粗粒輝石安山岩	10.5	8.4	319.0	完形	表裏面に磨耗・平滑な研磨面?、右側面に集合打痕
79	石製品		粗粒輝石安山岩	12.6	7.8	331.9	完形	右側縁・先端部にノッチ状の窪み、用途不明
80	石 皿	有 縁	粗粒輝石安山岩	19.7	10.5	2051.0	上半1/4	使用面の磨耗度は低い、裏面にロート状の窪み多数
81	石 皿	有 縁	粗粒輝石安山岩	13.1	16.1	1196.1	破片	使用面中央が大きく窪む、裏面にロート状の凹穴2

石器に関する観察所見

土坑らしいものが、4区の深掘りで検出されているのは先述した。これに関係するのであろう、遺構確認や溝などから、剥片類73点、礫石器37点の合計110点が出土している。報告には、このうち26点を掲載した。調査ならびに整理の過程で気づいたことも多く、以下列記する。

- 1 石材は、剥片類が黒色頁岩・黒色安山岩を用い、礫石器類に粗粒輝石安山岩を用いる。ほか玉髄、変質玄武岩、珪質頁岩、砂岩等がある。
- 2 剥片類は、打面部のある通常剥片が圧倒的多数を占め、打製石斧の調整剥片は少量である。その中で黒色頁岩については、礫面を大きく残すものが多い。打製石斧については、遺跡内で製作した可能性は低い。石鏃は完成状態にある。
- 3 打製石斧は、7点のうち4点が中期から後期に多い分銅型で、捲縛痕や刃部の磨耗痕が顕著に見られる。
- 4 打製石斧や石皿等の使用痕からみて、調査区内に住居跡等遺構の存在していた可能性が高い。

第3章 自然科学分析

1. 南久保遺跡の土層とテフラ

(株) 火山灰考古学研究所

1. はじめに

関東平野北西部に位置する伊勢崎市とその周辺に分布する後期更新世以降に形成された地層の中には、赤城、榛名、浅間など北関東地方とその周辺の火山、中部地方や中国地方さらには九州地方などの火山に由来するテフラ（火山砕屑物、いわゆる火山灰）が多く認められる。テフラの中には、噴出年代が明らかにされている指標テフラがあり、これらとの層位関係を遺跡で求めることで、遺構の構築年代や遺物包含層の堆積年代を知ることができるようになっている。

そこで、発掘調査の際に、層位や年代が不明な土層や遺構が検出された伊勢崎市南久保遺跡においても、地質調査を行い土層層序を記載するとともに、採取した試料を対象にテフラ検出分析及び屈折率測定を行って指標テフラの層位を把握し、土層や遺構の層位や年代に関する資料を収集することになった。

調査分析の対象となった地点は、2区南壁東部、2区南壁6号溝・流路間、2区西部深掘トレンチ、3区西壁南部、3区西壁溝北、3区東部深掘地点、4区As-B下面の7地点である。

2. 土層の層序

(1) 2区南壁東部

2区南壁東部では、下位より黄灰色土（層厚4cm以上、V層）、黒灰褐色土（層厚7cm、IV-b層）、黄灰色や白色の軽石を多く含む黒灰褐色土（層厚11cm、軽石の最大径8mm、IV-a層）、黄灰色砂層（層厚19cm、III-c層）、色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚6cm、III-b層）、若干色調が暗い灰褐色土（層厚3～12cm）、黄灰色シルト層（最大層厚9cm、以上III-a層）、黄灰色砂のブロックを少量含む砂混じり灰褐色土（層厚7cm、II-a層）、鉄分を多く含む黄色土（層厚5cm）、灰褐色土（層厚6cm）、若干色調が明るい灰褐色土（層厚6cm）、黄灰色土（層厚10cm）、鉄分を多く含む黄色土（層厚2cm、以上I-c層）、灰色土（層厚12cm、I-b層）、灰色作土（層厚15cm、I-a層）が認められる（図1）。

なお、1区南東部における発掘調査では、III-c層に覆われた鬼高式土器（7世紀後半頃）を共存する住居址が検出されている。

(2) 2区南壁6号溝・流路間

2区南壁6号溝・流路間では、下位より黒灰褐色土（層厚15cm以上、IV-b層）、黄灰色や白色の軽石を多く含む色調がとくに暗い灰褐色土（層厚8cm、軽石の最大径7mm、IV-a層）、黄灰色砂層（層厚14cm、III-c層：第1洪水堆積物）、砂混じり灰色土（層厚8cm、III-a層）、暗灰褐色砂質土（層厚5cm、II-a層）、砂混じり黄灰褐色土（層厚2cm）、灰褐色土（層厚10cm）、黄灰色土（層厚2cm）、黄色がかった灰色土（層厚12cm、以上I-c層）、灰色土（層厚7cm、I-b層）、灰色作土（層厚17cm、I-a層）が認められる（図2）。

(3) 2区西部深掘トレンチ

2区西部深掘トレンチでは、下位より淘汰の良い灰色砂層（層厚30cm以上）、黄灰色砂層（層厚24cm）、黄白色軽石混じりで不淘汰な黄灰色砂層（層厚25cm、軽石の最大径4mm）、暗灰色土（層厚28cm）、黄灰色砂質

第3章 自然科学分析

土（層厚15cm，Ⅴ層）、わずかに褐色がかった黒灰色土（層厚16cm，Ⅳ-b層）、黄灰色軽石を多く含み色調がとくに暗い暗灰褐色土（層厚10cm以上，軽石の最大径8mm，Ⅳ-a層）が認められる（図3）。発掘調査では、これらのうち黄灰色砂質土中から縄文時代中期の土器が検出されているらしい。

（4）3区西壁南部

3区西壁南部では、下位より淘汰の良い黄灰色砂層（層厚1cm）、灰色がかった暗褐色土（層厚5cm）、灰褐色土（層厚13cm）、黒灰褐色土（層厚13cm）、成層したテフラ層（層厚2.3cm，Ⅱ-b層）、黒みがかった暗灰褐色砂質土（層厚2cm）、淘汰の良い黄白色砂層（層厚2cm）、砂混じり暗灰褐色土（層厚10cm以上）が認められる（図4）。

これらのうち、成層したテフラ層は、下位より青灰色砂質細粒火山灰層（層厚0.3cm）と黄灰色粗粒火山灰層（層厚2cm）からなる。このテフラ層は、層相から1108（天仁元）年に浅間火山から噴出した浅間Bテフラ（As-B，荒牧，1968，新井，1979）に同定される。発掘調査では、その下位の黒灰褐色土から9～10世紀の土器片が検出されている。

（5）3区西壁溝北

3区西壁溝北では、下位より黒灰褐色土（層厚20cm以上，Ⅳ-b層）、黄灰色軽石を多く含む黒灰褐色土（層厚6cm，軽石の最大径6mm）、黄灰色や白色の軽石を含む黒灰褐色土（層厚6cm，軽石の最大径11mm）、黄白色砂質細粒火山灰層（レンズ状，最大層厚1cm）、黒灰褐色土（層厚1cm，以上Ⅳ-a層）、黄色がかった灰色土（層厚14cm，Ⅲ-c層）、褐色がかった暗灰色土（層厚11cm，Ⅲ-a層）、黄灰色粗粒火山灰層（層厚3cm，Ⅱ-b層）、砂を多く含む暗灰褐色土（層厚16cm，Ⅱ-a層）、灰色土（層厚16cm）、黄灰色土（層厚4cm）、白色粗粒火山灰層（層厚0.2cm，以上Ⅰ-c層）、灰色土（層厚22cm，Ⅰ-b層）、灰色作土（層厚13cm，Ⅰ-a層）が認められる（図5）。

なお、本地点では、黄白色砂質細粒火山灰層とほぼ同レベルに、震動に伴う流動化により形成されたと考えられる灰色シルト層の堆積が認められる。したがって、Ⅳ-a層形成時あるいはその後に震動に伴う地層の流動化が発生した可能性が考えられる。

（6）3区東部深掘地点

3区東部深掘地点では、下位より青みを帯びた暗灰色砂質泥層（層厚15cm以上）、暗灰色砂質泥層（層厚33cm）、灰色砂層（層厚7cm）、若干色調が暗い灰色シルト質砂層（層厚16cm）、淘汰の良い灰色砂層（層厚17cm）、黄色がかった灰色砂層（層厚12cm）、黄色がかった灰色シルト質砂層（層厚16cm）、黄色軽石混じり黄灰色砂層（層厚24cm，軽石の最大径3mm）、砂混じり暗灰色土（層厚24cm）、黄灰色砂層（層厚18cm，Ⅴ層）、黄灰色軽石や白色軽石を含む黒灰褐色土（層厚18cm，軽石の最大遺影17mm，Ⅳ-a層）、砂混じり暗灰褐色土（層厚21cm以上）が認められる（図6）。発掘調査では、上位より3層目の黄灰色砂層中から縄文時代中期の遺物が検出されているらしい。

（7）4区As-B下面

4区As-B下面では、下位より暗灰褐色土（層厚9cm）、黒灰褐色土（層厚15cm）、褐色がかった黒灰褐色土（層厚4cm）、成層したテフラ層（層厚5.3cm，Ⅱ-b層）、灰色がかった褐色砂質土（層厚4cm，Ⅱ-a層）が認め

1. 南久保遺跡の土層とテフラ

られる(図7)。これらのうち、成層したテフラ層は、下位より青灰色砂質細粒火山灰層(層厚0.3cm)、黄灰色粗粒火山灰層(層厚4cm)、桃色細粒火山灰層(層厚1cm)からなる。このテフラ層は、その層相からAs-Bに同定される。

3. テフラ検出分析

(1) 分析試料と分析方法

2区南壁東部、2区南壁6号溝・流路間、2区西部深掘トレンチ、3区西壁溝北の4地点において採取された試料のうち、10点についてテフラ検出分析を行い、軽石や火山ガラスなどテフラ粒子の特徴やその産出状況の把握を行った。分析の手順は次の通りである。

- 1) 試料8gを秤量。
- 2) 超音波洗浄により泥分を除去。
- 3) 80°Cで恒温乾燥。
- 4) 実体顕微鏡下でテフラ粒子の量や特徴を観察。

(2) 分析結果

テフラ検出分析の結果を表1に示す。2区南壁東部では、試料7、試料6、試料3で良く発泡した灰白色軽石(最大径6.1mm)を検出した。この軽石は斑晶に斜方輝石や単斜輝石をもち、試料7や試料6に比較的多く含まれている。これらの試料には、この軽石の細粒物である灰白色の軽石型ガラスも含まれている。また、試料7には、ごく少量ながら細粒の白色軽石(最大径2.0mm)やその細粒物である白色の軽石型ガラスも含まれている。ただし、その斑晶については細粒で量が非常に少ないために不明である。このような白色の細粒型ガラスは、試料7のほか試料4や試料3でも認められる。

試料1には、比較的良く発泡した淡褐色の軽石(最大径3.8mm)や、その細粒物である淡褐色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。

2区南壁6号溝・流路間の試料2には、良く発泡した灰白色軽石(最大径2.6mm)や、その細粒物である灰白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。また、ごく少量ながら、白色の軽石型ガラスも認められる。2区西部深掘トレンチの試料2には、白色や無色透明の軽石型ガラスがごく少量含まれている。

3区西壁溝北の試料3には、さほど発泡の良くない白色軽石(最大径2.1mm)が少量、またその細粒物である白色軽石型ガラスが比較的多く含まれている。軽石の斑晶には、普通角閃石や斜方輝石が認められる。この試料には、ほかにごく少量の灰白色軽石型ガラスも認められる。試料2には、比較的良く発泡した淡褐色の軽石最大径(2.2mm)や、その細粒物である淡褐色の軽石型ガラスが多く含まれている。この軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が含まれている。さらに試料1には、良く発泡し光沢をもつ白色軽石(最大径2.8mm)や、その細粒物である白色の軽石型ガラスが比較的多く含まれている。軽石の斑晶には、斜方輝石や単斜輝石が認められる。

4. 屈折率測定

(1) 測定試料と測定方法

テフラ検出分析の対象となった試料のうち、2区南壁東部の試料6、2区西部深掘トレンチの試料2、3区

第3章 自然科学分析

西壁溝北の試料2の3点に含まれる火山ガラスについて、温度変化型屈折率測定装置（古澤地質社製MAIOT）により、火山ガラスの屈折率（ n ）の測定を実施した。なお、2区東部の試料6については灰白色軽石、また3区西壁溝北の試料2については淡褐色軽石を各々実顕微鏡下で手選して測定の対象とした。

（2）測定結果

屈折率測定の結果を表2に示す。2区南壁東部の試料6に含まれる火山ガラス（32粒子）の屈折率（ n ）は、1.514-1.519である。また、2区西部深掘トレンチの試料2に含まれる火山ガラス（30粒子）の屈折率（ n ）は、1.501-1.504である。さらに、3区西壁溝北の試料2に含まれる火山ガラス（30粒子）の屈折率は、1.525-1.530である。

5. 考察

屈折率測定の対象となった試料のうち、2区南壁東部の試料6（IV-a層）に含まれる灰白色軽石やその細粒物である火山ガラスは、岩相や火山ガラスの屈折率などから、4世紀初頭に浅間火山から噴出したと推定されている浅間C軽石（As-C, 荒牧, 1968, 新井, 1979, 友廣, 1988, 若狭, 2000）に由来すると考えられる。なお、近い層準から採取された試料7に含まれる白色軽石や白色の火山ガラスについては、詳細が不明なことから、現段階での起源についての考察は難しい。ただし、6世紀初頭に榛名火山から噴出した榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 新井, 1979, 坂口, 1986, 早田, 1989, 町田・新井, 1992）であれば、本遺跡周辺では比較的粗粒か軽石が含まれていることから、その可能性は低いのかも知れない。

2区西部深掘トレンチの試料2に含まれる火山ガラスについては、その形態や色調さらに屈折率などから、約1.3～1.4万年前*1に浅間火山から噴出した浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 新井, 1971, 町田・新井, 2003）や、約1.7万年前*1と約1.6万年前*1に浅間火山から噴出したと考えられている浅間大窪沢第1軽石（As-Ok1, 中沢ほか, 1985, 町田・新井, 1992, 早田, 1996）や、浅間大窪沢第2軽石（As-Ok2, 中沢ほか, 1985, 町田・新井, 1992, 早田, 1996）などの浅間大窪沢テフラ群（As-Ok Group）に由来すると思われる。

3区西壁溝北の試料2に含まれる淡褐色の軽石や火山ガラスについては、その層位や特徴などから、As-Bと考えられる。

以上のテフラ同定成果をふまえて、各地点のテフラや土層について次に考えてみたい。2区南壁東部の試料1に含まれる淡褐色の軽石や火山ガラスも、その岩相からAs-Bに由来すると考えられる。土層の層相から、ここではII-a層がその降灰層準に近い土層と推定される。したがって、2区東部で2層準に認められた洪水堆積物（III-c層およびII-b層）の層位は、少なくともAs-Cより上位でAs-Bより下位にある。さらに、III-c層は1区における発掘調査で鬼高期の住居址を覆うらしいことから、いずれも鬼高期以降の洪水に由来すると考えられる。

2区南壁溝・流路間のIII-c層の下位から採取された試料2に含まれる灰白色の軽石や軽石型ガラスについても、その岩相からAs-Cに由来すると考えられる。また、土層の層相から、ここではII-a層付近にAs-Bの降灰層準があると考えられる。

2区西部深掘トレンチの試料2にAs-YPやAs-Ok Groupの火山ガラスが混在しているらしいことから、この地点で認められた成層した厚い砂層については、少なくともAs-YP降灰後に形成された可能性が高いと思われる*2。最上位の土層中に多く含まれる黄灰色軽石については、岩相からAs-Cに由来すると考えられ、一連の厚い堆積物の上位に、腐植質土層を挟んでAs-C混在層に覆われる黄灰色砂質土が存在していることになる。

1. 南久保遺跡の土層とテフラ

3区東部深掘地点で認められた土層も、この地点の土層とほぼ共通している。なお、ここでは、As-C混じりの土層中に、比較的粗粒の白色軽石が認められることから、Hr-FAも混在していると推定される。

3区西壁南部では、As-Bの上位に淘汰の良い黄白色砂の堆積が認められるが、その成因については現在のところ不明な点が多い。一方、3区西壁溝北のIV-a層に多く含まれる黄灰色軽石も、層位や岩相などからAs-Cに由来すると考えられる。また、試料3が採取されたレンズ状の黄白色砂質細粒火山灰層（IV-a層上部）は、その層相や含まれるテフラ粒子の特徴から、Hr-FAに同定される。その下位の土層中に含まれる比較的粗粒の白色軽石についても、岩相からHr-FAに由来すると思われる。

その上位には、Ⅲ-c層に相当すると思われる若干黄色みをおびた灰色土が認められることから、Ⅲ-c層は、2区での詳細は不明であったものの、やはりHr-FAより上位にあると考えられる。なお、I-b層の基底部付近にある白色粗粒火山灰層は、層位や含まれるテフラ粒子の特徴から、1783（天明3）年に浅間火山から噴出した浅間A軽石（As-A，荒牧，1968，新井，1979）に同定されよう。

6. まとめ

伊勢崎市南久保遺跡において、地質調査とテフラ検出分析さらに火山ガラスの屈折率測定を実施した。その結果、厚い成層した水成堆積物の中およびその上位の腐植質堆積物から、下位より浅間大窪沢テフラ群（As-Ok Group, 約1.6～1.7万年前*1）や浅間板鼻黄色軽石（As-YP, 約1.3～1.4万年前*1）に由来する可能性のある火山ガラス、浅間C軽石（As-C, 4世紀初頭）、榛名二ツ岳渋川テフラ（Hr-FA, 6世紀初頭）、浅間Bテフラ（As-B, 1108年）、浅間A軽石（As-A, 1783年）などのテフラ層やテフラ粒子を検出できた。また、腐植質堆積物には、縄文時代中期の遺物を含む砂層のほか、Hr-FAとAs-Bの間に少なくとも2層の洪水堆積物が挟在されていることが明らかになった。

*1 放射性炭素（14C）年代。As-YPの暦年較正年代については、約1.5～1.65万年前と考えられている（町田・新井，2003）。

*2 本調査後に作成された別の深掘トレンチの土層観察で、成層した砂層の下位においてAs-YPの堆積が認められたらしい（群馬県埋蔵文化財調査事業団、岩崎泰一氏談）。

文献

- 新井房夫（1962）関東盆地北西部地域の第四紀編年。群馬大学紀要自然科学編，10，p.1-79。
新井房夫（1979）関東地方北西部の縄文時代以降の示標テフラ層。考古学ジャーナル，no.157，p.41-52。
荒牧重雄（1968）浅間火山の地質。地研専報，no.45，65p。
町田 洋・新井房夫（1992）火山灰アトラス。東京大学出版会，276p。
町田 洋・新井房夫（2003）新編火山灰アトラス。東京大学出版会，336p。
中沢英俊・新井房夫・遠藤邦彦（1984）浅間火山，黒斑～前掛期のテフラ層序。第四紀学会講演要旨集，no.14，p.69-70。
坂口 一（1986）榛名二ツ岳起源FA・FP層下の土師器と須恵器。群馬県教育委員会編「荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡」，p.103-119。
早田 勉（1989）6世紀における榛名火山の2回の噴火とその災害。第四紀研究，27，p.297-312。
早田 勉（1996）関東地方～東北地方南部の示標テフラの諸特徴～とくに御岳第1テフラより上位のテフラについて。名古屋大学加速器質量分析計業績報告書，7，p.256-267。
友廣哲也（1988）古式土師器出現期の様相と浅間山C軽石。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「群馬の考古学」，p.325-336。
若狭 徹（2000）群馬の弥生土器が終わるとき。かみつつけの里博物館編「人が動く・土器も動く～古墳が成立する頃の土器の交流」，p.41-43。

第3章 自然科学分析

表1 テフラ検出分析結果

地点名	試料	軽石・スコリア			火山ガラス		
		量	色調	最大径	量	形態	色調
2区南壁東部	1	*	淡褐	3.8	**	pm	淡褐
2区南壁東部	3	*	白, 灰白	2.1, 2.3	**	pm	白, 灰白
2区南壁東部	4				*	pm	白
2区南壁東部	6	**	灰白	4	**	pm	灰白
2区南壁東部	7	**	灰白 > 白	6.1, 2.0	**	pm	灰白, 白
2区南壁溝・流路間	2	**	灰白	2.6	**	pm	灰白, 白
2区西部深掘トレンチ	2				*	pm	白, 透明
3区西壁溝北	1	**	白 (光沢)	2.8	**	pm	白
3区西壁溝北	2	**	淡褐	2.2	***	pm	淡褐
3区西壁溝北	3	*	白	2.1	**	pm	白 > 灰白

****: とくに多い, ***: 多い, **: 中程度, *: 少ない. 最大径の単位は, mm.

bw: バブル型, md: 中間型, pm: 軽石型.

表2 屈折率測定結果

地点名	試料	火山ガラスの屈折率 (n)	測定粒子数
2区南壁東部	6	1.514-1.519	32
2区西部深掘トレンチ	2	1.501-1.504	30
3区西壁溝北	2	1.525-1.530	30

屈折率の測定は温度変化型 (MAIOT) による

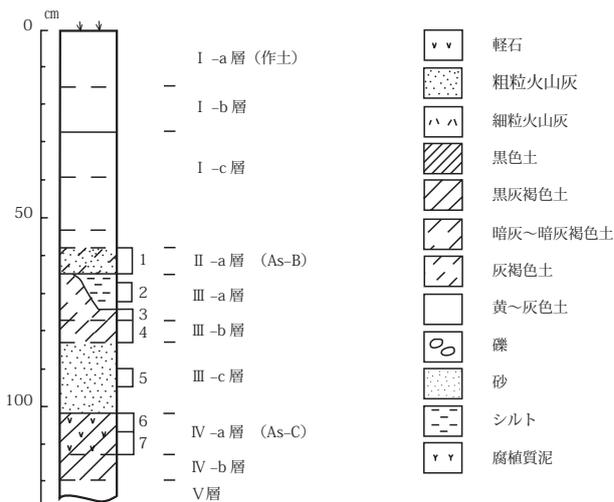


図1 2区南壁東部の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

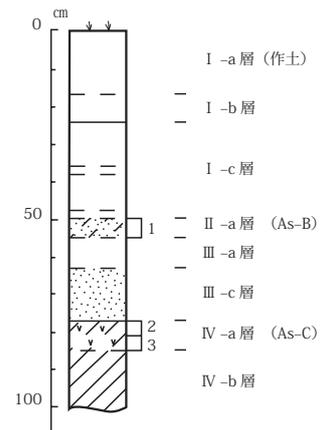


図2 2区南壁6号溝・流路間地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

1. 南久保遺跡の土層とテフラ

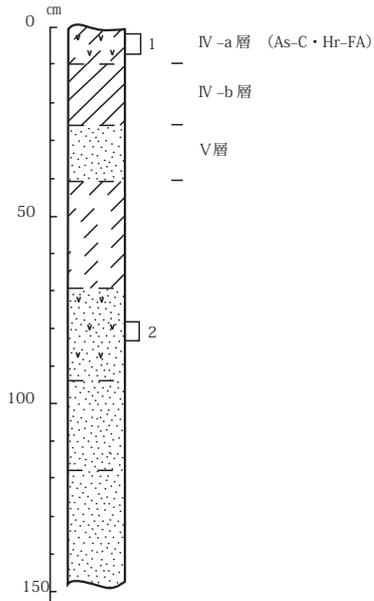


図3 2区西部深掘トレンチの土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

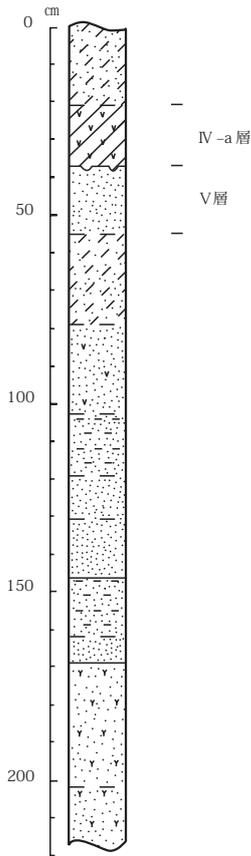


図6 3区東部深掘地点の土層柱状図

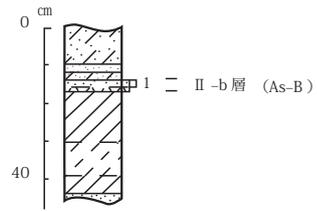


図4 3区西壁南部の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

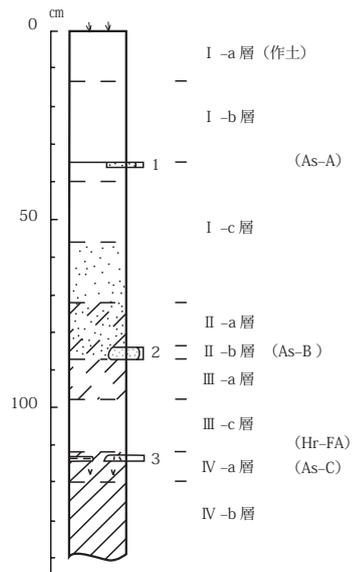


図5 3区西壁溝北地点の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

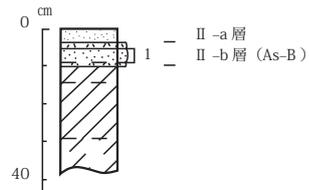


図7 4区As-B下面の土層柱状図
数字はテフラ分析の試料番号

2. 南久保遺跡におけるプラント・オパール分析

(株)火山灰考古学研究所

1. はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内にガラスの主成分である珪酸 (SiO_2) が蓄積したものであり、植物が枯れたあとも微化石 (プラント・オパール) となって土壤中に半永久的に残っている。プラント・オパール分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネの消長を検討することで埋蔵水田跡の検証や探査が可能である (杉山, 2000)。

2. 試料

試料は、2区南壁東部と4区As-B下面の2地点から採取された計2点である。試料採取層位を分析結果の柱状図 (図1) に示す。

3. 分析法

プラント・オパール分析は、ガラスビーズ法 (藤原, 1976) を用いて、次の手順で行った。

- 1) 試料を105℃で24時間乾燥 (絶乾)
- 2) 試料約1gに対し直径約40 μm のガラスビーズを約0.02g添加 (電子分析天秤により0.1mgの精度で秤量)
- 3) 電気炉灰化法 (550℃・6時間) による脱有機物処理
- 4) 超音波水中照射 (300W・42KHz・10分間) による分散
- 5) 沈底法による20 μm 以下の微粒子除去
- 6) 封入剤 (オイキット) 中に分散してプレパラート作成
- 7) 検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来するプラント・オパールを対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数 (機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位: 10^{-5}g) をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる。イネの換算係数は2.94 (種実重は1.03)、ヒエ属 (ヒエ) は8.40、ヨシ属 (ヨシ) は6.31、ススキ属 (ススキ) は1.24、タケ亜科 (ネザサ節) は0.48である (杉山, 2000)。

4. 分析結果

水田跡 (稲作跡) の検討が主目的であることから、同定および定量はイネ、ムギ類 (穎の表皮細胞)、ヒエ属型、ヨシ属、ススキ属型、タケ亜科の主要な6分類群に限定した。これらの分類群について定量を行い、その結果を表1および図1に示した。

5. 考察

(1) 水田跡の検討

2. 南久保遺跡におけるプラント・オパール分析

水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネのプラント・オパールが試料 1gあたり5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している（杉山，2000）。ただし、密度が3,000個/g程度でも水田遺構が検出される事例があることから、ここでは判断の基準を3,000個/gとして検討を行った。

1) 2区南壁東部

IV-a層（試料3）について分析を行った。その結果、イネが4,700個/gと比較的高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

2) 4区As-B下面

As-B直下層（試料1）について分析を行った。その結果、イネが4,300個/gと比較的高い密度で検出された。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。

(2) イネ科栽培植物の検討（イネ以外）

プラント・オパール分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもムギ類やヒエ属型（ヒエが含まれる）などがあるが、これらの分類群はいずれの試料からも検出されなかった。

6. まとめ

プラント・オパール分析の結果、2区南壁東部のIV-a層および4区As-B下面のAs-B直下層では、イネが比較的多量に検出され、稲作が行われていた可能性が高いと判断された。

文献

- 杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）. 考古学と植物学. 同成社, p.189-213.
藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)―数種イネ科栽培植物の珪酸体標本と定量分析法―. 考古学と自然科学, 9, p.15-29.
藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)―プラント・オパール分析による水田址の探査―. 考古学と自然科学, 17, p.73-85.

自然科学分析に対する担当所見

ここでは、テフラとプラントオパール、2つについて分析をした。テフラを少ない遺物にかわって、遺構の時期を判断する資料にしたいというのが目的で、プラントオパールは水田の可否である。テフラの堆積状態は、薄い層で点々とするAs-Bを除けば、As-Cのように攪拌・混土化されていた。分析でも混在ぶりは証明され、その原因が洪水だけなのか、それとも耕作によるものか課題を残した結果となっている。

成果といえるのは、As-YP が確かめられ、As-OK も可能性が示されたことである。台地の存在が示唆できたこと、形成の手掛かりが得られた意義は大きい。しかし、基盤までは達せず、地点を変えて検証する必要がある。また、上層にある河川による堆積物は、出土した遺物から縄文時代の前期や中期という年代観が得られそうである。これまで上武道路や北関東自動車道の調査で明らかとなっている、地形変化に関する追加となる情報である。プラントオパール分析は、4,000個/gを超す高い結果が出た。水田は重層するとみてよく、遺構でどう証明するかがこれからである。

第3章 自然科学分析

表1 南久保遺跡におけるプラント・オパール分析結果

検出密度 (単位: ×100個/g)

分類群	地点・試料 学名	2区南壁東部	4区As-B下面
		3	1
イネ	<i>Oryza sativa</i>	47	43
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	20	7
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	114	72
タケ亜科	Bambusoideae	370	194

推定生産量 (単位: kg / m² · cm): 試料の仮比重を1.0と仮定して算出

イネ	<i>Oryza sativa</i>	1.38	1.27
ヨシ属	<i>Phragmites</i>	1.27	0.45
ススキ属型	<i>Miscanthus type</i>	1.42	0.89
タケ亜科	Bambusoideae	1.78	0.93

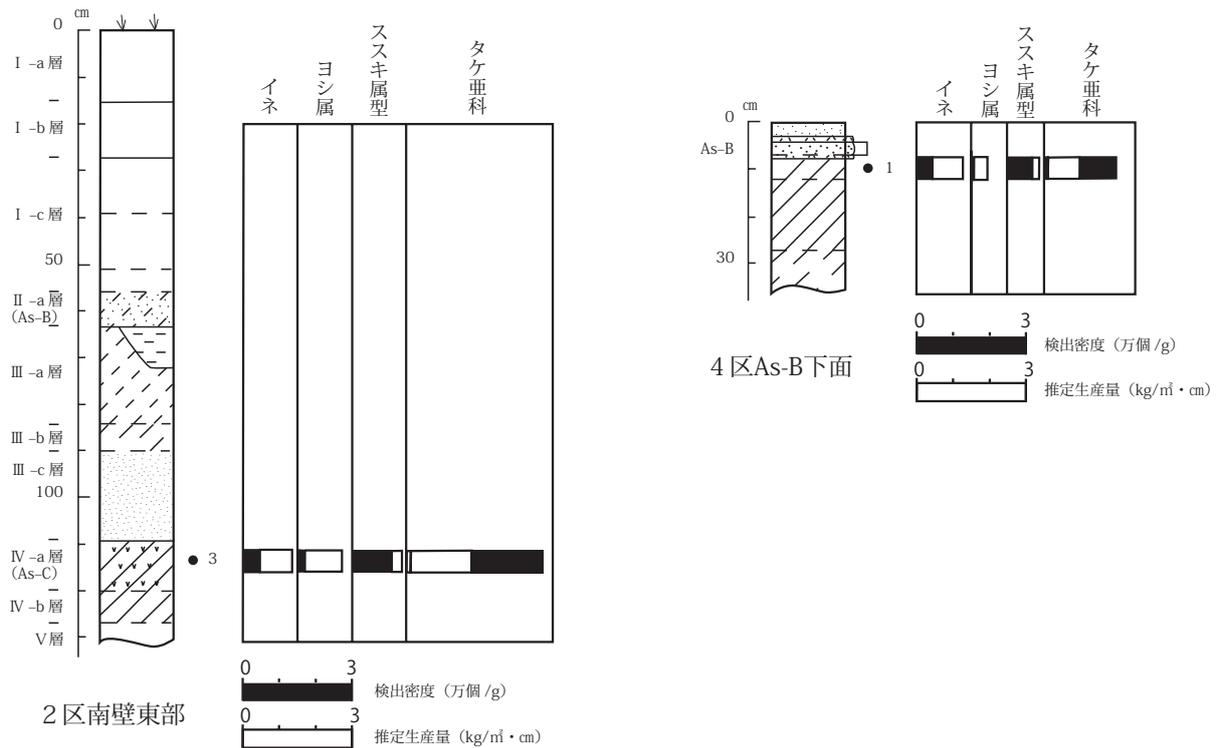


図1 南久保遺跡におけるプラントオパール分析結果

第4章 調査のまとめ

1 はじめに

検出された遺構は、試掘で確認されていた溝や土坑、水田のほかに畠、さらには古墳時代の住居跡や中世の掘立柱建物跡まで内容に富んでいる。遺物は、集落では出土することが稀な鏡、周囲との関係なのかそれとも遺跡の性格を暗示しているのであろう、少量ながら円筒埴輪、瓦が目である。また、出土量のほとんどを占めている縄文土器も、これに付け加えられる。推定範囲の一角だけであるが、点在する調査区がトレンチの代わりとなって、川沿いにある村の様子を知ることができた。

ここでの最大の関心事は、佐位郡衙に通じる官道ではないか、という道路状遺構である。早速、三軒屋遺跡の東、大道西遺跡でも同様な道路状遺構が検出された。片や粕川沿いの低地、一方は谷地を横断している。これまでは寺院や古墳がある台地にばかりで、注意の向けられることの少なかった箇所である。意表をつかれた展開で、俄然、道への関心が高まり、今後への期待がふくらんでいる。

ここでは、検出した遺構の内容からみた遺跡の変遷、道路状遺構の2点についてのべ、まとめとしたい。

2 遺跡の変遷について

遺跡は、粕川の両岸に点々とあるうちのひとつで、蛇行する左岸400m程の広さと推定されている。調査をしたのは、川から見ると反対側、中心よりも南東に寄った一角にあたる。しかし、遺構は、試掘の予想を超えて調査区のすべてに分布している。さらに広がることは確実である。As-YPとロームが、4区で堆積していることは先述した。このように表土の下には、深くなればなるほど現在の様子とは違って、氾濫で小刻みに変化した地形が隠されている。遺跡の変遷は、この地形の変化と関係している。

生活が始まるのは、遺構外とした土器が示す、縄文時代中期か前期後半である。時間の制約から調査は断念したが、図版12に掲載した土坑らしい落ち込みも、この時期のものであろう。河川沿いの自然堤防が居住の場と推定しておいて、今後、周辺での調査で明らかにできることを期待したい。

その後は、およそ古墳時代から中世まで、繰り返し利用されている。畠、次の時代の水田が立地になかった遺構である。ともに開墾がはじまるのはいつなのか、これが課題である。時代の空白があるとすれば、天仁元年浅間山の噴火の時である。水田は、ここでも火山灰に埋もれたままである。繰り返し利用されていると表現したが、復旧の形跡に乏しく、中世とした間には時差が感じられる。

中世には、「樹(植木)の市」に比定される一帯の中にある。検出された遺構からの手掛かりは乏しい。屋敷を確認できたのは成果としても、内部の様子となると皆無であり、年代を知る資料はない。元豊通宝、青磁、白磁、常滑の甕はその可能性である。検討を残したのが溝である。中でも1区から2区を縦断している大規模なものは、用水ならば一遺跡の範囲を超えていると思われる。次への課題である。

2章で用いた時代区分と該当する遺構は、下記のようなのである。

古墳時代	1区、4区の住居跡、1区・2区・3区の畠
郡衙併行期	道路状遺構
平安時代	As-B下水田、4区11号溝
中世	1期 屋敷跡 4区1号溝と4区6号・7号溝で囲われた2つが想定できる。
	2期 溝
	3期 1区・2区・4区土坑、溝、1区・2区掘立柱建物跡

第4章 調査のまとめ

3 古代の道路状遺構について

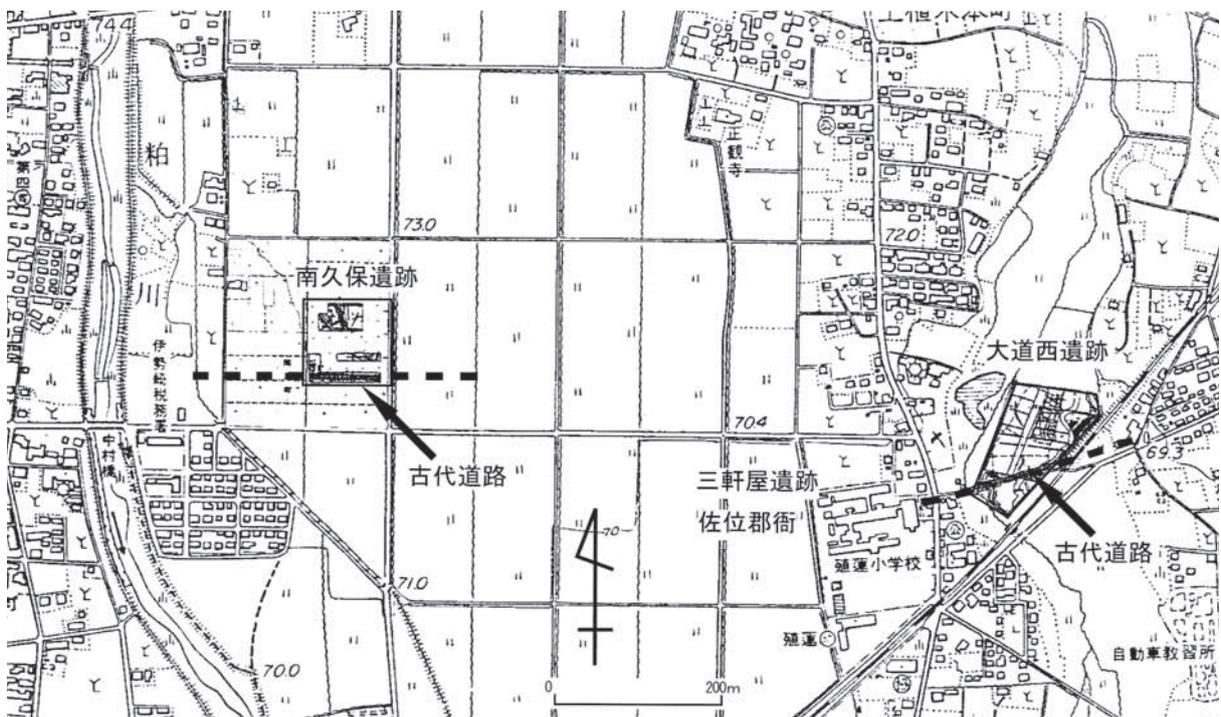
この地域で、長い間取り組んできた問題に、東山道、駅家がある。東山道には、市内北東部を通過している「東道（あづまみち）」を候補にあて、駅家は「植木」をあてるというのが大勢であった。それは物証がモノをいう中で、地名と地籍図を論拠とした机上の研究でもあった。大きく変えたのは、東山道「牛堀・矢ノ原ルート」の発見である。懸案の「東道」をどう解釈するのかという問題点は残ったにしても、物証が大きくモノをいって東山道、駅家は、この地域とは縁のないものようになってしまった。

そこに、郡衙との関係という、全く新しい視点であらわれたのが古代の道路状遺構である。路面の幅は約4mと東山道駅路に比べると見劣りもするが、側溝は完備している。検出された長さは90m、そこに立つと一直線、いかにも官が計画して造る道は違うということを実感することができる。自然、目は先へ、先へと伸びてしまう。東は郡衙に達するのは間違いないとしても、西はどこに向かっているのだろうか。既に調査された遺跡に相当するものはなく、陸軍参謀本部発行迅速図に痕跡もない。検証は、これからである。

意義は、まだあって場所が「東道」がある台地ではなくて、低地であったことは発見とともに二重の驚きである。だからこそ残されていたという見方もできるが、意表をつくといったのはこのことで、これをきっかけに地域を見る目が変わっていくのは確かであろう。これまでは仕切りようになっていた、粕川を超えて地域を東西につなげて見る、そんなことが必要となってきた。

最後にあらためて、道路状遺構の特徴をあげると次のようである。

検出できたのは長さ90m、両側に側溝があり心々での幅が約6m、路面の幅が4.20～4.30mである。走向はN88°Eである。路面の構成は、削り出した地山の上に細砂を混入した暗褐色土を互層にしている。最上面に「硬化面」がある。これが最終面である。時期判定は、側溝である16号溝の覆土に弘仁九年（818）の地震噴砂があり、地震で被災する時には溝が埋没していること。16号溝の覆土中位から8世紀代の杯（第33図参照）が出土していることの2点を理由とした。次の図は、平成21年6月6日に行われた調査遺跡発表会の資料である。三軒屋遺跡、大道西遺跡との関係を知ることができる。



写真図版

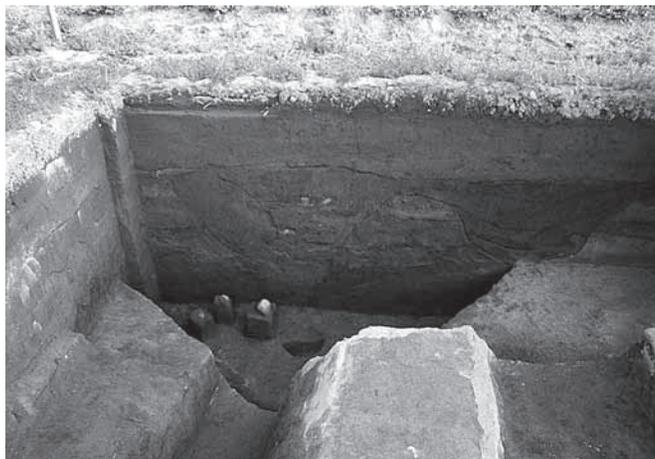


1区で検出された古代の道路を西上空から望む
水田地帯を横断、正面の住宅地に佐位郡衙正倉、三軒家遺跡がある。その先にある↓が地域のシンボル権現山で、手前に大道西遺跡がある。

図版 2



1 1区1号住居跡全景 北西から



2 1区1号住居跡遺物出土状況 北から



3 4区1号住居跡全景 南西から



4 4区1号住居跡カマド全景 南西から



5 4区As-B下水田全景 南から



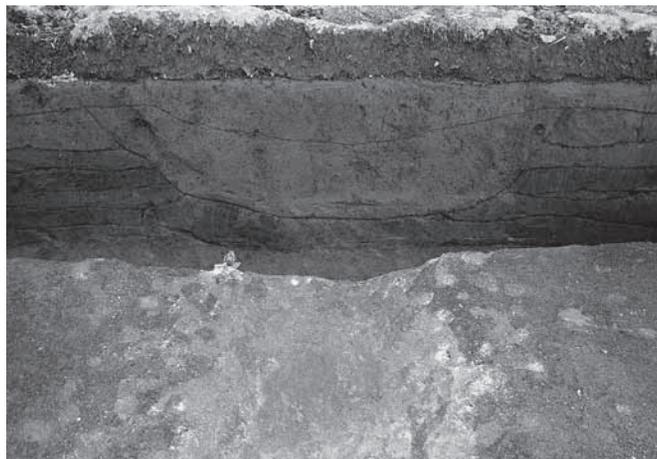
6 4区As-B下水田鋤痕全景 東から



7 4区島全景 南東から



8 4区島全景 南東から



1 1区1号溝断面 南から



2 1区1号溝全景 南から



3 1区2号・3号溝全景 南から



4 1区2号・3号溝A断面 北から



5 1区4号溝全景 北から



6 1区5号溝全景 北から



7 1区4号溝A断面 北から

図版 4



1 1区6号溝全景 東から



2 1区6号溝A断面 東から



3 1区7号溝全景 南から



4 1区7号溝A断面 南から



5 1区8号溝全景 北から



6 1区8号溝A断面 北から



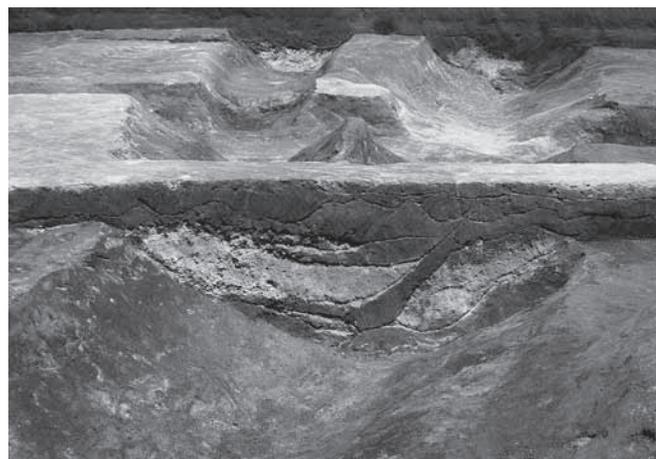
7 1区9号溝全景 東から



8 1区9号溝F断面 東から



1 1区13号・14号溝全景 南から



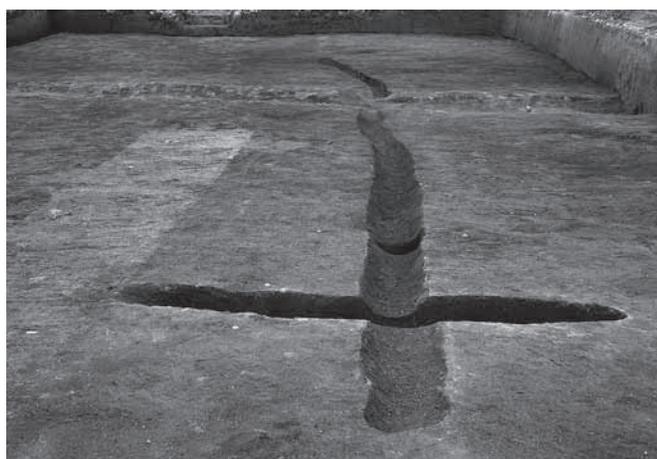
2 1区13号・14号溝B断面 南から



3 2区1号溝全景 北から



4 2区2号溝全景 北東から



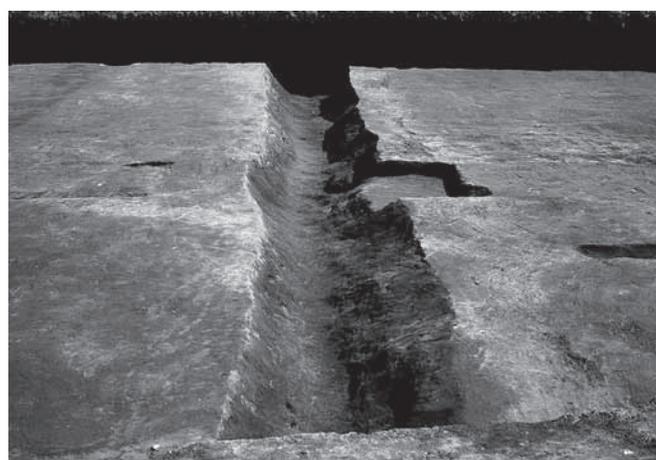
5 2区4号溝全景 東から



6 2区6号溝全景 南から



7 2区6号溝B断面 南から



8 2区7号溝全景 北から

図版 6



1 2区7号溝A断面 北から



2 2区8号・9号溝全景 南から



3 2区8号・9号溝C断面 南から



4 2区6号・9号溝北断面 南から



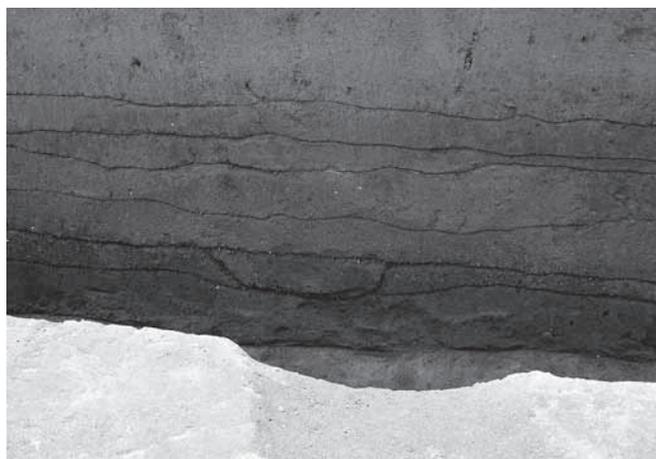
5 2区10号溝全景 北西から



6 2区11号溝全景 南から



7 2区12号溝全景 北西から



8 2区12号溝F断面 北西から



1 2区13号溝全景 北東から



2 2区13号溝断面 北東から



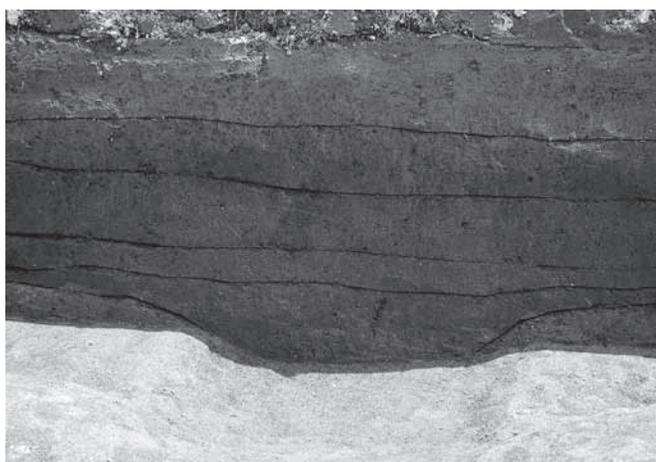
3 3区1号溝全景 西から



4 3区2号溝全景 西から



5 4区1号溝全景 南から



6 4区1号溝A断面 西から



7 4区2号・3号溝全景 南から



8 4区2号溝B断面 北から

図版 8



1 4区3号溝B断面 北から



2 4区3号溝鉄鏃出土状況 東から



3 4区4号溝全景 南東から



4 4区4号溝A断面 南東から



5 4区5号溝全景 東から



6 4区5号溝C断面 東から



7 4区6号溝全景 西から



8 4区6号溝A断面 東から



1 4区7号溝全景 南から



2 4区8号溝全景 西から



3 4区9号・10号溝全景 南から



4 4区11号溝全景 南東から



5 4区12号・13号溝全景 南西から



6 4区14号・15号溝全景 西から



7 4区17号溝全景 南から



8 4区18号溝全景 南から

図版10



1 4区19号溝全景 南から



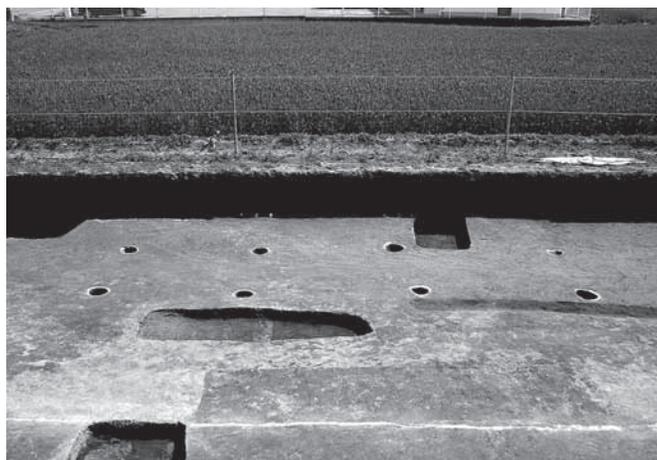
2 4区20号・21号溝全景 南西から



3 4区22号溝全景 南から



4 4区24号溝全景 北西から



5 1区1号掘立柱建物跡全景 北から



6 1区1号掘立柱建物跡A断面 北から



7 2区1号掘立柱建物跡全景 北から



8 2区1号掘立柱建物跡ピット4全景 北から



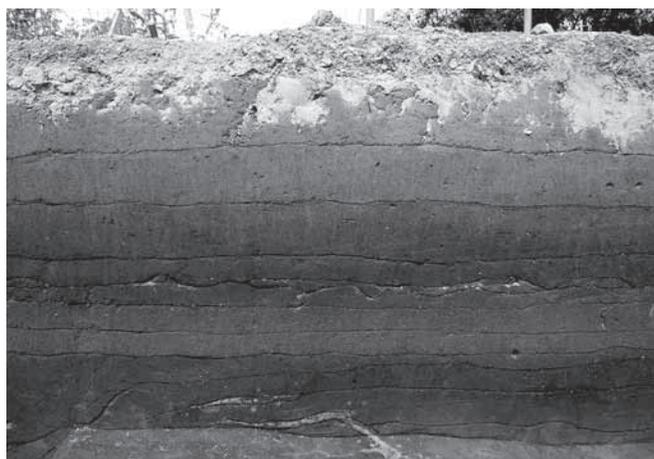
1 1区道路状遺構全景 東から



2 1区道路状遺構全景 西から



3 1区道路状遺構A断面 東から



4 1区道路状遺構A断面拡大 東から



5 1区道路状遺構C断面 西から



6 1区道路状遺構C断面 西から



7 1区道路状遺構砂造成面拡大 南西から



8 1区道路状遺構砂造成面検出状況 南西から

図版12



1 1区1面遺構検出状況 東から



2 2区1面遺構検出状況 東から



3 2区5号溝長頸壺出土状況



4 2区6号溝作業風景 南東から



5 2区2面畠全景 東から



6 3区噴砂 北から



7 3区1面全景 北から



8 4区深掘断面 南から



4区1住1



4区1住2



4区1住3



1区1住1



4区1住4



1区15沟1



1区15沟2



1区15沟3



1区16沟1



1区16沟2



1区16沟3



2区2沟1



2区5沟1



4区1沟1



4区2沟1



4区2沟2



4区2沟3



4区2沟4



4区2沟5



4区3沟1



4区1沟2



4区3沟3



4区3沟7



4区3沟8



1区23土坑1



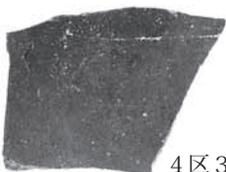
4区3沟2



4区3沟5



4区3沟4



4区3沟6

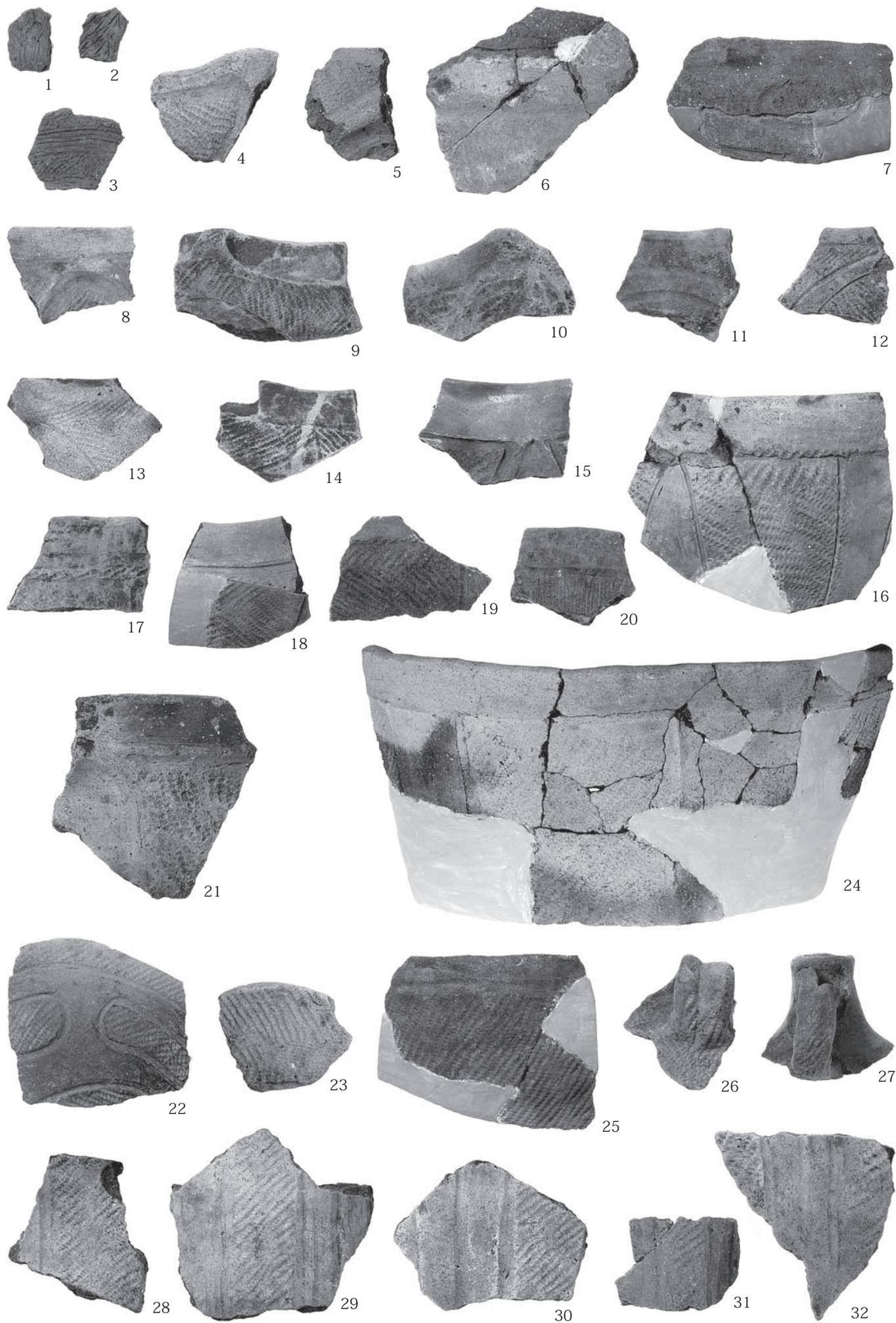


4区1土坑1

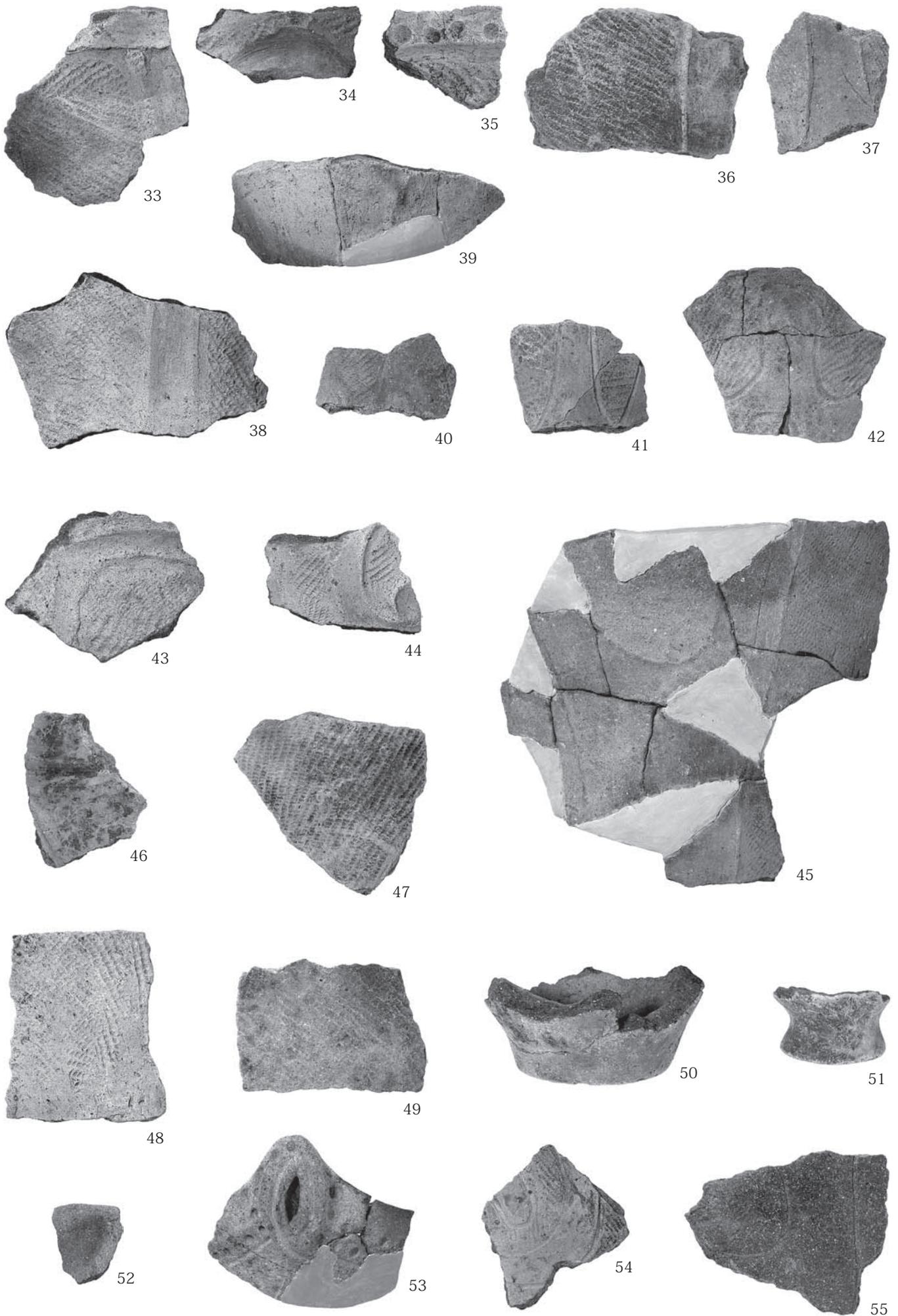


4区4土坑1

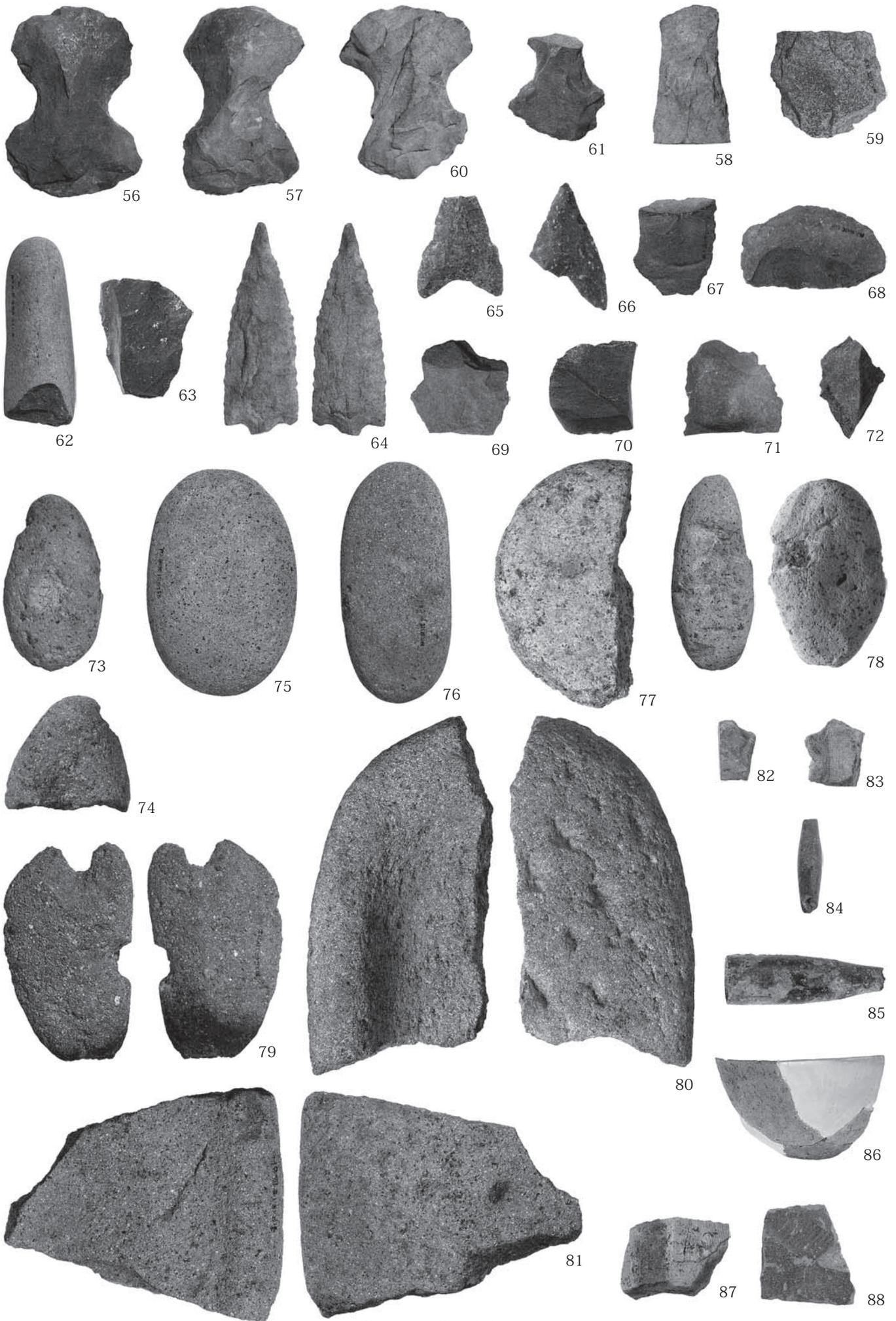
图版14



遺構外出土遺物 (1)



图版16



遺構外出土遺物 (3)

報告書抄録

書名ふりがな	みなみくぼいせき
書名	南久保遺跡
副書名	伊勢崎警察署庁舎移転新築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書
シリーズ番号	475
編著者名	女屋和志雄 / 関晴彦 / 橋本淳 / 岩崎泰一 / 齊田智彦
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
発行年月日	20090911
作成法人 ID	21005
郵便番号	377-8555
電話番号	0279-52-2511
住所	群馬県渋川市北橋町下箱田 784 番地 2
遺跡名ふりがな	みなみくぼいせき
遺跡名	南久保遺跡
所在地ふりがな	いせさきしかしままち
遺跡所在地	伊勢崎市鹿島町
市町村コード	10204
遺跡番号	I S 029
北緯 (日本測地系)	362000
東経 (日本測地系)	1391227
北緯 (世界測地系)	362010
東経 (世界測地系)	1391215
調査期間	20080401-20080531
調査面積	4200
調査原因	警察署庁舎移転新築
種別	集落 / 生産 / その他
主な時代	古墳 / 奈良 / 平安 / 中世
遺跡概要	集落-古墳-竪穴住居 2 + 土師器 / 生産-古代-畠+水田+道+土師器 / 中世-溝 58 + 土坑 41 + ピット 23 + 掘立柱建物跡 2 + 集石 1 + 土師器 + 須恵器 + 石器 + 金属製品 + 陶磁器
特記事項	佐位郡衙に通じていると考えられる 8 世紀代の道跡が検出された。
要約	粕川の左岸水田地帯、佐位郡衙である三軒屋遺跡の西 600 m に位置する。郡衙から伸びる道が東西に通過している。前身の古墳時代の住居跡 2 軒、畠と平安時代の水田、2～3 時期の変遷がある中世の溝、掘立柱建物跡などを調査した。下層には縄文時代の遺構が存在している。テフラ分析、プラントオパール分析の結果を掲載。

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書 第 475 集

南 久 保 遺 跡

－伊勢崎警察署庁舎移転新築事業

に伴う埋蔵文化財発掘調査－

平成 21 年（2009）9 月 4 日 印刷

平成 21 年（2009）9 月 11 日 発行

編集・発行 / 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団

〒 377-8555 群馬県渋川市北橘町下箱田 784 番地 2

電話（0279）52-2511（代表）

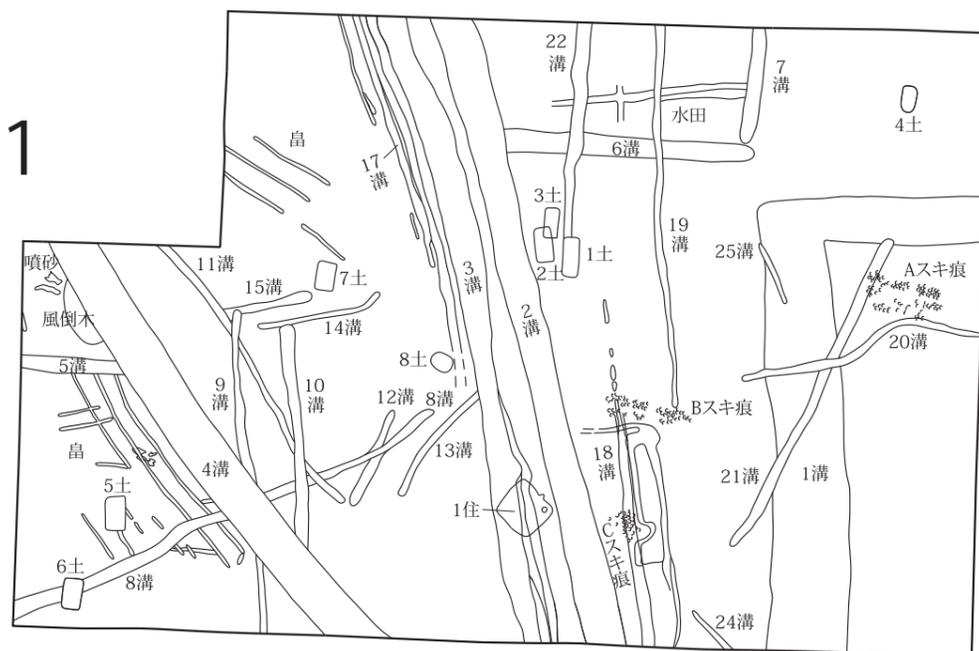
ホームページアドレス <http://www.gunmaibun.org/>

印刷 / 杉浦印刷株式会社

X=37500 Y=-56500

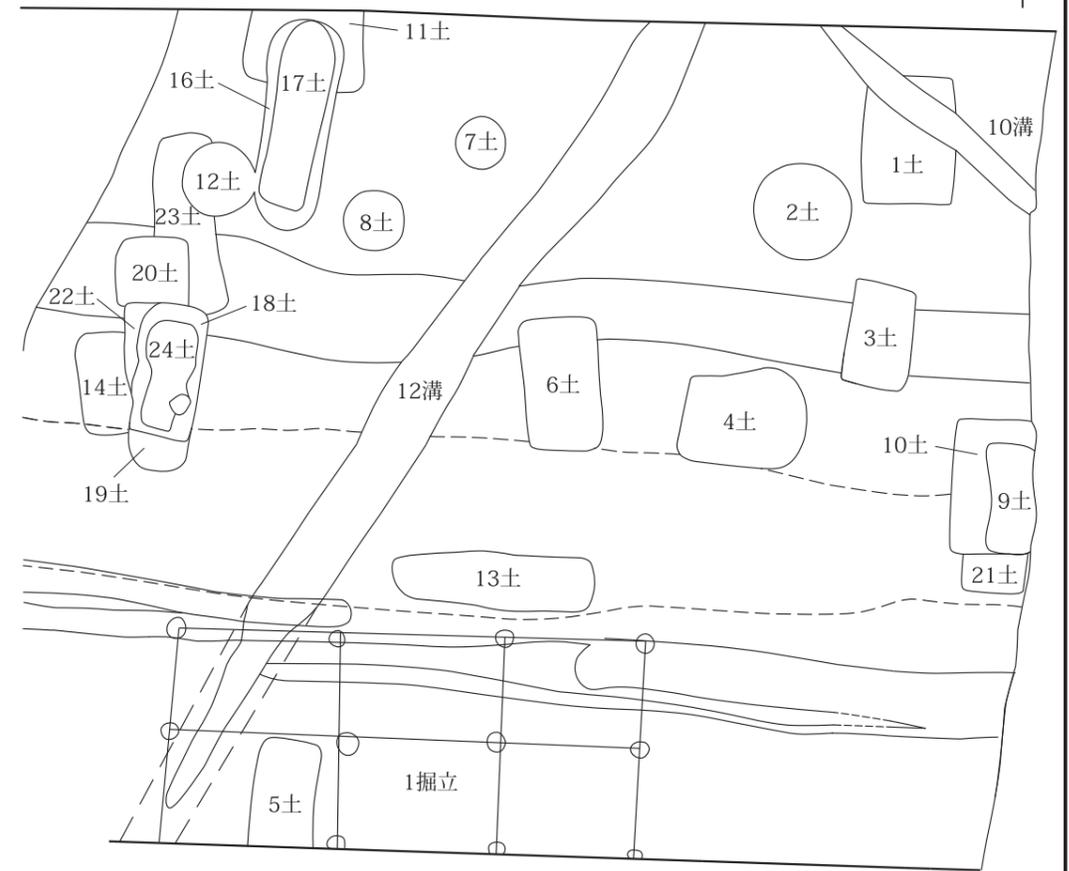
南久保遺跡全体図 1

ピット番号は数字のみで表した



4区

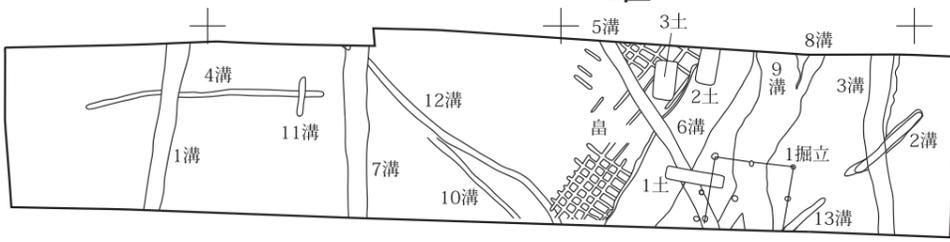
X=37500 Y=-56380



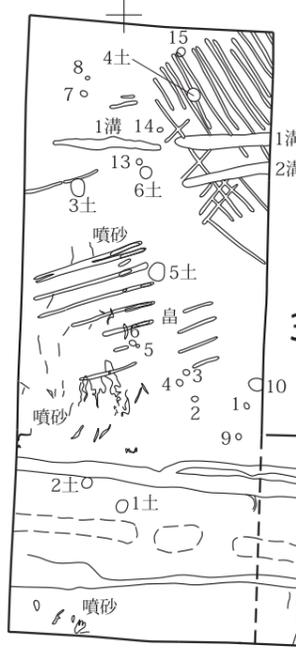
※ 1区東拡大図

X=37460

2区

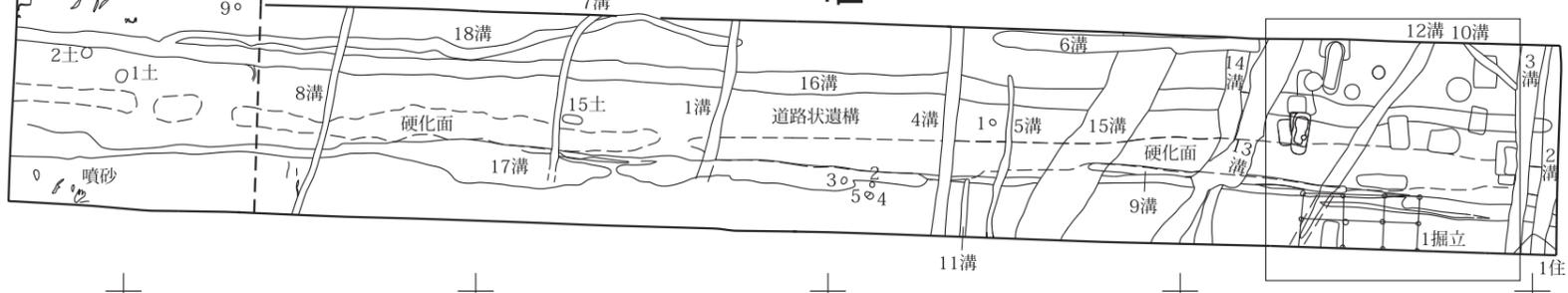


X=37420 Y=-56500



3区

1区

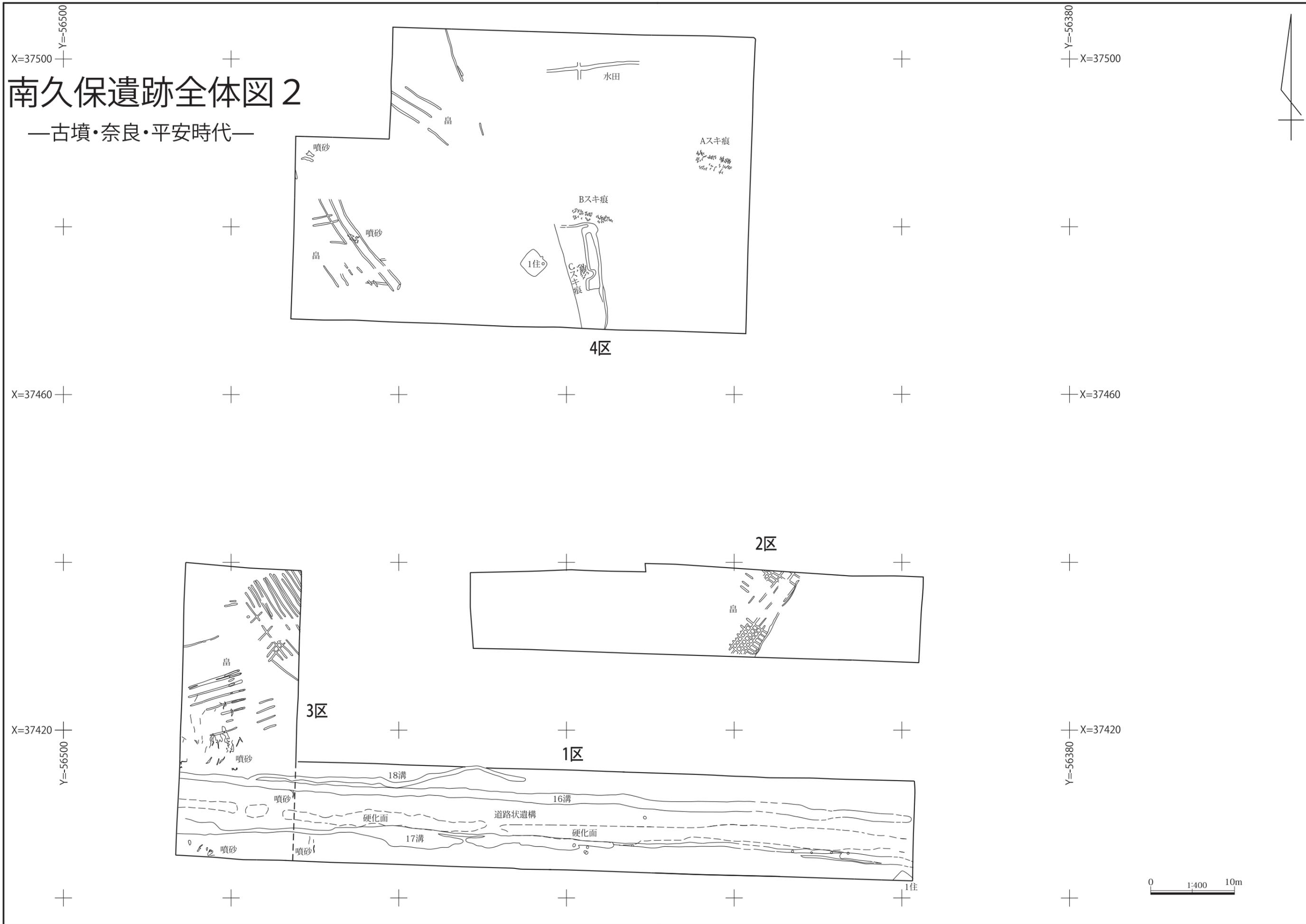


X=37420 Y=-56380



南久保遺跡全体図 2

—古墳・奈良・平安時代—



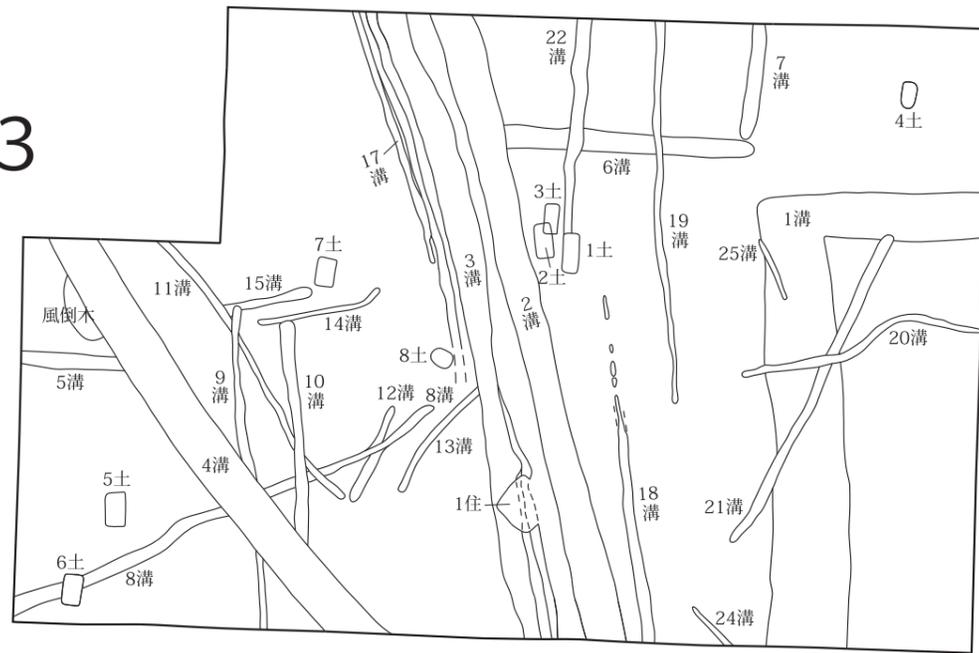
X=37500
Y=-56500

Y=-56380
X=37500

南久保遺跡全体図 3

—中世—

ピット番号は数字のみで表した

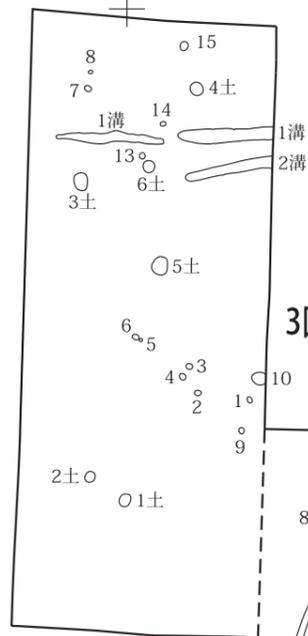


4区

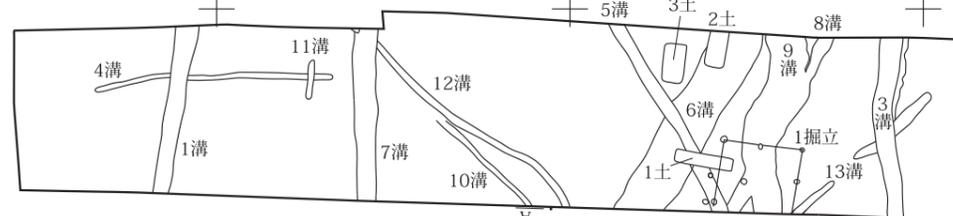
X=37460

X=37460

2区



3区



(第25図A-A')

X=37420

X=37420

1区

